

ISSN 1344-476X

財団法人 東洋文庫年報

2009年度

財団法人 東洋文庫



目次

I	2009年度の東洋文庫	1
II	図書事業	4
	1. 資料の収集	4
	2. 資料の整理	5
	3. 資料の利用と複写サービス	6
	4. 書庫資料の見学と研修	9
	5. 資料の保存整理と複製	9
	6. 書誌情報の公開	10
	7. 電子図書館情報システム	11
III	研究事業	13
	1. 調査研究	13
	A. 超域アジア研究	13
	B. アジア諸地域研究	15
	C. 資料研究	28
	D. 地域研究プログラム	29
	E. 受託研究	30
	F. 日本学術振興会科学研究費補助金による調査研究	31
	G. その他の民間学術助成金による調査研究	32
	H. 東洋文庫研究員等研究課題一覧	32
	2. 研究資料出版	39
	A. 定期出版物刊行	40
	B. 論叢等出版	40
	C. 研究資料の復刻・増刷の刊行サービス	41
	3. 研究情報普及	41
	A. 講演会	41
	B. データベース公開	44
	C. 研究者の交流および便宜供与のサービス	44

4. 普及・広報活動	46
A. 展示企画	46
B. 東洋文庫ホームページの運営	46
C. 東洋文庫友の会の運営	46
D. グッズ製作・販売	47
E. その他	47
5. 研究員等の研究業績	47
IV 業務報告	106
1. 総務報告	106
2. 人事報告	108
3. 会計報告	112
V 役職員名簿	120
1. 役員	120
2. 評議員	121
3. 東洋学連絡委員会委員	121
4. 名誉研究員	122
5. 職員・研究員	123
6. 客員研究員	126

I. 2009年度の東洋文庫

2009年度において東洋文庫が実施した諸事業の経過、及び内容の要旨は次の通りである。

まず本年度内に生じた役員・職員の異動について述べる。6月の評議員会にて、任期満了となった理事10名全員が再任された。又、任期満了となった監事2名は、東條和彦監事が再任され、新たに西村敏行氏が新任された。評議員は16名全員が6月の評議員会をもって任期満了となり、理事会にて、荒蒔、有馬、梅村、岸本、久保、後藤、白井、瀬谷、西田、平野、増田、間野、Wangの各氏13名が再任され、清家篤、長尾真、濱田純一、松本紘の各氏が新任された。これにて、当文庫は理事14名、監事2名、評議員17名の体制となった。

誠に残念ながら、1992年より当文庫理事を歴任頂いた研究顧問石井米雄氏が2010年2月亡くなられた。

尚、職員には本年度は異動がなかったが、図書部櫻井研究員が永年勤続の表彰を受けた。又、総務部青木部長代理は3月より体調不良により休職となった。

2009年4月より、吉田順一早稲田大学教授が新たに東洋学連絡委員会委員に就任された。

文庫の建替えは順調に進行している。昨年度の付属棟並びに書庫棟空調設備等の盛替え工事に引続き、旧事務所棟の解体工事を完了、6月に新本館に着工した。書架工事、展示工事、植栽工事、事務設備についてもそれぞれ発注先が決定し、トータル予算に収まる見通しである。2010年末に新本館完成、その後、移転、旧書庫の解体工事、外構工事を経て、2011年9月末に完工予定。

図書部関係では、1948年より約60年間続いた当文庫と国立国会図書館との支部契約が2009年3月末をもって解消され、当文庫の閲覧室は私立図書館として新たな出発をした。これに伴い、4月1日付けで図書部に資料整理課と閲覧複写課を設置し、いずれも會谷研究員が課長に就任した。又、国立国会図書館より中村邦子氏、新谷芙美子氏の2名の研修員が派遣された。又、蔵書印の改定・整備を実施した。

一方、当文庫のデータベースへの月間アクセス数は本年度も月間約10万件のレベル前後で推移している。本年度の当文庫の図書の増加は、購入6,018冊、受贈

4,277 冊、合計 10,295 冊であった。

研究部では、本年度は定期出版物 9 冊の刊行に加え、論叢類 7 冊を発刊した。又、仏極東学院との協力協定を、同学院院長来日にあわせ、5 年間再延長する覚書を締結した。

また、東洋学講座を春・秋それぞれ 3 回開講した。テーマは、それぞれ「東洋文庫とアジアーその 1、その 2ー」とし、春は「雲南と東南アジアに跨るタイ系民族の世界に行く」(クリスチャン・ダニエルズ氏)、「満洲語の世界を開拓する」(加藤直人氏)、「倭寇と日本・アジアの交流史」(村井章介氏)、秋は「私の東南アジア研究と東洋文庫」(石井米雄氏)、「東洋文庫の朝鮮史料と朝鮮近世財政史研究」(六反田豊氏)、「日本における山海経図－山海経絵と山海異物」(朽尾武氏)であった。会場は建替の関係で、丸の内の三菱商事の会議室で開催した。

又、各種研究会・講演会を計 104 回開催し、合計参加人数は 950 人であった。又、受入れ外国人研究者 3 名、外国人研究者への便宜供与は、アゼルバイジャン、中国、フランス、ポーランド、ロシア、台湾より 32 名に達した。

7 月 1 日付で普及展示部が発足、斯波文庫長が部長に兼務就任した。又、同部の専任職員として、牧野元紀氏を公募により 9 月より嘱託採用した。又、展示関連では 2011 年 10 月のミュージアム開設に向け、6 月の理事会で特定資産「展示開設準備資産」を創設し、開設費用の平準化を図った。

財政面では、三菱金曜会からの年間 55 百万円の特別寄付金は本年度で終了し、来年度よりは年間 60 百万円の維持会費のみとなる。従って、来年度より 2 年間程度は年間収支は赤字となり、運営調整積立資産を取り崩す事となる。尚、当文庫は特定公益増進法人の認可を受けていたが、この更新手続きが諸般の事情で大幅に遅延し、認可更新は 2010 年度にずれ込む事となった。この為、特に維持会寄附金に付き、関係各社に手続き面で迷惑を掛ける結果となってしまった。

内部統制の面では、当文庫の諸規定の整備を継続しており、新たに、資産運用規定とその附則を定めた他、公印規程、組織運営規程、研究支援者雇用規程、給与規程、出張旅費規程、友の会規程の改定を行った。又、職員の英語力向上の為、英語研修補助制度を新設した。

新公益法人への移行については、当文庫は2012年6月申請を目標に準備を進めており、その手順等が2月の理事会・評議員会に報告された。

ホームページのリニューアルを行い、研究部の部分を大幅に充実させると共に、他機関のデータベースへのリンクも充実させ、世界の主要な東洋学文献のデータベースに当文庫のホームページよりアクセス出来る体制とした。

広報活動では、三菱広報委員会が発行している月刊誌「マンスリー三菱」に隔月で東洋文庫の貴重本の紹介が一昨年より行われており、今年度末で12回掲載された。本件は来年度も継続される見通しである。

主要訪問者としては、国際学士院連合会会長一行、三菱重工大宮社長ご夫妻等が来庫された。展示会としては、9月より丸の内の三菱一号館隣接の三菱広報委員会による「三菱デジタル・ギャラリー」にて東洋文庫所蔵品の映像による展示が行われている。

以上

Ⅱ 図 書 事 業

1. 資 料 の 収 集

A. 資料購入

本年度資料購入費の支出総額は 23,638,404 円で、各部門別の冊数内訳は以下のとおりである。

	和漢書(うち非図書)	洋書(うち非図書)	計
超域・現代中国研究	1,364	4	1,368
超域・現代イスラーム研究	4	1,045 (17)	1,049 (17)
東アジア研究	275	5	280
内陸アジア研究	35 (7)	84	119 (7)
インド・東南アジア研究	0	43 (13)	43 (13)
西アジア研究	0	533	533
共通(継続・大型資料)	1,265 (3)	236	1,501 (2)
計	2,943 (9)	1,950 (30)	4,893 (39)

※単位：冊(非図書資料はマイクロフィルム1リール、CD1枚を1冊に換算)

主な購入図書としては以下のものがある。

民国史料叢刊	1,128 冊
モロッコ上院下院議事録	150 冊
光悦謡本柏崎	1 冊
TBRCチャーネ版 DVD	7 枚
インド遺跡コレクション. マイクロフィッシュ	1 箱 232 枚
回族典蔵全書	235 冊
新疆巡撫饒応祺稿本文献集成	38 冊

B. 資料交換

出版物交換の実績は以下のとおりである。

区 分	受 贈			寄 贈		
	和漢書(冊)	洋書(冊)	計(冊)	国内(冊)	国外(冊)	計(冊)
単 行 本	850	114	964	1,140	1,000	2,140
定期刊行物	2,641	672	3,313	3,000	907	3,907
非図書資料	163	41	204	0	0	0
計	3,654	827	4,481	4,140	1,907	6,047

主な受贈資料としては、以下のものがある。

石島紀之氏寄贈マイクロフィルム『雲南日報』他	24 本
遼寧省図書館寄贈『遼寧省図書館六十年』他	7 冊
西村元照氏寄贈『明清風俗史料集成続編』他	13 冊
嶋陸奥彦氏寄贈『朝鮮宗譜』, マイクロフィルム	27 冊, 82 本

C. 蔵書数

収蔵する蔵書総数は 966,334 冊で、和漢書 543,294 冊、洋書 393,240 冊、複写資料 29,800 冊である。

2. 資料の整理

A. 図書

整理冊数は次のとおりである。

和漢図書	1,047 冊 (現代中国研究資料室の 70 冊を含む)
欧米語図書	1,033 冊
アジア諸言語図書	2,687 冊 (イスラム地域研究資料室の 1,639 冊を含む)

整理した主な図書

(1) 新編中華人民共和国地方志	25 冊
(2) 国家図書館蔵敦煌遺書	70 冊
(3) 王重民向達所攝敦煌西域文獻照片合集	30 冊
(4) 清代稿鈔本	27 冊
(5) 中華文化復興運動總會寄贈 明清台湾檔案彙編 第2集	22 冊

B. 雑誌

本年度の受入タイトル・冊数は次のとおりである。なお、そのうち新規受入誌は和・中・韓文 57 タイトル、欧文 10 タイトルである。

	タイトル数		冊数	
	和・中・韓	欧	和・中・韓	欧
受贈	751	213	2,641	672
購入	204	75	1,057	188
小計	955	288	3,698	860
計	1,243		4,558	

C. 新聞

本年度は和・中・韓文で 31 種、欧文については 5 種を受入れた。

3. 資料の利用と複写サービス

A. 閲覧サービス

本年度、閲覧証の新たな交付は 353 名で、内訳は教職員 173 名（外国人 16 名）、研究機関関係者 55 名（外国人 10 名）、大学院生 70 名（外国人 12 名）、大学生 10 名（外国人 1 名）、その他 45 名（外国人 1 名）であった。前年度より交付数が 205 件増加したが、これは閲覧室の運営が国立国会図書館支部東洋文庫より財団法人東洋文庫に移行したのに伴い、支部時代の閲覧証の保持者に対して、改めて財団の閲覧証を交付したことが影響している。

閲覧開館日は 226 日、利用者数は 1,897 名、利用資料数 28,112 冊で、詳細は次のとおりであった。

なお、東洋文庫研究員および職員の研究室等での資料の利用は延べ 571 名、1,785 冊であった。

また、建替工事に伴い、下記の資料が 2008 年 5 月 1 日から工事終了まで、閲覧（複写）利用を停止している。

◇日本語図書の一部の資料：

- ・東洋文庫図書部収集日本語図書（ローマ数字ではじまる請求記号の資料）
- ・近代日本関係日本語文献（ローマ数字ではじまる請求記号の資料）
- ・藤井文庫（「特-」ではじまる請求記号の資料など）

- ・ 辻文庫日本文図書（「T(J)-」ではじまる請求記号の資料）
- ・ 梅原コレクション日本文図書（「梅-」ではじまる請求記号の資料。中国語図書も含む）

◇日本語逐次刊行物の一部の資料：

- ・ 東洋文庫図書部収集日本語逐次刊行物（ローマ数字、もしくは「J」を冠したローマ数字ではじまる請求記号の資料）

◇四庫全書珍本 第二集～：洋装本部分（請求記号が「V-5-B-1001」の資料）

（1）開館日数および閲覧者数

	開館日数	閲覧者数	日平均	昨年同月比 (△印は減)
	(日)	(人)	(人)	(人)
2009年 4月	20	164	8	7
5	17	121	7	△ 33
6	21	186	9	47
7	21	207	10	37
8	20	193	10	△ 16
9	18	148	8	△ 38
10	20	155	8	5
11	17	129	8	33
12	17	145	9	△ 4
2010年 1月	16	137	9	20
2	18	131	8	△ 31
3	21	181	9	1
計	226	1,897	9	28

(2) 閲覧カウンター出納冊数

	和書		漢書		洋書		合計		日平均	昨年同月比 (△印は減)
	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数		
2009年 4月	31	39	331	1,943	62	1,367	424	3,349	167	984
5	48	71	239	986	116	511	403	1,568	92	△ 401
6	41	86	307	1,361	156	827	504	2,274	108	98
7	56	238	339	2,214	119	587	514	3,039	145	1,504
8	58	103	299	2,028	110	591	467	2,722	136	△ 434
9	58	160	240	1,130	214	557	512	1,847	103	△ 768
10	32	211	287	1,562	135	559	454	2,332	117	736
11	85	618	212	1,353	94	298	391	2,269	134	1,054
12	118	686	207	1,221	120	383	445	2,290	135	△ 213
2010年 1月	106	865	161	915	170	299	437	2,079	130	40
2	26	105	204	1,560	88	287	318	1,952	109	△ 982
3	41	71	284	2,060	167	260	492	2,391	114	△ 1,134
計	700	3,253	3,110	18,333	1,551	6,526	5,361	28,112	124	484
比率	11.57%		65.21%		23.22%		100.00%			

B. 複写サービス

国内外の研究者・研究機関の便宜に供するために行ったもので、実績は下記のとおりであった。

(1) マイクロ・フィルム

申込件数	紙焼用撮影齣数	紙焼提供枚数	フィルム提供齣数
203	7,103	9,209	410

(2) 電子複写

申込件数	提供枚数
820	31,233

C. レファレンス

受付数は目録室、閲覧室など合わせて 579 件であった。

D. 資料の貸出

博物館・美術館などが主催しておこなう展覧会への資料の貸出は 4 件で、詳細は次のとおりである。

	展覧会名	主催者	展覧会会期	開催場所	主な資料と数量
1	平成 21 年度春期 企画展「交錯する 文化」	京都大学総合 博物館	2009.4.8 ～ 5.10	京都大学総 合博物館	『廣輿図』全 1 点
2	シリーズ「直弼発 見！」特別企画展 「政治の時代－井 伊直弼と幕末の群 像－」	彦根城博物館	2009.10.30 ～ 11.29	彦根城博物 館	ダレル『ウェ ズリー号上 における清 英交渉』ほ か全 3 点
3	特別展示 江戸 の歌仙絵－絵本 による王朝美の 変容と創意－	国文学研究資 料館	2010.1.8 ～ 2.5	国文学研究 資料館	『歌仙』ほか 全 2 点
4	開府 400 年記念特 別展 名古屋 400 年のあゆみ	名古屋市博物 館 毎日新聞 社中部本社	2010.1.9 ～ 3.7	名古屋市博 物館	『絵本富加美 艸』全 1 点

4. 書庫資料の見学と研修

建替工事に伴い、2008 年度から工事終了まで停止している。

5. 資料の保存整理と複製

2006年度末をもって、製本室並びに撮影室が閉鎖され、原資料の保存整理と劣化資料のマイクロフィルム作成などの作業を行わないことになった。

実施した作業項目と内容は次のとおりである。

雑誌合冊製本（外注）

434 冊

6. 書誌情報の公開

2009年度末現在、当文庫のホームページで提供している目録データベースは下記の35種である。

このうち2009年度新規公開分は※印で示す。各データベース名の後の()は収録件数。

01	中国語逐次刊行物	(4,981 件)
02	日本語逐次刊行物	(2,008 件)
03	欧文逐次刊行物	(2,638 件)
04	朝鮮・韓国語逐次刊行物	(844 件)
05	漢籍資料オンライン検索	(65,505 件)
06	新収蔵漢籍検索	(12,435 件)
07	續修四庫全書	(6,231 件)
08	越南本漢籍検索	(316 件)
※09	朝鮮本漢籍検索 2009/7/27 公開	(3,792 件)
11	岩崎文庫（和書貴重書）	(7,966 件)
12	ラテン文字資料	(89,939 件)
13	辻文庫（洋書）の検索	(7,218 件)
14	キリル文字資料	(11,455 件)
15	中国語図書の検索	(51,929 件)
16	日本語図書の検索	(61,672 件)
17	韓国・朝鮮語図書の検索	(4,145 件)
18	藤井文庫オンライン検索	(1,444 件)
19	モンゴル語資料 検索	(1,606 件)
20	アラビア語図書の検索	(14,498 件)
21	ペルシャ語図書の検索	(11,937 件)
22	現代トルコ語図書の検索	(10,635 件)
23	オスマントルコ語図書の検索	(1,337 件)

24	南アジア諸語（アラビア文字）図書検索	(3,620件)
25	キルギス語図書全リスト(PDF)	(約 20 件) ★ 2008 年度に同じ
26	ウイグル語図書全リスト(PDF)	(約 1,100 件) ★ 2008 年度に同じ
27	カザフ語図書全リスト(PDF)	(約 240 件) ★ 2008 年度に同じ
28	スインディー語図書	(188 件)
29	チベット語文献（河口慧海将来蔵外文獻）	(約 500 件) ★ 2008 年度に同じ
30	チベット語文献（米国議会マイクロフィッシュ版）	(約 4,000 件) ★ 2008 年度に同じ
31	ビルマ語図書の検索	(664 件)
32	インドネシア語・マレーシア語図書の検索	(311 件)
33	タイ語資料検索	(879 件)
34	南方史資料	(4,199 件)
35	榎文庫	(9,833 件)

注1：「漢籍統合データベース」は、05 漢籍資料オンライン検索、06 新収蔵漢籍検索、07 續修四庫全書、08 越南本漢籍検索、09 朝鮮本漢籍検索の横断検索用と判断し、リストからは除外

注2：「榎文庫 NDC8 による分類検索」は、35 榎文庫の検索方法の相違に過ぎないものと判断し、リストからは除外

注3：件数を概算できないもののうち、件数に大きな変動がないものは、2008 年度年報の数字を用いた

7. 電子図書館情報システム

2009 年度末現在、当文庫ホームページで提供している「東洋学多言語資料のマルチメディア電子図書館情報システム」は下記のとおりである。

このうち 2009 年度新規公開分は、画像データ：絵入り本 40 件 1,111 コマ、全頁データ：モリソン文庫（洋書稀観本）7 件 3,424 頁、動画データ 5 種である。（※印）

1. 画像データ

1) 地図

- | | |
|----------|----------------|
| ①中華帝国図 他 | 216 件 (216 コマ) |
| ②江戸図 | 22 件 (22 コマ) |

- | | |
|------------------|-----------------|
| 2) 浮世絵 | 36 件 (155 コマ) |
| ※3) 絵入り本 | 61 件 (1,766 コマ) |
| 4) 香港銅版画・水彩画 | 392 件 (416 コマ) |
| 5) 考古器物 (梅原考古資料) | 15,343 件 |

2. 全頁データ

- | | |
|--|-----------------|
| 1) 岩崎文庫 古籍善本 | 55 件 (7,618 頁) |
| ※2) モリソン文庫 洋書稀覯本 | 18 件 (9,451 頁) |
| 3) モリソンパンフレット (G. E. Morrison 収集、中国関係を中心とする小冊子、抜刷) | 260 件 (4,840 頁) |

3. 動画データ

- | | |
|-------------------|--------|
| 1) 香港の祭祀と演劇 (概観) | 約 50 分 |
| 2) 香港広東正一派道士の儀礼 | |
| ① 龍躍頭太平清醮儀礼 | 約 50 分 |
| ② 粉嶺太平洪朝儀礼 | 約 50 分 |
| 3) 中国 (江西) の儺舞・儺戯 | |
| ① 萍郷県の儺舞 | 約 60 分 |
| ② 万載県の儺舞 | 約 40 分 |
| ③ 婺源県の儺舞・儺戯 | 約 50 分 |
| ④ 南豊県石郵村の儺舞 | 約 30 分 |
| 4) 目連戯 | |
| ※ ① 浙江省紹興前良村調腔目連戯 | 約 50 分 |
| ※ ② 祁門県栗木村目連戯 | 約 50 分 |
| ※ ③ 福建仙遊目連戯 | 約 50 分 |
| ※ ④ 湖南省湘西目連戯 | 約 10 分 |
| 5) 元宵祭祀 | |
| ※ ① 萍郷県元宵花灯会 | 約 30 分 |

Ⅲ 研究事業

1. 調査研究

A. 超域アジア研究

〈超域アジア研究部門〉

(1) 現代中国研究班

「現代中国の総合的研究(2)」

総括 平野健一郎
政治 毛里和子 天児 慧 青山瑠妙 興梠一郎 唐 亮 平野 聡
経済 中兼和津次 田島俊雄 加藤弘之 川井伸一 敵 善平 佐藤 宏
丸川知雄
国際関係・文化 平野健一郎^W 濱下武志、田中明彦、川島 真、貴志俊彦、
黄 東蘭、小浜正子、砂山幸雄、古田和子、村田雄二郎

現代中国は、政治、経済、社会の大改革を行い、その影響力は東アジアから広く世界に及びつつある。この動態を、歴史・文化の要因をも視野に収めながら、総合的に捉える研究体制（資料、政治、経済、国際関係・文化の各グループで構成）を構築した。資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点としつつ、学際的研究と公開利用に向けて拡充と再編をはかる。その際、台湾中央研究院や中国社会科学院、ハーヴァード燕京研究所との学術交流など、海外・国内の研究機関との連携をいっそう強化し、政治、経済、国際関係・文化グループは研究会の開催を継続実施し、次年度以降における成果の刊行に備える。
[研究実施概要]

- a) 資料グループは、東洋文庫が所蔵する近代中国関係資料の中心をなすモリソン・パンフレットを整理し、系統的な調査・研究を進めた。また、目録のWeb公開にむけた準備作業を行った。
- b) 政治グループは、前年度までの研究を継続・発展させ、現在の中国が直面する持続的発展可能性のある経済・社会発展に対応する政治課題を解明す

- るため、定期的に研究会を実施した。
- c) 経済グループは、現代中国経済の構造変動に関するこれまでの共同研究の成果をまとめ、『歴史的視野からみた現代中国経済』を出版した。また、南京大学に保管されていた、戦前の中国農村調査の基礎データ（ロッキング・バック資料）を、広く利用可能なデータとして東洋文庫に収蔵する作業を継続した。
 - d) 国際関係・文化グループは、日中戦争期に続き、1950年代の中国の国際関係と社会・文化変容の関連に関する共同研究を継続した。日本、中国、台湾などで新鮮な研究成果が続出する分野であるため、研究成果と新出資料を鋭意、東洋文庫に収集しつつ、研究会活動を展開した。
 - e) 政治グループ、経済グループ、国際関係・文化グループとも、図書資料の購入に関しては、東洋文庫の現代中国研究資料センターと提携して、系統的な収書を行った。

(2) 現代イスラーム研究班

「現代イスラームの超域的基礎研究－議会主義の展開と立憲体制に関する一次資料の収集と比較分析研究－」

総 括 佐藤 次高◎

ア ラ ブ 池田美佐子、長沢栄治、小杉 泰、関本照夫、松本 弘、
鈴木恵美

イ ラ ン 八尾師誠、松永泰行、黒田 卓、鈴木 均

ト ル コ 粕谷 元、設楽國広、江川ひかり、大河原知樹、秋葉 淳、
澤江史子

中央アジア 小松久男、宇山智彦、湯浅 剛

世界の近現代イスラーム研究において、これまでほとんど用いられることのない中東諸国の議会文書（アラビア語、ペルシア語、トルコ語）を収集・整理・分析し、それぞれの地域（国家）に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討する。2009年度からは、新たに中央アジア諸国を比較の対象に加え、基本資料の収集と整理・分析を行う。これによって中東・中央アジアなどのイスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を一次資料にもとづいて総合的に考察する。他方、イスラーム関係資料の収集と整理、データベース化を推進し、日本における資料センターとしての充実をはかる。

[研究実施概要]

現代イスラーム研究班の活動は、資料の性格に対応してアラブ、イラン、トルコ、中央アジアの4グループに分かれて実行される。アラブ、イラン、トルコグループの研究は、第1期（2003年～2008年）の実績を踏まえて実施された。各グループの研究実施概要は以下の通りである。

- a) アラブグループ：2006年度刊行のA Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt を利用して、議会文書の解説・分析を進めた。
- b) イラングループ：2005年度に作成した議会文書のインデクス（CD-Rom版）を利用して、議会文書の分析を進めた。
- c) トルコグループ：2006年度刊行の論文集『トルコにおける議会制の展開』を基礎に、関係資料の収集と議会文書の解析を進めた。
- d) 中央アジアグループ：研究の初年度に当たり、関係資料の収集と整理を行った。各グループとも年3回程度の研究会を開催した。また、年度末には合同研究会を開いて用語・訳語の検討を行うと共に、4分野間の比較分析を行った。なお、中国・日本の議会制・立憲制の専門家を招き、比較のための報告を得た。

B. アジア諸地域研究

現代アジアの複合的かつ動態的な発展を理解する上で、各民族が有する個性豊かな歴史と文化の基礎的研究が欠かせない。本研究は、アジアの現状に強い影響力をもっている歴史・文化の諸要素につき、基礎的かつ長期の取り組みを要する総合的な研究を実施する。

〈東アジア研究部門〉

(1) 前近代中国研究班

①「古代地域史研究－『水経注』の分析から－(2)」

総括 太田幸男
松丸道雄、藤田 忠、飯尾秀幸、靱山 明、塩沢裕仁、
多田狷介、窪添慶文、重近啓樹、池田雄一

本研究班では地域史という視点から、中国古代の地域社会の構造を検討してきた。その基礎となるのは『水経注』（原典 6 世紀、中国最古の地理書）とその諸注の再検討である。これを注文、疏文まで精読し、加えて考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析するという歴史地理学的方法による研究に挑んでいる。また流域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせて検討することで、歴史的な自然環境・社会的実態を具体的に理解し、流域の地域社会の構造の変化を明らかにしていく。刊行を予定している『水経注疏訳注』渭水篇下巻及び洛水・伊水篇訳注もこれらの成果を反映させたい。渭水下流域及び洛水・伊水流域は「黄河文明」の中心地である。ここを「地域史」という観点から分析することは中国古代史研究においては新鮮な視点であり、『水経注』の研究という範疇を超えて、内外における中国古代史研究の新たな展開となる研究を目指している。

[研究実施概要]

- a) 陳橋驛復校『水経注疏』（江蘇古籍出版社刊）をテキストとし、渭水篇（巻 19）の講読を隔週の研究会において継続実施した。すでに公刊した渭水篇訳注上巻に続き、下巻（巻 19 の訳注）を 20102 年度に刊行する。
- b) 『水経注』洛水・伊水篇訳注の刊行準備として、渭水下流域及び洛水・伊水流域の地誌的記述及び考古学的調査・発掘報告の収集のため、台湾および山西省における調査と学術交流をおこなった。特に山西省では、現地ですべてに発掘に従事している研究者・研究機関との学術交流や実地調査を実施し、流域の古代遺跡の実態を把握した。

② 「宋代社会経済史用語解集成の作成とその電子辞典化」

総 括 斯波義信◎

梅原 郁、千葉 巽、吉田 寅、渡辺絃良、妹尾達彦、
長谷川誠夫

本グループがこれまでに作成・公刊した『宋史食貨志訳注（一）～（六）』（東洋文庫刊、昭和 35 年～平成 18 年）、および『宋会要輯稿・食貨篇・社会経済用語集成』（東洋文庫刊・平成 20 年）における訳注および用語の収集の成果をベースとして、整理と増補を加え、広範囲かつ多方面の利用者の便宜に適合するような冊子体および CD-ROM の用語解説集を作成し、研究活動のいっそうの発展に資するプロジェクトである。

[研究実施概要]

- a) 中国社会経済史関係の語彙を関係資料から抽出・整理する作業をほぼ終了した。全用語は、(イ) 財政用語 (23 項)、(ロ) 経済用語 (10 項)、(ハ) 社会用語 (11 項) の計 54 項に大きく分類して、解説を記述する作業を継続している。成果は、2011 年度に冊子体として公刊する。
- b) 宋代社会経済関係の用語解説辞典を目指す本研究では、最善・網羅的な一次資料、各種工具書、既刊から近刊にいたる二次文献類の収集・常備が欠かせない。一次資料の中では、台湾中央研究院作成の校訂と標点を施した「新漢籍全文資料庫」に収まる典籍の活用するほか、「判語」「官箴」「筆記」「方志」の類、あるいは明清・民国時代の民間契約文書集成等の資料を東洋文庫に備え、研究内容の充実に備えた。

③ 「東アジア都城の考古学的調査・研究 (3)」

総 括 早乙女雅博

田村晃一、飯島武次、妹尾達彦、小嶋芳孝、井上和人、
清水信行

本研究班では、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行ない、その研究成果として 2004 年度に『東アジアの都城と渤海』(全 394 頁)を、2006 年度に『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を公刊した。しかしその中心となる渤海上京龍泉府址(東京城)出土遺物の調査・研究は、予想以上に多数の遺物があったため、一部の遺物の調査・研究については、2009 年度以降においても継続実施する。

[研究実施概要]

- a) 中国吉林省琿春市所在の八連城(渤海の東京龍原府に疑定されている)に関する発掘報告書の内容を検討した。
- b) 中国渤海仏の写真撮影をおこない、参考資料として整備した。

④ 「前近代中国の法と社会(Ⅱ)」

総 括 山本英史

南 宋 大澤正昭、青木 敦

元 代 鈴木立子

明 代 鶴見尚弘
明 清 鈴木立子、岸本美緒、濱島敦俊、寺田浩明、西 英昭、
高遠拓児

宋代以降の戸婚・田土・錢穀などを扱う「民事」法令を分析し、どのように変遷してきたかを明らかにする。中国の各時代の様々な法についての研究の中でも、近20年の特徴のひとつとして、法令の有効性、厳格性などを版牘文や契約文書によって検討する研究がなされてきたことがあげられる。契約文書や多くの条例、版牘文などが発見され、また中国国内にあるものが利用しやすくなったことにもよろう。本研究班も過去5年間、この方向で研究活動をしてきた。この5年間の研究をとおして、あらためて法令そのものに視点をあてることが必要であることに到った。民事的な法令に限ったのは、社会状況を反映しやすく、社会の実態の変化を分析するに適していると見ているためである。一度できた法は常に現実社会に適合しにくくなってゆくが、時代を通して考察することにより、漢族社会の大きな変容をつかむことができると考える。

[研究実施概要]

- a) 宋・元・明・清期の条例収集を進めた。
- b) 収集した条例の整理、解読を行うべく定期的に研究会（メンバー以外の研究者も含める）を開き、内外の研究者との意見交換を行った。

(2) 近代中国研究班

「20世紀前半日本の中国調査」

総 括 本庄比佐子
経 済 久保 亨、金丸裕一、弁納才一、富澤芳亜、吉澤誠一郎
政 治 内山雅生、松重充浩、田中比呂志
文化・社会 飯島 渉、佐藤仁史、浅田進史、瀧下彩子

本研究は、近代中国研究班が、それ以前の近代中国研究委員会時代から引き継いで行ってきた研究で、1910年代から40年代にかけて日本の諸研究調査機関が、華北を中心とする中国で実施した調査活動に関する資料収集とその分析を継続するものである。従来の日本側資料に加え、本研究では中国側資料の検討も行い、華北を重点としながらも、地域的特質を検討するために、華中南を含めて全国的規模に調査地域を拡大する。そして日本側および中国側資

料の活用について、近年の研究成果を踏まえながら、新たな視点から再整理をはかり、20世紀前半期の中国社会の全体像を考察する。さらに戦前・戦中期の日本の研究機関等による中国実態調査資料の収集を継続するとともに、中国の研究機関等との共同研究を進展させる。過去に、中国社会科学院、上海市档案馆、青島市社会科学院、山東社会科学院などの共同研究により、日本国内外に散逸していた近代中国研究にとって必要不可欠な資料の収集を実施してきた。本研究では、新メンバーの加入を契機に、交流拠点を北京大学や南開大学、山西大学および南京大学等に拡大し、中国近現代史に関する重要資料の散逸を防ぐためにも、東洋文庫に資料を蓄積し、その分析を進めて目録・解題等を作成し、日中両国の共同研究を進展させる。

〔研究実施概要〕

- a) 日本および中国両国に現存する日本の中国経営に関する資料を、継続的に収集した。
- b) 過去の研究ではとり上げられなかった調査機関、例えば各地の日本領事館、および商工会議所等の報告書類に関する資料を、日本では東洋文庫の他に、外務省外交史料館、農林水産省農林水産政策研究所、防衛省防衛研究所図書館等において調査した。
- c) 調査の成果を一部を収載し、『近代中国研究彙報』32号を刊行した。

(3) 東北アジア研究班

①「日本所在近世朝鮮文献資料研究(2)」

総 括 吉田光男

糟谷憲一、六反田豊、井上和枝、須川英徳、武田幸男、
森平雅彦、山内弘一、山内民博

京都大学附属図書館、天理大学附属図書館今西文庫をはじめ、日本各機関・個人が所蔵している、2004年度以来継続してきた朝鮮近世の記録類の第2次調査を行い、解題目録の完成を期する。従来、近世朝鮮のいわゆる朝鮮本と言われる古典籍については、総合的な調査が進行し、ある程度その全貌が解明されてきた。しかし主として成冊と言われる、帳簿を中心とした、地方資料・民間資料などの記録については、全体的な調査がほとんど行われてこなかった。第1次調査では、すでに原地に残存が確認されていない資料を発見し、内容分析を行ってきた。第1次調査と今回の第2次調査によって、ほぼ日本におけ

る該当資料は悉皆的な調査を行うことができる。

[研究実施概要]

- a) 『日本所在近世朝鮮記録類解題Ⅱ』刊行のための準備作業を進めた。
- b) 調査資料の分析により、韓国所在資料と合わせて、近世記録類の全貌について調査を進めた。
- c) 該資料の日本への将来経緯について調査を継続した。

② 「清朝満洲語檔案資料の総合的研究 (2)」

総 括 松村 潤

満洲語 檔案 加藤直人、中見立夫、楠木賢道、細谷良夫、柳澤 明

清代の第一公用語である満洲語は、清初ばかりでなく、清朝一代にわたって用いられた言語である。18世紀の乾隆帝代より、京師に暮らす旗人たちは、日常語として漢語をもちいるようになっていったが、文章用語としての満洲語は、民国にいたるまで継続して利用された。現在、北京・中国第一歴史檔案館には、約1千万件の文書資料が保存されているが、その半分は、満洲語（または漢語とのいわゆる合璧）によって記されたものである。このことは、清代の文書伝達体系全体において、満洲語の利用が不可欠であったことを示している。とくに入関前（1644年以前）および清初の時期の文書・書籍、ならびに旗人、藩部をはじめとする辺境地方、そして対外関係等の文書において、多くの場合満洲語が用いられている。本研究は、これら満洲語で記された、または場合によっては印刷された清代の文献資料について、清初期を中心として総合的に検討を加えようとするものである。

[研究実施概要]

- a) 本研究班は、すでに50年以上にわたって、満洲語文献の研究をすすめ、『満文檔案』訳注(I～VII)、『旧満洲檔』訳注(1,2)、『鑲紅旗檔』(雍正朝、乾隆朝1,2)をはじめとするさまざまな成果を公表し、世界の研究者より高い評価を受けてきた。この研究伝統の上に、今回は、清初の「内国史院」関係文献の研究を実施する。
- b) 中国第一歴史檔案館が所蔵する満洲語資料「内国史院檔」のうち、天聰、崇徳年間の文書について読解をすすめ、具体的な検討を加えた。
- c) 「内国史院檔」とともに、『鑲紅旗檔』の研究も併せて実施した。

③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析(2)」

総括 石橋崇雄

岸本美緒 C. A. ダニエルス 柳澤明 並木頼寿

中国では北京オリンピック開催準備をめぐる国家事業が急進するなか、それまで内在していた政治・経済・民族・文化問題がチベットをめぐる自治区の問題に端を発して表面化し、その影響は広く中央アジア・北アジア領域世界にも及んだ。そこには、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を進展させた清朝の最大版図が直接に現代中国と繋がるなか、その一体化から生じた政治・経済・民族・文化の問題も現代中国に直結していた反映と捉えられる特徴が多々窺える。本研究班では、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を独自に進展させた清朝の国家領域構造と対外関係の問題を総合的に研究・分析してきた。刊行予定の英文論文集にその成果を反映させると共に、引き続き清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築するべく、清朝の国家領域構造と対外関係を分析する上で不可欠な檔案(公文書)類のうち、保存収蔵状況が未詳な檔案類を中心に体系的に蒐集、整理、デジタル化し、今後の研究に貢献することを目的とする。

[研究実施概要]

- a) 英文論文集 (TBRL14: The Historical Structures of Eastern and Northern Asia in the Qing 清 Dynasty Era.) の編集作業を進めた。
- b) 既成の領域世界・時代区分の枠を越え、海外における図書館・檔案館・研究機関などに所蔵されている檔案文献史料類についての調査を継続した。

(4) 日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究(2)」

総括 今西祐一郎

語学 酒井憲二、柳田征司、石塚晴通

文学 深沢眞二、上野英二、大谷俊太、辻本裕成、朽尾 武、
宮崎修多

思想・文化 斉藤真麻理、和田恭幸

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分にはなされていない。平成18年までに室町時代以前に成立した古写本・古版本についての書誌解題（Ⅰ～Ⅴ）を公刊してきたことを受けて、ひき続き近世の成立ないしは刊行の貴重書を調査して研究の基盤を整備するとともに、その成果を広く公開することをめざしている。

[研究実施概要]

- a) 岩崎文庫の中でも万葉集関係のものを中心とする木村正辞旧蔵書約100点について、その資料群の全体像を把握し、『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅵ』として公刊した。

〈内陸アジア研究部門〉

(1) 中央アジア研究班

① 「サンクトペテルブルグ所蔵古文獻の研究—ウイグル文を中心として—」

総 括 梅村 坦
ウイグル 庄垣内正弘
コーディネーター 熊本 裕、小田 壽典、松井 太

東洋文庫が入手したサンクトペテルブルグの東洋学研究所のマイクロフィルムのうち、ウイグル語とソグド語については『東洋文庫所蔵 St.Petersburg ウイグル文字・ソグド文字・マニ文字写本マイクロフィルム仮目録 [第1稿]』として、初期の現地での実見データの一部を取り込んだフィルム番号整理一覧を、2002年に刊行した。その後、マイクロフィルムのデータを昨年までのプロジェクトでデジタル整理を続けた。ほぼ完成に至った目録の改訂版を原稿とし、冊子かデジタルデータの形で編集し直して刊行することは、内外研究者の要望に沿うことになる。ただし、東洋文庫と東洋学研究所の初期の契約の制約があるため、その刊行方法については慎重に検討をおこなうものとした。については、ウェブ上に未公開のものを含む大英図書館蔵のウイグル文字文献の一覧表などと合わせて刊行する可能性も検討したい。その中から、文書研究の成果についての論文をこれに付すこととする。

[研究実施概要]

- a) 従来の研究テーマによって蓄積された目録整備をベースとして文献研究を開始した。
- b) 古ウイグル文を中心とする文献の書式整理を通して分類作業を行った。
- c) 漢文との合璧文献を中心として、2- (1) -③「漢語文獻」グループとの協同研究をおこなった。
- d) 古ウイグル文献の個別読解・同定研究を継続した。

②「近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと政治権力」

総 括 小松久男^W

梅村 坦、新免 康、濱田正美、長縄宣博、濱本真実、
堀川 徹

ソ連解体（1991年）以後、中央ユーラシア近現代史研究は、大きく可能性が開かれた。これまでアクセスが不可能であった多種多様な史料が公開され、また現地研究者との共同研究や外国人研究者による現地調査も可能になったことは、決定的な意味をもっている。こうした中で、本研究は次の2点を課題とする。第一に、8世紀以降の中央アジア史を考えると、その政治と社会、文化においてイスラームが果たした役割を無視することはできないが、ソ連時代は無神論イデオロギーのためにイスラームに関わる問題は不当に軽視されてきた。いま新たな中央アジア史を再構成しようとするならば、この点を克服することが不可欠である。第二に、ペレストロイカ以降、中央ユーラシア地域においてはイスラームの復興が顕著であり、イスラーム国家の樹立を目標とする急進派は、世俗主義掲げる政権との間に鋭い緊張関係を作り出している。このような現代のイスラーム復興主義は、中央ユーラシア史の文脈においてどのように考えるべきだろうか。それには、近現代史におけるイスラームと政治権力との相互関係を実証的に検討することが不可欠である。

[研究実施概要]

- a) 海外における史料収集：研究協力者を派遣し、タシュケント（ウズベキスタン）、カザン、サンクトペテルブルク（ロシア）などの図書館や研究機関のほか、各地の民間に所蔵されている史料の収集を行った。
- b) 史料の整理と分析：これらの史料のうち、とくに定期刊行物についてはデジタル化によって幅広い利用ができるようにし、文書史料については目録作成

を進めた。

- c) 研究の推進：これらの新規収集史料と東洋文庫の蓄積してきた豊富な文献資料とを活用し、研究会の開催などを通して、上記の課題に関する研究を推進した。
- d) これまでの研究成果を、TBRL12 Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20th Centuries として刊行した。

③「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土漢語文献マイクロフィルム目録のデータベース化」

総括 土肥義和

梅村 坦、片山章雄、妹尾達彦、荒川正晴、氣賀澤保規、
關尾史郎、池田 温

2002年に東洋文庫が世界にさきがけて入手した東洋学研究所の内陸アジア出土文書マイクロフィルム（全363リール、約25万齣）には、4、5世紀から15世紀に及ぶコータン・サカ語、西夏語、チベット語、ウイグル・ソグド語、漢語、チャガタイ・トルコ語、サンスクリット語、アラビア語、ペルシア語、満洲語、モンゴル語の11言語の文書が含まれている。このフィルム資料の目録をデータベース化してそれを公開することは、わが国だけでなく、諸外国の研究機関・研究者の希求するところ切なるものがある。本研究は、上記フィルムの中からとくに漢語文献を抽出してそのフィルム目録のデータ化を図るとともに内陸アジア出土漢語文献の特性を明らかにすることを目的とする。

[研究実施概要]

- a) ウイグル・ソグド語文書、計30リール（Reel 2、Reels 17～44、Reel 47）に含まれている漢語文献（約1100齣）のフィルムについて、目録作成を継続した。
- b) 上記の文書について、前に抽出した51リールの漢語文献と記載様式等による比較研究を行った。
- c) 以上の研究活動を継続するため、定期的に「内陸アジア出土古文獻研究会」を開催した。

(2) チベット研究班

「チベット蔵外文献の書誌的研究 (2)」

総 括 吉水千鶴子
仏教思想 川崎信定
敦煌文献 武内紹人
宗教文献 松濤誠達
ボン教 御牧克己
宗義文献 松濤誠達
歴史 山口瑞鳳
密教図像 立川武蔵

チベット研究班においては、新たに発見された写本を中心とするチベット語資料を収集・保管し、歴史・文化・宗教の各分野にわたるチベット語文献の体系的網羅的なコレクションの充実をはかることを目的とする。収集した資料については目録化を行い、データベースとして公開すると同時に、敦煌チベット語文献、河口慧海将来文献などととも東洋文庫所蔵チベット語蔵外文献として写本校訂と訳注研究を行い、電子データベースあるいはシリーズ刊行物として公開する。以上の3点により、世界的なチベット学の研究拠点として高い貢献を目指すものである。

[研究実施概要]

- a) 資料収集：近年中国で新たに発見された10～13世紀のチベット語写本の影印版収集を進めた。チベット語大蔵経文献、蔵外文献の電子版を参考資料として購入し、研究に備えた。
- b) a) によって収集した資料の分析と目録作成を行った。
- c) チベット人研究協力者の協力のもとに、以下の研究を行った。
 1. 筆記体写本の校訂：古いチベット語写本の多くは手書きの筆記体で書かれており、一般研究者には解読が難しいものがある。それらをチベット人協力者の指導を得て校訂し、活字体テキストデータベース作成を進めた。
 2. 1のデータベースをもとに文献の分析・研究を行い、新たに写本研究シリーズを立ち上げて、成果を刊行するため、準備作業を行った。
 3. 『西藏仏教宗義研究』シリーズの続刊として、トゥカン『一切宗義』カダム派

の章の訳注研究を刊行するため編集作業を進めた。

4. 敦煌チベット語文献の研究を行い、武内紹人研究員を中心に、『スタイン蒐集チベット語文献解題目録』に続く新たな敦煌文献研究シリーズを立ち上げ、成果を刊行するため準備作業を行った。

〈インド・東南アジア研究部門〉

(1) インド研究班

「インド刻文史料の蒐集と研究」

総 括 辛島 昇
サンスクリット 山崎元一、小名康之
ウルドゥー 萩田 博
ドラヴィダ 太田信宏、水野善文、石川 寛
ア ー リ ヤ 三田昌彦、古井龍介

インド（南アジア）の刻文研究は、これまでわが国でごく僅かな研究者しかいなかったが、近年、ドラヴィダ系言語について石川寛、太田信宏、アーリヤ系言語について三田昌彦、古井龍介といった若手研究者が育ってきた。刻文は、「史書なきインド」の古代・中世史研究における根本史料であるにもかかわらず、そのようなこれまでの状況から、わが国においては、テキストおよび研究書の蒐集が充分とは云えない。他方、インド自体での刻文研究は、テキストの出版が遅れていることと、若手研究者が育たないことによって、危機的な状況にあるとさえ云いうる。また、世界的にも、インド刻文の研究者数は、極めて少ない。そのような状況に鑑み、わが国の研究機関において、未出版のものも含めてインドの刻文史料を蒐集し、それを国際的に公開しながら、わが国の新しい研究者の力を結集して、インド古代史・中世史の研究進展を図ることは、わが国のインド研究に課せられた急務と云えよう。

[研究実施概要]

- a) 東洋文庫に所蔵のない刻文史料集、刻文研究誌のほか、インド独立後の新しい出版物（とくに、州政府考古学局の）の収集を進めた。
- b) 研究については、個々の研究者が独自の研究を行うと同時に、研究班メン

バー全員およびインドの研究協力者が共同でなしうる幾つかのテーマを設定して行った。

c) これまでの成果をとりまとめ Sources on the Mughal History を刊行した。

(2) 東南アジア研究班

「近代移行期の東南アジアの港市世界に見る自画像と他者像」

総 括 石井米雄^W

弘末雅士、嶋尾 稔、桜井由躬雄、北川香子、坪井祐司

近代日本と東南アジアは、明治期の後半から緊密な関係を有し始め、第二次世界大戦期に日本は東南アジアを軍事占領した。また戦後日本は、東南アジアと緊密な経済関係を形成するに至っている。こうしたなかで日本の東南アジア研究も、この40年間に飛躍的な研究の発展をとげた。ただし日本の東南アジア研究は、第二次世界大戦後にいきなり始まったわけではない。すでに大正期より東洋史の東西交渉史の一分野として南洋史が注目を浴び、また南洋ブームの高まりとともに経済関係の文献も出版されていた。そして第二次世界大戦期には、翻訳本も含め多数の東南アジア関係の文献が出版された。これらの文献は、一部の実証研究を除いて、学術的にあまり注目を浴びてこなかった。しかしそれらは、日本の東南アジア観を検討するためのみならず、東南アジア社会を考察する上においても、重要な資料となりうる。本研究は、従来力点が置かれた日本の東南アジア関与という観点からのみならず、当時の東南アジアの社会統合に果した日本人の役割の視点からその記述を検討し、日本人をはじめ中国人やインド人さらにはアラブ人や欧米人など多様な人々が居住した近代東南アジア社会の特質について研究する。

〔研究実施概要〕

- a) 近代移行期の東南アジアの港市に関する文献資料の収集と分析を行なった。
- b) 研究会を開催して、文献調査や訪問調査の成果をもとに議論の構築を進めた。

〈西アジア研究部門〉

西アジア研究班

「イスラーム世界における契約文書の研究(2)」

総 括 三浦 徹
ト ル コ 永田雄三^W、磯貝健一、林佳世子
契 約 観 念 後藤 明
トルコ・ペルシア 清水宏祐、堀川 徹
ア ラ ブ 原山隆広、守川知子

ワクフ（宗教的寄進）は、都市や農村の宗教施設を建設するだけでなく、経済基盤となり、政治権力者、名士、民衆の結びつきをつくった。ワクフに関わる、法学書、年代記、地理書などの叙述史料とワクフ寄進文書や調査台帳などの文書史料を収集し、諸地域における実態と歴史の変容を解明する。

[研究実施概要]

- a) ヴェラム文書（モロッコの契約文書、東洋文庫所蔵）の研究を実施し、ワクフ研究を本格的に開始した。
- b) 上記について、資料収集、現地調査、国内研究会を実施した。

C. 資料研究

〈資料研究部門〉

東アジア資料研究班

「東アジア資料の研究」

総 括 斯波義信^W
総括補助者 田仲一成[○]
日 本 浅野秀剛 片桐一男 永積洋子 延廣真治 吉田伸之

中国 丘山新 小川裕充 佐藤慎一 鈴木博之 戸倉英美 濱下 武志
矢吹 晋 平勢隆郎 片山 剛
朝鮮 藤本幸夫
内陸アジア 森安孝夫^W
情報 報 廣瀬紳一

中国、台湾、香港、東南アジア華人社会などに所蔵される文献資料の探索、
各国図書館との国際的情報交換・資料交換・人的交流を目指す。

[研究実施概要]

- a) 台北の中央研究院歴史語言研究所との資料交換協定にもとづいて提供される漢籍全文資料庫 (Data Base) の交換資料として 20,000 コマのマイクロフィルムを提供した。
- b) 南京大学と研究交流を行い、俞爲民氏、孫蓉蓉氏を招聘した。

6 部門 12 研究班 23 グループ 事務統括

瀧下彩子^W (東洋文庫研究員)

(注 ◎は専従者、W は重複を示す)

D. 地域研究プログラム

(1) イスラーム地域研究資料室

「イスラーム史料情報学の開拓」

本研究では、イスラーム地域の現地語史料について、書誌情報や文献情報の体系化を進めることによって研究の基盤を作り、同時に史資料の体系的な収集や利用のための環境を構築する。史料群を地域社会全体を表す縮図と捉え、これを体系的・俯瞰的に研究することによってイスラーム地域の重層的な像を解明することを目的とする。

[研究実施概要]

- a). 現地語史資料の体系的収集
- b). 文献情報ネットワークの構築・拡充のため、以下を実施
 1. アラビア文字資料整理に不可欠な支援ツールの作成・公開。
 2. アラビア文字資料所蔵主要機関の担当司書による連絡会の継続開催

c). 文書史料による比較制度研究の継続

1. オスマン帝国史料の総合的研究（秋葉淳研究員）
2. シャリーアと近代：オスマン民法典研究会（大河原知樹研究員）
3. カイロ国際会議セッション参加（2009年12月）
「イスラーム地域研究」プログラムとカイロ大学文学部との共催にて開催するカイロ国際会議に参加し、「Islamic Judicial Practices: Globalization and Localities of the Law」と題したセッションを行った。

d). 上智大学拠点グループと連携研究班「東南アジアのキターブ目録勉強会」が東南アジア諸地域にて収集したアラビア文字資料の整理法確立と精度の高い目録の作成に向けた勉強会を継続的に実施した。

(2) 現代中国研究資料室

「現代中国研究資料の収集・利用の促進と現代中国資料研究の推進」

中国研究に関するウェブやデータベースに関する情報を交換し、研究者の知見を広めるために、国内外の研究者・実務家を招いての国際シンポジウム及び小規模なワークショップを開催する。また東洋文庫所蔵及び新規収集の一次資料に基づいた共同研究会を継続して開催し、資料の読解能力を高め、若手研究者の養成をはかる（年数回）。また、データベースや文献資料以外に、現代史研究に必要な資料の史料学的研究を進めるセミナーなどを開催する。

[研究実施概要]

- a) デジタルライブラリーシステムについて、試用しつつ改良を加えた。同時に、公開対象とする資料を選定を、近代中国研究班（委員会）収集資料を中心に検討した。
- b) NII-Webcat への図書データ入力を進めた。
- c) 資料収集については、引き続き現代中国に関係する資料を収集した。

E. 受託研究

「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」

（イスラーム地域研究資料室委託業務）

本委託業務の目的は、ネットワーク型共同研究「イスラーム地域研究」の発

展によって、グローバル化した現代のイスラーム理解を深化・向上させ、その成果を学界及び広く社会に還元すべく国際的な広がりを持つ新時代の共同研究拠点を構築することにある。また、共同研究実施にあたり、国内では公募研究を通じて幅広い人材の参加を促進し、国際的には研究者の協力のネットワークの強化を行い、さらに研究支援組織としても管理業務環境を整備・強化した事務体制を構築する。

財団法人東洋文庫では、イスラーム地域研究の史資料センターとしての役割を果たすべく、史資料の収集・利用の促進と、イスラーム史資料学の開拓に関わる研究開発を実施する。

[研究実施概要]

- a) 「イスラーム地域研究」の史資料センターである東洋文庫拠点の整備強化を推進した。
- b) 継続的に和文及び英文で研究成果の出版をする計画を実現させるために、企画や内容の検討・点検や出版社との打ち合わせ等の準備作業を行った。
- c) 「イスラーム地域研究」の強化と公募による拠点拡大
 1. 公募採択共同研究班「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」(申請者：高松洋一
研究構成員：清水保尚、渡部良子、斉藤久美子)は、前年度の成果を踏まえ、国際的にも未開拓の分野である帳簿の史資料学的研究及びイラン式簿記術の研究を進めた。
 2. 中東研究文献 DB の拡充を目的として、中東研究文献遡及調査を継続して実施した。

F. 日本学術振興会科学研究費補助金による調査研究

(1) 研究成果公開促進費(データベース等)の対象事業

「東洋学多言語資料のマルチメディア電子図書館情報システム」

[東洋文庫電算化委員会委員長：斯波義信]

(2) 基盤研究の対象事業

- ① 「宋代社会経済史語彙解釈のデータベース化」[研究代表者：斯波義信]
(基盤研究(B)、2007年度採用、4ヶ年間・第3年度目)

- ② 「1910 ～ 1930 年代における日本の中国認識 - 華北地域を中心に」
 [研究代表者：本庄比佐子]
 基盤研究 (B)、2009 年度採用、5 ヶ年間・第 1 年度目)
- ③ 「南インドの刻文に見る中世宗教運動の展開」 [研究代表者：辛島 昇]
 (基盤研究 (B)、2009 年度採用、3 ヶ年間・第 1 年度目)
- ④ 「抄物目録の完成」 [研究代表者：柳田征司]
 (基盤研究 (C)、2009 年度転入)
- ⑤ 「近代トルコにおける西洋演劇の受容と伝統演劇」 [研究代表者：永田雄三]
 (基盤研究 (C)、2009 年度転入・終了)

G. その他民間学術助成金による調査研究

(1) 三菱財団補助金による事業

三菱財団人文科学研究費補助金の対象事業

「モリソン・パンフレット」資料集の学際的研究 - 中国をめぐる近代極東史の
 一次資料の解析 - [研究代表者：斯波義信]

(2008 年 10 月～2010 年 9 月・2 年間・第 2 年度目)

H. 東洋文庫研究員・研究課題一覧

研究員名	研究課題
會谷 佳光	和刻本を中心とした仏典の書誌学的研究
青木 敦	宋代の法と経済
青山 瑠妙	現代中国政治・外交の研究
秋葉 淳	オスマン帝国末期の社会及び制度
浅田 進史	独中関係史
浅野 秀剛	日本版画美術の研究
天児 慧	現代中国の政治体制及び国際関係

- 新井 政美 トルコ近代史
 荒川 正晴 中央アジア古代史
 飯尾 秀幸 中国古代国家史
 飯島 武次 殷周時代の考古学研究
 飯島 渉 医療社会史
 池田 温 中国中古史、前近代東亜文化交流史
 池田美佐子 エジプト近現代史
 池田 雄一 中国古代社会史
 石川 寛 南アジア史
 石塚 晴通 日本語の歴史的研究、古代漢字文献学
 石橋 崇雄 清朝政治史
 磯貝 健一 イスラーム期中央アジア古文書研究
 市古 宙三 太平天国及び中国共産党の研究
 井上 和枝 李氏朝鮮時代郷村社会史研究・朝鮮女性史研究
 井上 和人 東アジア古代都城制度の比較研究
 今西祐一郎 源氏物語を中心とした平安時代文学の研究
 上野 英二 平安朝文学の研究
 内田 知行 中華民国社会史
 内山 雅生 近代中国華北農村経済史
 梅田 博之 現代朝鮮語の記述的研究
 梅原 郁 宋元時代の法制制度の研究
 梅村 坦 ウイグル民族誌、内陸アジア史
 宇山 智彦 中央アジア近代史・現代政治
 江川ひかり トルコ社会経済史
 大江 孝男 現代朝鮮語及び中期朝鮮語の研究
 大河原知樹 19-20 世紀シリアの社会史・政治史
 大澤 肇 近現代中国における学校教育史
 大澤 正昭 唐宋時代社会史
 太田 信宏 南インド近世史
 太田 幸男 秦墓竹簡の研究
 大谷 俊太 室町・江戸時代文学の研究
 岡田 英弘 アジア史
 岡野 誠 前近代中国の王権・国家・法／敦煌吐魯番文献
 丘山 新 中国仏教資料研究

- | | |
|-------|-----------------------|
| 小川 裕充 | 中国絵画資料研究 |
| 奥村 哲 | 中国近現代史 |
| 小田 壽典 | 古トルコ語仏教文献の研究 |
| 小名 康之 | インド・ムガル朝史 |
| 梶谷 懐 | 中国の財政金融改革 |
| 粕谷 元 | トルコ現代史 |
| 糟谷 憲一 | 18-19世紀朝鮮政治史 |
| 片桐 一男 | 日蘭文化交渉史の研究 |
| 片山 章雄 | 中央アジア古代史 |
| 片山 剛 | 広東農村社会史研究 |
| 加藤 直人 | 清朝の民族統治政策・清代档案史料の研究 |
| 加藤 弘之 | 地域開発の現状と政策に関する実証研究 |
| 金子 修一 | 中国古代史 |
| 金丸 裕一 | 中国政治経済史・日中関係史 |
| 辛島 昇 | 南アジア史 |
| 川井 伸一 | 中国企業研究 |
| 川合 安 | 六朝貴族制の研究 |
| 川崎 信定 | チベット仏教の研究 |
| 川島 真 | 近代中国外交史 |
| 菊池 英夫 | 唐宋時代の行政および法制の研究 |
| 貴志 俊彦 | 東アジアの通信メディアをめぐる比較史的研究 |
| 岸本 美緒 | 明清時代地方社会史 |
| 北川 香子 | カンボジア史 |
| 北本 朝展 | 文献のデジタル・アーカイブ化 |
| 金 鳳珍 | 東アジアの歴史・思想・国際関係 |
| 草野 靖 | 中国王朝国家の発展と社会経済 |
| 楠木 賢道 | 清初の「民族」関係 |
| 久保 亨 | 中国近現代史 |
| 窪添 慶文 | 魏晋南北朝時代史 |
| 熊本 裕 | イラン語史の研究 |
| 黒田 卓 | 近現代イラン史 |
| 氣賀澤保規 | 魏晋南北朝隋唐時代の政治社会文化史 |
| 巖 善平 | 中国の三農問題 |
| 黄 東蘭 | 近代日中関係史 |

- 興梠 一郎 現代中国論、中国現代史
 小嶋 芳孝 渤海文化の考古学的研究
 小杉 泰 現代イスラム政治の研究
 後藤 明 イスラム社会と政治の研究
 小浜 正子 中国近現代都市社会史
 小松 久男 中央アジア近代史
 小南 一郎 中国藝能史研究
 早乙女雅博 東アジア考古学の研究
 齊藤真麻理 中世日本文学の研究
 酒井 憲二 日本語の史的研究
 櫻井 徹 在留外国人コミュニケーション誌の現況について
 桜井由躬雄 ベトナム史
 佐藤健太郎 マグリブ・アンダルス史
 佐藤 慎一 中国近代政治史資料研究
 佐藤 次高 西アジア・イスラム史
 佐藤 宏 農村経済社会の長期変動
 佐藤 仁史 近現代江南農村社会史研究
 澤江 史子 現代トルコ政治
 塩沢 裕仁 中国古代歴史地理研究
 重近 啓樹 秦漢社会経済史
 設楽 國廣 オスマン帝国末期政治史
 薮 勇造 南アラビア古代史
 篠崎 陽子 前近代中国文化史
 斯波 義信 中国社会経済史
 嶋尾 稔 ベトナム史
 清水 宏祐 セルジューク朝時代イランの研究
 清水 信行 古代の日本・大陸交流史
 志茂 碩敏 13・4世紀モンゴル政権中枢・中核の研究
 庄垣内正弘 チュルク語の研究
 真道 洋子 イスラーム・ガラス文化史
 新免 康 中央アジア史
 末成 道男 東アジア社会人類学
 須川 英徳 高麗・朝鮮時代の商業
 杉山 正明 モンゴル帝国史

- 鈴木 恵美 現代エジプト政治史
- 鈴木 均 イランおよびアフガニスタンの地域研究
- 鈴木 博之 徽州民間祭祀の研究
- 鈴木 立子 元朝社会経済史
- 砂山 幸雄 現代中国思想・文化・政治体制
- 妹尾 達彦 中国古代・中世都市史
- 関尾 史郎 敦煌・トルファン文書研究
- 関本 照夫 東南アジア伝統工芸業の研究
- 曾田 三郎 中国近代政治・社会史
- 高田 幸男 長江下流域の地域社会・エリート・教育団体
- 高遠 拓児 清代における刑罰制度の研究
- 瀧下 彩子 近現代中国文化史
- 武内 紹人 古代チベット語の歴史言語学的研究
- 武田 幸男 朝鮮古代・近世史
- 田島 俊雄 中国農業・農家の経済計算と所得分配
- 多田 狷介 漢魏晋史
- 立川 武蔵 チベット密教教理の研究
- 田中 明彦 現代東アジア国際政治の研究
- 田中 一成 中国演劇史
- 田中 時彦 日本の政治的近代化の研究
- 田中 仁 中国近代政治史—中国共産党史
- 田中比呂志 近現代中国の社会統合の研究
- C. A. ダニエルス 清代社会経済史、中国技術史
- 田村 晃一 東北アジアの考古学研究
- 竺沙 雅章 中国仏教文化史
- 千葉 熈 宋代宮廷史
- 辻本 裕成 中古・中世日本文学の研究
- 土田 哲夫 1920～40年代の中国政治・外交史
- 坪井 祐司 マレーシア近代史
- 鶴見 尚弘 明・清時代社会経済史
- 寺田 浩明 中国明清法制史
- 唐 成 現代中国金融の研究
- 唐 亮 現代中国政治史の研究
- 戸倉 英美 中国古典文学資料研究

- 朽尾 武 和漢比較文学の研究及び日本に伝来した漢籍の研究
 土肥 義和 西域出土漢文文書の研究
 富澤 芳亜 中国近代経済史
 鳥海 靖 日本近現代史
 中兼和津次 現代中国経済・移行経済の研究
 中村 元哉 中国近代政治史—憲政史・メディア史
 長沢 栄治 近代エジプト社会経済史
 永田 雄三 オスマン帝国社会経済史
 永積 洋子 日本近世対外交渉史
 長縄 宣博 帝政ロシアのムスリム社会と国家
 中見 立夫 清代モンゴル史・清代文書の史料的研究
 西 英昭 中国・台湾の近現代法制史
 西尾 寛治 マレーシア・インドネシア近世史
 西田 龍雄 チベット・ビルマ語派の研究
 延廣 眞治 江戸・明治の文芸
 萩田 博 ウルドゥー語学・文学の研究
 長谷川誠夫 宋代官僚制の研究
 八尾師 誠 20世紀初頭のイランにおける立憲革命の研究
 服部 龍二 東アジア国際政治史
 花田 宇秋 正統カリフ・ウマイヤ朝史
 濱下 武志 中国近現代史
 濱島 敦俊 中国近世社会経済史
 濱田 正美 中央アジアにおけるイスラーム研究
 濱本 真実 ロシア・ムスリム史
 林 佳世子 オスマン朝期中東社会史
 林 俊雄 中央ユーラシア史・草原考古学の研究
 原 實 インド古代文学の研究
 原山 隆広 アッバース朝末期政治史
 平勢 隆郎 中国考古資料研究
 平野健一郎 近代東アジア国際関係論
 平野 聡 中国党支配（国民党・共産党）の史的研究
 弘末 雅士 インドネシア宗教社会史
 廣瀬 紳一 漢字文化圏電子情報学の研究
 深沢 眞二 連歌・俳諧の研究

- 藤田 忠 中国古代政治・社会史
- 藤本 幸夫 朝鮮本研究
- 古田 和子 情報・流通ネットワークの歴史的分析
- 古屋 昭弘 中国語史
- 弁納 オー 近現代中国農村経済史
- 寶劍 久俊 現代中国の農村社会経済変動の研究
- 細谷 良夫 清朝政治史
- 堀川 徹 中央アジア文書研究
- 本庄比佐子 近現代日中関係史
- 牧野 元紀 ベトナムのキリスト教
- 松井 太 中央アジア出土ウイグル語・モンゴル語文献の研究
- 松重 充浩 近現代中国政治・社会史及び東北アジア地域史
- 松永 泰行 現代イランの政治・宗教及びシーア派研究
- 松濤 誠達 インド古代神話学の研究
- 松丸 道雄 殷周金文の研究
- 松村 潤 東北アジア民族史
- 松本 弘 イエメン地域研究、エジプト近代史、現代中東政治
- 丸川 知雄 中国の産業集積および日中経済関係
- 三浦 徹 イスラム都市社会史
- 水野 善文 古典サンスクリット文学と中世ヒンディー文学
- 三田 昌彦 北インド中世史
- 三谷 孝 近現代中国の秘密結社研究
- 御牧 克己 チベット宗義書の研究
- 宮崎 修多 近世近代漢詩文の研究
- 村井 章介 日本中世を中心とする東アジア文化交流史
- 村田雄二郎 中国近代ナショナリズム、改革開放期の文化問題
- 毛里 和子 現代中国政治・外交及び東アジア国際関係
- 本野 英一 清末民初における対外経済関係
- 初山 明 中国古代法制史・辺境史
- 守川 知子 イラン・イスラーム史
- 森平 雅彦 朝鮮中世・近世史
- 森安 孝夫 古代ウイグル文書の研究、中央ユーラシア古代中世史
- 柳澤 明 清代外交史・民族関係史
- 柳田 征司 日本語の歴史的研究

柳谷あゆみ	中世イスラーム政治史、イスラーム地域資料研究
矢吹 晋	近現代中国経済
山内 弘一	李朝史、朝鮮儒教研究
山内 民博	朝鮮後期郷村社会史研究
山口 瑞鳳	チベット史、チベット語文法、チベット仏教研究
山村 義照	日本近現代史
山本 英史	17-19 世紀中国社会構造の研究
山本 毅雄	東洋学研究資料のデジタル・アーカイブ化
湯浅 剛	中央アジア政治史
吉澤誠一郎	中国近現代史
吉田 寅	中国塩業史
吉田 伸之	日本近世都市社会史
吉田 光男	朝鮮近世史
吉田 豊	ソグド語及びソグド語文献の研究
吉水千鶴子	インド・チベット仏教思想史の研究
吉村慎太郎	イラン近現代史
六反田 豊	朝鮮中世・近世史
和田 恭幸	日本近世出版文化史および通俗仏書の研究
渡辺 紘良	宋代社会史
(全 230 人)	

2. 研究資料出版

プロジェクト研究および基礎研究では、中国語・朝鮮語・満州語・ウイグル語・アラビア語・ペルシア語・トルコ語など、アジア諸語で記された文書・写本・刊本・地図などを用いて研究を行い、その成果を東洋文庫和文紀要・欧文紀要に掲載するとともに、和文・欧文の研究叢書（「東洋文庫論叢」・「東洋文庫欧文論叢 (TBRL)」）、訳注書、書誌解題などを単行本として出版する。これらの成果は、現代アジアの諸問題の解明に寄与するばかりでなく、国際的な発信を通じて国内外に大きな刺激をあたえ、アジア研究のさらなる進展に貢献するものである。

A. 定期出版物刊行

- (1) 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報)第91巻第1-4号 A5判 4冊(刊行済)
- (2) 『東洋文庫欧文紀要』(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*)
No.67 B5判 1冊(刊行済)
- (3) 『近代中国研究彙報』 第32号 A5判 1冊(刊行済)
- (4) 『東洋文庫書報』 第41号 A5判 1冊(刊行済)
- (5) 『超域アジア研究報告』 第6号 B5判 1冊(刊行済)
- (6) *Asian Research Trends* New Series No.4 A5判 1冊(刊行済)
- (7) 『東洋文庫年報』2008度版 A5判 1冊(刊行済)

B. 論叢等出版

- (1) TBRL12 *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20th Centuries*
B5判 1冊(刊行済)
- (2) TBRL13 *Large and Broad: The Dutch Impact on Early Modern Asia*
(*Essays in Honor of Leonard Blussé*) B5判 1冊(刊行済)
- (3) 『岩崎文庫貴重書書誌解題 VI』 B5判 1冊(刊行済)
- (4) *Sources on the Mughal History* B5判 1冊(刊行済)
- (5) 『地図文化史上の広興図』東洋文庫論叢 73 A5判 1冊(刊行済)
- (6) 『中国近世文芸論 - 農村祭祀から都市芸能へ』 A5判 1冊(刊行済)
- (7) 『歴史的視野から見た現代中国経済』 A5判 1冊(刊行済)

C. 研究資料の覆刻・増刷の刊行サービス

東洋学報 第90巻4号	330部
東洋学報 第91巻第1～3号	各330部
東洋文庫欧文紀要 Vol.66	50部
TBRL10 The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the Nineteenth and Twentieth Centuries	30部
『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』	50部
TBRL11 Development of Parliamentarism in the Modern Islamic World	50部
オスマン朝と中近世日本における文書史料の比較研究	30部
内国史院檔天聡八年	30部
戦前期華北実態調査の目録と解題	30部
近代中国研究彙報 第31号	50部
東洋文庫書報 第40号	20部
東洋文庫年報 2008年度版	10部

3. 研究情報普及

A. 講演会

(1) 東洋学講座

(春 期) 共通テーマ「東洋文庫とアジア - その1 -」

第511回 2009年5月12日(火)

「雲南と東南アジアに跨るタイ系民族の世界を行く」

東洋文庫研究員

東京外国語大学 AA 研教授

クリスチャン・ダニエルス氏

第512回 2009年5月19日(火)

「満洲語の世界を開拓する」

東洋文庫研究員

日本大学教授

加藤直人氏

第 513 回 2009 年 5 月 26 日 (火)

「倭寇と日本・アジアの交流史」

東洋文庫研究員

東京大学教授

村井章介氏

(秋 期) 共通テーマ「東洋文庫とアジア - その2 -」

第 514 回 2009 年 10 月 27 日 (火)

「私の東南アジア研究と東洋文庫」

東洋文庫研究顧問

国立公文書館アジア歴史資料センター長

石井米雄氏

第 515 回 2009 年 11 月 2 日 (火)

「東洋文庫の朝鮮史料と朝鮮近世財政史研究」

東洋文庫研究員

東京大学准教授

六反田豊氏

第 516 回 2009 年 11 月 16 日 (火)

「日本における山海経図 - 山海経絵と山海異物」

東洋文庫研究員

成城大学名誉教授 枅尾武氏

(2) 特別講演会

9 月 24 日 (木)

“Modernity’ and the Mythic Imagination in Central Asia: Legends of Origin and Discourses of Identity in the 19 t h and early 20 t h Century”

インディアナ大学教授 Devin DeWeese 氏

12月10日(木)

「明代における錢糧徴収の運営と地方行政関係の变化」

北京大学歴史学系教授 郭潤涛氏

1月22日(金)

「西域出土の戸籍資料から見た唐代の家庭構造」

清華大学歴史系教授 張国剛氏

3月19日(金)

「イラン・イスラーム議会図書館資料センターの機能と役割について」

イラン・イスラーム議会図書館資料センター長

アリー・タタリー氏

前パーヤーメ・ヌール大学教員

ファーテメ・トルクチー氏

3月26日(金)

「バタヴィアの中国人公館とその資料について」

東洋文庫名誉研究員

ライデン大学教授 レオナルド・ブルッセ氏

(3) 研究会(東洋文庫談話会)

3月24日(水)

「20世紀前期、上海の日系製革企業 - 江南製革と中華皮革」

日本学術振興会特別研究員(PD) 吉田建一郎氏

(4) 各種研究会・講演会開催状況

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
研究会回数	8	9	7	9	3	7	10	14	8	9	11	9	104
参加人数	57	91	59	83	19	64	80	104	65	104	88	136	950

B. データベース公開

2009年4月1日～2010年3月31日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ（日本語、英語）に対するオンライン検索アクセス件数は、合計1,159,411であった（個別の数値は「財団法人東洋文庫データベース利用調査」に記載あり）また、他機関のデータベースへのリンクを充実させ、当文庫ホームページから国内・国外の主要な東洋学文献のデータベースへとアクセスできる体制とした。

C. 研究者の交流および便宜供与のサービス

〈長期受入〉

(1) 外来研究者の受入

彌永 信美（フランス国立東洋言語文化研究所 東京支部長）

「日本仏教」

（2009年9月1日～2010年8月31日、延長予定）

郭 潤涛（北京大学教授）

「明清時代の地方政府と基層社会の相互関係に関する研究」

（2009年4月1日～2010年1月31日、学振外国人招聘研究者）

吳 真（南開大学大学院中文系講師）

「祭祀演劇中の儀礼文化に関する日中比較研究：宗教学に基づく文学研究」

（2009年11月25日～2011年11月24日、学振外国人特別研究員）

(2)2009 年度日本学術振興会特別研究員 PD の受入

吉田 建一郎 (慶応大学大学院博士取得)

「近代中国の卵、獣骨、皮革を中心とした畜産品貿易に関する総合的考察」
(2007 年度採用、3年度目・終了)

橋爪 烈 (東京大学大学院 PD 見込)

「支配権喪失後のカリフの権威：軍事政権、アッバース家、ウラマーの
視点による再考」

(2008 年度採用、2009・2010 年度 3 ヶ年間)

澤井 一彰 (東京大学大学院 PD)

「16,17 世紀のオスマン朝における物資流通とイスタンブル」

(2009 年度採用、2010・2011 年度・3カ年間)

鈴木 秀明 (東京大学大学院 PD)

「インド洋海域世界の「近代」：奴隷交易の変容を事例にして」

(2009 年度採用、2010・2011 年度・3カ年間)

木村 暁 (東京大学大学院 PD)

「近代中央アジアにおけるイスラーム王権とムスリムの政治秩序観」

(2009 年度採用、2010・2011 年度・3カ年間)

〈外国人研究者への便宜供与〉

Azerbaijan

KHALILLI Fariz

[National Musium]

China

沙武田

[敦煌研究院] (ほか、23 名)

France

BUSSOTTI Michela [Ecde Française d' Exhène Orient]

Russia

MOLODYAKOVA V. Elgena [Russian Academy of Sciences] (ほか1名)

Poland

UOCCOUcMCLYA Dotiua [University of Warsaw]

Taiwan

劉祥光 [国立政治大学] (ほか2名)

4. 普及・広報活動

東洋文庫では、幅広い層に東洋学の普及をはかるため、下記の諸事業を行っている。

A. 展示企画

・7月1日付で、普及展示部が発足した。2011年度からの展示企画について、毎月部会を催し、検討した。また、同部の専任職員として、牧野元紀氏を採用した。

B. 東洋文庫ホームページの運営

東洋文庫ホームページ(和文・英文)の更新を随時行った。

2009年4月～2010年3月までのホームページ全体のアクセス件数は、1,979,448である(東洋文庫図書資料データベースへのオンライン検索アクセス件数を含む)。

また、研究部の該当ページのリニューアルを行った。

C. 東洋文庫友の会の運営

・広報誌『友の会だより』の発行(年2回/秋・春)

D. グッズ製作・販売

- ・カレンダー

E. その他

- ・三菱広報委員会製作の「三菱センターデジタルギャラリー」の製作に協力した。東洋文庫の所蔵品の映像展示が閲覧できるデジタルコンテンツで、丸の内の三菱一号館美術館内に設置された。
- ・三菱広報委員会発行のマンスリーみつびしにて、隔月で蔵書紹介を行った。
- ・賓客の施設訪問に対応した。主な訪問客は、国際学士院連合会長一行、三菱重工大宮社長ご夫妻一行、三菱広報委員会「ゆかりの地研修会」一行など。

5. 研究員等の研究業績

期間：2009年4月1日～2010年3月31日まで

略号：①…著書 ②…編著 ③…論文 ④…学会動向 ⑤…書評・紹介
⑥…翻訳 ⑦…講演 ⑧…その他（評論・雑記・座談会等）

會谷 佳光

①『成田山新勝寺一切経堂収蔵黄檗版大蔵経目録』（成田山新勝寺、2010年1月、362頁）、③「中央研究院傅斯年図書館蔵黄檗版大蔵経目録」（『東洋文庫書報』41号、35～124頁、東洋文庫、2010年3月）、⑧「一切経調査概要」（成田山新勝寺編『成田市指定文化財一切経堂及び転輪経蔵修復完成記念：成田山諸堂修復事業』、8～9頁、成田山新勝寺、2009年12月）。

青木 敦

③「第4章 中国経済史研究に見る土地希少化論の伝統」（大島真理夫編『土地希少化と勤勉革命の比較史』、165～210頁、ミネルヴァ書房、2009年12月）、⑦“Institutionalism in Sung Legal Culture: What's unique and What's not about

Chinese Way of Land Transaction” (XVth World Economic History Congress in Utrecht International Workshop、2009年8月4日)、「座談会「宋人の生真面目さについて」(第35回(2009年度)宋代史研究会夏合宿、長野県長野市戸隠越志旅館、2009年8月23日、企画・司会)、「宋代特別法の収集と整理—景德『農田勅』を主として—(東洋文庫「前近代中国の法と社会」班、2010年1月11日、於：慶應義塾大学)、「ジョーンズ『経済成長の世界史』と宋代中国経済の諸側面」(早稲田大学現代政治経済研究所、2010年1月16日)。

浅田 進史

② “Colonizing Kiaochow Bay: From the Perspective of German-Japanese Relations”, in: Kudo Akira/Tajima Nobuo/Erich Pauer (eds.), *Japan and Germany: Two Latecomers to the World Stage, 1890-1945, Vol. 1*, Kent: Global Oriental, 2009, pp.91-113.、⑥ヴェルナー・アーベルスハウザー著『経済文化の闘争：資本主義の多様性を考える』(雨宮昭彦氏と共訳、東京大学出版会、2009年6月、249頁)。

荒川 正晴

⑤「李全徳「《天聖令》所見唐代過所の申請与勘驗—以“副白”与“録白”为中心」(『法史学研究会会報』14、法史学研究会、2010年3月)、「楊梅「唐宋宮廷蔵氷制度的沿襲与変革—以《天聖令・雜令》宋12条为中心」(『法史学研究会会報』14、法史学研究会、2010年3月)、⑦ The aspects of Sogdians' trading activities under the Western Turkic state and the Tang Empire, The First Congress of the Asian Association of World Historians, Osaka, 2009. 5.30 (The proceedings of the first congress of the AAWH, 2009. 8, pp. 35-48.)、The aspects of Sogdians' trading activities under the Western Turkic state and the Tang Empire. Trade and Merchants along the Silk Road (The 2nd international symposium), Institute of Central Eurasian Studies, Seoul, 2009.6.12. (The proceedings of the 2nd international symposium, 2009.6, pp.33-56.)、⑧「ソウル、シルクロード博物館参観記」(『西北出土文献研究』8、西北出土文献研究会、2010年3月)。

飯島 涉

①『感染症の中国史：公衆衛生と東アジア(中公新書：2034)』(中央公論新社、2009年12月、vii+212頁)、『叢書・中国の問題群〔10〕高まる生活リスク：社会保障と医療』(澤田ゆかり氏と共著、岩波書店、2010年1月、xix+185頁)、②

『シリーズ 20 世紀中国史』(全 4 巻、久保亨氏・村田雄二郎氏と共編、東京大学出版会、2009 年 7 ～ 10 月、232+232+230+254 頁)、③ ‘Colonial Medicine and Malaria Eradication in Okinawa in the Twentieth Century: From the Colonial Model to the United States Model’ in Yip Ka-che (ed), (“Disease, Colonialism, and the State: Malaria in Modern East Asia History”, Hong Kong University Press, Hong Kong, 2009, 5.)、⑤ 「笹森儀助書簡集刊行委員会編『笹森儀助書簡集』(『弘前大学国史研究』127、38 ～ 41 頁、弘前大学国史研究会、2009 年 10 月)。

池田 温

③ 「敦煌写本偽造問題管見」(李濟滄、訳、劉進宝主編『百年敦煌学: 歴史・現状・趨勢』(下)、265 ～ 283 頁、甘肅人民出版社、2009 年 12 月)、⑧ 「王永興教授追悼文」(『東方学』118 輯、134 ～ 139 頁、東方学会、2009 年 7 月)、「青木和夫先生追悼文」(『東方学』119 輯、251 ～ 253 頁、東方学会、2010 年 1 月)、『唐人雜鈔』について」(『東洋文庫書報』41 号、1 ～ 17 頁、東洋文庫、2010 年 3 月)。

池田 美佐子

③ 「イギリス占領期におけるエジプト議会の成立: 『ダファリン報告』を中として」(『Cross Culture』25 号、1 ～ 14 頁、光陵女子短期大学、2009 年)、⑦ “The Establishment of the Local Consultative Bodies in Colonial Egypt” (Tunisia-Japan Symposium on Society, Science & Technology (TJASSST10、第 10 回チュニジア日本学術会議)、2009 年 11 月 12 日、於: ハマメット [チュニジア])。

池田 雄一

③ 「簡牘に書かれた律令」(『白山史学』第 45 号、1 ～ 45 頁、白山史学会、2009 年 4 月)、⑦ 「簡牘に書かれた律令—睡虎地秦律・龍崗秦律・張家山漢律」(主持人復旦大学歴史地理研究所教授李曉傑、2009 年 8 月 25 日、於: 復旦大学)。

石川 寛

③ 「古代デカンの聖地ラクシュメーシュヴァル—前期チャールキヤ朝時代の事例を中心に」(『東洋における聖地信仰の研究—ヒンドゥー教と仏教における聖地巡礼成立の要件』、93 ～ 100 頁、東洋大学東洋学研究所、2010 年 3 月)、⑥ 「サータヴァーハナ朝の村落寄進文書」、「ラーシュトラクータ朝クリシュナ 2 世の寄進文書」(歴史学研究会編『世界史史料 2 南アジア・イスラーム世界・アフリカ』、53 ～ 57 頁、岩波書店、2009 年 7 月)。⑧ 「インド国立マイソール大学博士学位請求論文

審査報告書」(候補論文 B.G.Maithili, Some Kannadiga English Pro-fessors in the History of Kannada Renaissance and Unification Movement. 2009年8月)。

石塚 晴通

②『隣蘇園蔵書目録』(影印・録文版下制作、上海辞書出版社、2009年11月、580頁)、③“Current status and future prospects of the HNG (Hanzi Normative Glyphs) Database”, http://idp.bl.uk/pages/education_re-search.a4d#3, 2009、「勸修寺蔵金剛頂大教王経頼尊永承点(第一)釈文稿」(大槻信氏と共著、『勸修寺論輯』5、勸修寺聖教文書調査団、1～24頁、2009年7月)「十七條憲法一日本人の常識・道徳一」(『日本学研究前沿文存』、670～678頁、華東理工大學出版社、2009年11月)「漢字画像情報多量データベース—HNG(漢字字体規範データベース)を中心として」(『東洋学へのコンピュータ利用第21回研究セミナー』、129～137頁、京都大学、2010年3月)、「明治十八年高山寺『宝物寄附物古文書什物取調牒』(影印・翻刻)」(池田証寿氏・徳永良次氏と共著、『平成二十一年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』、1～34頁、2010年3月)、⑦「東アジアの漢字字体と文献の性格」(国際シンポジウム「古代文字資料から見る東アジアの文化交流と疎通」、2009年6月、於:ソウル[韓国])、「漢字情報と漢文訓読(基調報告)」(国際ワークショップ「漢字情報と漢文訓読」、2009年8月、於:北海道大学)、『敦煌点本書目』の構想(小助川貞次氏と共同発表、第101回訓点語学会研究発表、2009年10月、於:東京大学)、⑧「ロシア探検隊のシルクロード蒐集品」(北海道新聞、2009年8月12日(夕刊)「文化」)。

石橋 崇雄

③『御製人臣傲心録』—「植黨論」(『国士館大学人文学会紀要』42、58～30頁、2010年3月)、⑧「清乾隆帝功罪ともに著しい「十全」の皇帝—北アジアと中華、両世界統合の象徴として君臨する」(『歴史読本』54-10(通号844)、142～149頁、新人物往来社、2009年10月)。

井上 和枝

③「植民地朝鮮に行った鹿児島県出身者に対する基礎的考察」(『年報 朝鮮学』12、1～31頁、九州大学朝鮮学研究会、2009年5月)、「植民地朝鮮における『職業婦人』の創出と存在実態」(『鹿児島国際大学大学院 學術論集』1、1～12頁、鹿児島国際大学大学院、2009年10月)。

井上 和人

③「日本古代都城研究の現在」(『国文学』54-6、90～103頁、学燈社、2009年4月)、「平城京と奈良の地勢」(『最新古代史論(歴史群像シリーズ特別編集)』、7～11頁、学習研究社、2009年4月)、「日本古代都城における糞尿貯留穴論」(『益山王宮里発掘調査20周年記念国際学術大会 益山王宮里遺跡の調査成果と意義』(和文・韓文)、178～218頁、韓国国立扶余文化財研究所、2009年4月)、「平城京へのみちのり—平城京造営の歴史的意義—」(『月刊文化財』No.556、7～14頁、第一法規株式会社、2010年1月)、「ベトナム・タンロン皇城遺跡の宮殿遺構—調査研究保護に関する日越国際協力—」(『条里制・古代都市研究』第25号、76～116頁、条里制・古代都市研究会、2010年3月)、⑧「特別史跡『平城宮跡』へのいざない」(『教育旅行』58-1、11～13頁、財団法人日本修学旅行協会、2010年1月)、「平城京遷都1300年を迎えて」(『文化庁月報』2010年3月号、18～21頁、文化庁、2010年3月)。

内山 雅生

①『日本の中国農村調査と伝統社会』(御茶の水書房、2009年11月、288頁)、⑤「行龍著『走向田野与社会』」(『東方』345号、22～25頁、東方書店、2009年11月)、⑦「從“共同体”理論看“集体化時代的中国農村社会”」(集体化時代的中国農村社会国際学術研討会、山西大学中国社会史研究中心・山西省歴史学会主催、2009年8月8日)。

梅村 坦

⑧「ひとときの休息：中国『シルクロード』の茶(万国喫茶往来7)」(写真：大村次郷、『季刊民族学』131、89～105頁、財団法人千里文化財団、2010年1月)。

宇山 智彦

③ “Была ли исламская альтернатива? Место ислама в национальном движении казахов начала XX века (イスラーム的選択肢はあったのか：20世紀初頭カザフ民族運動におけるイスラームの位置),” Shygys, 2008, no. 2 (Almaty, April 2009), pp. 143-148.、“Mutual Relations and Perceptions of Russians and Central Asians: Preliminary Notes for Comparative Imperial Studies,” in World History Studies and World History Education: The Proceedings of the First Congress of the Asian Association of World Historians (Osaka: The Asian Association of World Historians, March 2010), 15 p. (CD-ROM)、④「国際ワー

クシヨップ “Religion and Society in Central Eurasia: New Sources for the Religious History of Kazakhstan” に参加して」(『日本中央アジア学会報』第6号、71～75頁、2010年3月)、⑤「『講座 スラブ・ユーラシア学』批評と応答」(久保慶一氏・西山克典氏・鳥山祐介氏・家田修氏・松里公孝氏と共著、『スラブ研究』56号、215～243頁、2009年6月)、⑧「中央アジアを理解するための6つの鍵」(『外交フォーラム』2009年6月号、38～41頁)、「ロシア帝国論から比較帝国論へ」(『日本国際政治学会ニューズレター』120号、8頁、2009年7月)、「上海協力機構と新疆民族問題：上海での会議に参加して」(『スラブ研究センターニュース』118号、14～16頁、2009年8月)、「特別座談会：なぜ中央アジアを援助するのか」(河東哲夫氏・輪島実樹氏・北野尚宏氏との座談会、『国際開発ジャーナル』2009年7月号、38～41頁)。

江川 ひかり

③ “From Bazaar to Town: The Emergence of Düzce,” (Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, Vol.3 No.1, pp.293-309, 京都大学イスラーム地域研究センター(KIAS)、2009年)、 “Hikari EGAWA, Küreselleşme ve Yürükleri; Batı Asya’ da Yağcı Bedir Yürükleri Örneği (Globalization and Nomads in the case study of Yağcı Bedir in the Western Asia),” (Küreselleşme ve Türk Uygarlığı(Globalization and Turkic Civilization), pp.63-67, Bishkek, 2009.)、「19世紀中葉オスマン帝国における人口と世帯—西北アナトリア、バルケシルの事例から」(落合恵美子・小島宏・八木透編『歴史人口学と比較家族史』、205～234頁、早稲田大学出版会、2009年8月15日)、「19世紀オスマン帝国北部中央ブルガリアの農村社会—タルノヴォ郡三村における農業経営と土地「売買」」(『明大アジア史論集第13号 永田雄三先生退休記念号』、1～26頁、明大東洋史談話会、2009年3月26日)、“Tanzimat Döneminde Şehir ve Kasabaların Yeniden İmarı:Balıkesir Şehri Örneği (タズィマート改革期における地方都市再開発—バルケシル市の事例から” (Türklük Araştırmaları Dergisi,20 (『ミュジュテバ・イルギュレル教授退官記念論文集』、421～443頁、イスタンブール・マルマラ大学、2009年)、“Osmanlı Döneminde Yürüklerin İltizam Sistemine Girmesi :Yağcı Bedir Yürükleri Örneği (オスマン時代における遊牧民の徴税請負制への包摂：ヤージュ・ベディル遊牧民の事例から)” (前オスマン・オスマン史研究国際会議(CIEPO)、2010年8月25日、於：キルギス・トルコ・マナス大学 [キルギス共和国ビシケク])。

大河原 知樹

③「オスマン帝国時代末期のダマスカスの世帯—イスタンブルとの比較分析—」（比較家族史学会監修、落合恵美子・小島宏・八木透編『歴史人口学と比較家族史』、235～259頁、早稲田大学出版部、2009年8月）、⑧「オスマン朝の司法制度（一六世紀）」（歴史学研究会編『世界史史料2 南アジア・イスラーム世界・アフリカ』、259～260頁、岩波書店、2009年7月）、「エジプト・オスマン帝国間の講和（一八三三年五月）」（歴史学研究会編『世界史史料8 帝国主義と各地の抵抗I』、151～153頁、岩波書店、2009年10月）、「エジプト占領軍のシリア政策（一八三〇年代）」（歴史学研究会編『世界史史料8 帝国主義と各地の抵抗I』、181～182頁、岩波書店、2009年10月）、「ダマスカスのキリスト教徒襲撃事件（一八六〇年）」（歴史学研究会編『世界史史料8 帝国主義と各地の抵抗I』、186～187頁、岩波書店、2009年10月）。

大澤 肇

③「南京国民政府の政治教育：一九二七～一九三四」（『アジア教育史研究』18、13～32頁、アジア教育史学会、2009年8月）、「中華人民共和国初期的学校教育與社会統合」（喬君氏訳、『中共党史資料』111、193～203頁、中共中央党史資料室、2009年12月）、「『中華教育界』記事目録」（今井航氏・小川唯氏・小野寺史郎氏・戸部健氏との共編『近代中国研究彙報』32、43～166頁、2010年3月）、⑥「董国強著『文革：南京大学14人の証言』（金野純氏・関智英氏との共編訳、築地書館、2009年11月、409頁）、⑦「日本亜州歴史資料與學術信息的数字化」（中国社会科学院近代史研究所主催中日学者歴史研究対話会、2010年3月13日）。

大澤 正昭

③「唐宋時代の家族について」（『史海』56号、25～37頁、2009年5月）、「宋代士大夫の『興盛之家』防衛策—『袁氏世範』を中心に—」（國方敬司ほか編『家の存続戦略と婚姻』、107～124頁、刀水書房、2009年10月）。

太田 信宏

③「王都ヴィジャヤナガラは誰が建てたのか—ヴィディヤーランヤ傳承とその歴史的背景—」（科学研究費補助金（基盤研究(A)）研究成果報告書『南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究』〔研究代表者：三尾稔〕、2010年3月、24～43頁）、⑥「S・スブラフマニヤム著『接続された歴史：インドとヨーロッパ』（三田昌彦氏と共訳、名古屋大学出版会、2009年6月、

xii+355+21 頁)、⑦「19 世紀初頭マインソール藩王国の地方統治体制とその歴史的起源」(日本南アジア学会第 22 回全国大会、2009 年 10 月 3 日)、「コメント: カナダ文学の『転換期』」(日本南アジア学会第 22 回全国大会・テーマ別発表 5「歴史における文学的教養とその場」、2009 年 10 月 4 日)、「歴史的観点から見た国家と社会」(人間文化研究機構プログラム「現代インド地域研究」2009 年度全体集会、2009 年 12 月 6 日)、⑧「カナダ文字 カナダ語」(町田和彦編『図説 世界の文字とことば』(ふくろうの本)、河出書房新社、96～97 頁、2009 年 12 月)。

岡田 英弘

②『清朝とは何か』(別冊『環』16、藤原書店、2009 年 5 月、335 頁)、③「〈インタビュー〉 清朝とは何か」(別冊『環』16『清朝とは何か』、7～37 頁、藤原書店、2009 年 5 月)、「世界史のなかの大清帝国」(別冊『環』16『清朝とは何か』、59～73 頁、藤原書店、2009 年 5 月)、「『満洲』の語源【文殊師利ではない】」(別冊『環』16『清朝とは何か』、126～127 頁、藤原書店、2009 年 5 月)、「北京で流行した満漢兼の子弟書」(別冊『環』16『清朝とは何か』、222～223 頁、藤原書店、2009 年 5 月)、「満洲国はワンダーランド! 特別インタビュー Q & A 帝国誕生への道」(『歴史通』3 月号、44～54 頁、ワック出版、2010 年 3 月)、⑧「清朝とは何か(上) —清朝は中国ではない—」(『機』No.206、12～15 頁、藤原書店、2009 年 4 月)、「清朝とは何か(下) —大清帝国の誕生—」(『機』No.207、8～10 頁、藤原書店、2009 年 5 月)、「別冊『環』16『清朝とは何か』」(『心に残る藤原書店の本 創業二〇周年記念アンケート』、17 頁、藤原書店、2010 年 3 月)。

岡野 誠

④「天聖令研究の新動向—『唐研究』第 14 卷(天聖令特集号)に対する書評を中心として—」(共著、『法史学研究会会報』14、104～130 頁、法史学研究会、2010 年 3 月)、⑤「大津透編『日唐律令比較研究の新段階』」(『唐代史研究』12、156～166 頁、唐代史研究会、2009 年 8 月)、⑦「杏雨書屋所蔵敦煌本唐開元雜律疏斷簡の再検討」(東洋文庫・内陸アジア出土古文献研究会、2009 年 12 月 12 日)、⑧「『天聖令』研究文献目録(第 2 版)」(服部一隆氏・石野智大氏と共編、『法史学研究会会報』14、131～142 頁、法史学研究会、2010 年 3 月)、⑧「弔辞(島田正郎先生のご葬儀において)」(『法史学研究会会報』14、193～195 頁、法史学研究会、2010 年 3 月)。

小川 裕充

③「中国山水画の透視遠近法—燕文貴のそのの成立まで—」（『美術史論叢』26、37～61頁、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室、2010年3月）。

奥村 哲

②『ワークショップ 戦時下農村社会の比較研究』（中国基層社会史研究会編、汲古書院、2009年11月、71頁）、③「文化大革命からみた中国の社会主義体制」（メトロポリタン史学会編『いま社会主義を考える—歴史からの眼差し』、149～202頁、桜井書店、2010年3月）、⑤「久保亨・土田哲夫・高田幸男・井上久士『現代中国の歴史—兩岸三地100年のあゆみ』」（『現代中国』第83号、159～163頁、日本現代中国学会、2009年9月）。

小田 壽典

③「梵語一回鶻語双語文献《功德的前提和動機》（村上眞完氏と共著）（“Reasons and motives for meritorious deeds”（Skt. *Pu ṇ yakriyāvastu*），written in Turkic and Sanskrit, transcribed and translated in collaboration with Professor Shinkan MURAKAMI）」（張定京、阿不都熱西提・亞庫甫編『突厥語文学研究—耿世民教授八十華誕紀念文集』、358～376頁、北京、中央民族大学出版、2009年11月）。

糟谷 憲一

⑤「呉映燮『高宗皇帝と韓末義兵』（ソウル・先人、2007年3月）」（『朝鮮史研究会会報』第175号、38～42頁、朝鮮史研究会、2009年5月）、⑦「書評報告：月脚達彦『朝鮮開化思想とナショナリズム—近代朝鮮の形成—』（朝鮮史研究会関東部会2009年11月例会、2009年11月21日）、⑧「한국에 대한 바람」（『독도연구저널』108호、pp.42-44、한국해양수산개발원 독도해양 영도연구센터、2010.1.、日本語訳：「韓国に期待すること」『独島研究ジャーナル』第108号、42～44頁、韓国海洋水産開発院独島・海洋領土研究センター室、2010年1月）。

片桐 一男

③「志筑忠雄について」（『洋学史研究』第26号、1～26頁、洋学史研究会、2009年4月）、④「ケンペルの描いた「蘭人御覧」の部屋はどこか」（『日本歴史』第731号、96～105頁、日本歴史学会、2009年4月）、⑦「東海道本陣史料にみるカピタンの旅」（洋学史研究会月例研究会、2009年6月6日、於：青山学院

大学総研ビル)、「それでも江戸は鎖国だったのか」(第16回青山学院大学史学科公開講座、2009年9月23日、於：青山学院大学1143教室)、「利根運河を造ったお雇い外国人、ムルデル」(流山歴史文化研究会、第4回利根運河まつり、2009年9月27日、於：流山市も森の図書館)、「堀内文書からみた直江兼続」(与板公民館講演会、2009年10月25日、於：長岡市与板地域勤労青少年ホーム)、「来航船に対する応接と長崎入港手続き」(洋学史研究会新春研究大会「前近代におけるアジアの港市—船と人の管理システム—」(2010年1月24日、於：サンルートプラザ東京)、「海舟から龍馬へ—その、外への眼差し—」(第172回幕末史研究会、2010年1月24日、於：武蔵野商工会館)、⑧「安永八(1779)年、大黒町地図(『龍馬と歩く木屋町マップ』、折り込み地図、京都・木屋町共栄会、2009年12月)。

片山 章雄

②『清末成立の四川からチベットへのルートを描いた程站絵図の基礎的研究Ⅱ—新出「西藏全図」と横浜「自鑪庁至烏斯蔵程站輿図」、北京「自打箭鑪至前後蔵途程図」—』(東海大学文学部、2010年3月、ii+25+15頁)、⑦「大谷探検隊将来断片資料の追跡をめぐって」(龍谷大学仏教文化研究所 第73回仏教文化講演会、2009年6月30日、記録あり、龍谷大学仏教文化研究所紀要)第48集、192～212頁、龍谷大学仏教文化研究所、2010年12月)、「旅順博物館所蔵文書と龍谷大学大谷文書による“玄武”」(東洋文庫内陸アジア出土古文獻研究会、(於：明治大学2009年7月18日、記録なし)、「探検100年、橘瑞超の楼蘭・チャルクリク近辺における入手文物」(内陸アジア・イスラム研究者集会、2009年8月8日、記録なし)。

片山 剛

③「自然の領有における階層構造—一字(あざ)の世界と一筆耕地の世界」(森時彦編『20世紀中国の社会システム』、315～341頁、京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター、2009年6月)、⑦「拥有土地自然的重层结构：单位村域的领域及单位农田的领域」(第三回「現代“中国”の社会変容と東アジアの新環境」国際シンポジウム、2009年8月25日、提出論文集：『現代「中国」の社会変容と東アジアの新環境 第三回国際シンポジウム論文集』、119～127頁、大阪大学中国文化フォーラム・大阪大学グローバルコラボレーションセンター、2009年8月)、⑦「拥有土地自然的重层结构：20世纪前半广东农村的单位地名的领域及单宗农田的领域」(中央研究院近代史研究所セミナー、2009年9月1日、講演内容・要旨の収載誌なし)。

加藤 直人

⑦「満洲語の世界を開拓する」(財団法人東洋文庫 2009 年度春期東洋学講座、2009 年 5 月 19 日、要旨:『東洋学報』91-2、141～144 頁、東洋文庫、2009 年 9 月)。

加藤 弘之

①『叢書・中国的問題群[5] 進化する中国の資本主義』(久保亨氏と共著、岩波書店、2009 年 6 月、250 頁)、③「改革開放の始まりと終わり—市場移行の視点から—」(『現代中国』第 83 号、35～50 頁、日本現代中国学会、2009 年 9 月)、「移行期中国の経済制度と「包」の倫理規律—柏祐賢の再発見—」(中兼和津次編著『歴史的視野からみた現代中国経済』、13～44 頁、東洋文庫、2010 年 3 月)。

金子 修一

②『世界史史料 3 東アジア・内陸アジア・東南アジア I —10 世紀まで—』(岩波書店、2009 年 12 月)、③「唐代詔敕文中の則天武后の評価について」(『東洋史研究』第 68 号、219～249 頁、東洋史研究会、2009 年 9 月)、「大唐元陵儀注試釈(終章)」(『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』第 41 輯、担当部分、21～26 頁、52～53 頁、2010 年 3 月)、⑦「唐代後半期の朝賀之礼」(中国唐史学会第十屆年會第二次會議暨唐史國際學術研討會、重慶市・西南大學、2009 年 10 月)、「唐代の国書の形式から見た日本の位置」(國學院大學大学院文学研究科講演會、國學院大學渋谷キャンパス、2009 年 9 月)、⑧「中国唐史学会第十屆年會第二次會議暨唐史國際學術研討會參加報告」(唐代史研究会秋季大會、京大會館 2009 年 11 月)、「古都長安与隋唐文明」國際學術研討會參加報告」(『唐代史研究』第 12 号、180～184 頁、唐代史研究会、2009 年 8 月)、「唐代の皇帝と国家祭祀(1)」(國學院大學公開講座 史料でたどる古代の日本(IV)—古代王権と儀礼・宗教 第 3 回 國學院大學渋谷キャンパス、2009 年 5 月)、「唐代の皇帝と国家祭祀(2)」(國學院大學公開講座、史料でたどる古代の日本(IV)—古代王権と儀礼・宗教 第 4 回 國學院大學渋谷キャンパス、2009 年 6 月)。

金丸 裕一

②『大陸会社便覧』全 3 卷(ゆまに書房、2009 年 4 月、63+228 頁、269 頁、224 頁)、『大陸新報主要記事目次 昭和 14 年・15 年』(ゆまに書房、2009 年 11 月、311 頁)、③『大陸会社便覧』と戦時経済史研究(瀧本文氏と共著、『立命館経済学』第 58 卷第 1 号、1～11 頁、立命館大学経済学会、2009 年 4 月)、「戦時日方掠奪図書問題述評」(『立命館経済学』第 58 卷第 3 号、191～205 頁、2009 年 9 月)、「昭

和前期日本對中國的調查活動」(侯坤宏・林蘭芳編『社會經濟史的傳承與創新』、205～217頁、稻鄉出版社、2009年12月)、⑧『大陸新報(マイクロフィルム版)』(監修、ゆまに書房・紀伊国屋書店、2009年11月、全23リール)。

辛島 昇

① Ancient to Medieval: South Indian Society in Transition, New Delhi, Oxford University Press, 2009, 301 + xix p. ③ “Medieval Commercial Activities in the Indian Ocean as Revealed from Chinese Ceramic-sherds and South Indian and Sri Lankan Inscriptions,” pp. 20-60, Nagapattinam to Suvarnadwipa: Reflection on the Chola Naval Expeditions to Southeast Asia, ed. H. Kulke, K. Kesavapany and V. Sakhuja, Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, 2009. “South Indian Merchant Guilds in the Indian Ocean and Southeast Asia,” pp. 135-57, Nagapattinam to Suvarnadwipa: Reflections on the Chola Naval Expeditions to Southeast Asia, ed. H. Kulke, K. Kesavapany and V. Sakhuja, Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, 2009. “Ancient and Medieval Tamil and Sanskrit Inscriptions Relating to Southeast Asia and China,” (Co-authored with Y. Subbarayalu), pp. 271-91, Nagapattinam to Suvarnadwipa: Reflections on the Chola Naval Expeditions to Southeast Asia, ed. H. Kulke, K. Kesavapany and V. Sakhuja, Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, 2009. “Chinese Texts Describing or Referring to the Chola Kingdom as Zhu-nian,” (Co-authored with Tansen Sen), pp. 292-315, Nagapattinam to Suvarnadwipa: Reflections on the Chola Naval Expeditions to Southeast Asia, ed. H. Kulke, K. Kesavapany and V. Sakhuja, Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, 2009. ⑦ “The Emergence of Medieval South Indian Society as Revealed from the Change in Imprecations in Tamil Inscriptions,” lecture delivered at South Asia Institute, University of Heidelberg, Germany on 17th September, 2009.

川井 伸一

③ 「中国公司的歴史性格—从法人的二重性觀點来看」(『日本当代中国研究2009』、95～109頁、NIHU 現代中国地域研究、2009年)、「中国における会社支配の歴史的検討」(『大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー』No.2009-6、1～14頁、2009年11月)、「タイにおける中国家電企業—企業間関係の比較的視点から」(『ICCS 現代中国学ジャーナル(電子版)』、第2巻第1号、64～70頁、愛知大学国際中国学研究センター、2010年3月)、「中国における

会社支配の歴史的検討」(中兼和津次編著『歴史的視野からみた現代中国経済』、183～210頁、東洋文庫、2010年3月)、⑦「中国的経営論—方法論的課題」(中国経営管理学会第10回研究大会、2009年5月31日、中京大学)、「中国における会社支配の歴史的検討」(大阪大学中国文化フォーラム国際シンポジウム、2009年8月25日、JICA大阪)、「タイにおける中国家電企業—企業間関係の比較的視点から」(愛知大学 ICCS 国際シンポジウム「現代中国の国際的影響力拡大に関する総合的影響」、2009年12月20日、愛知大学)。

川合 安

③「九品官人法の制定と貴族制の形成」(『三国志研究』4、73～82頁、三国志学会、2009年9月)、⑤「張旭華著『九品中正制略論稿』」(『集刊東洋学』101、96～103頁、中国文史哲研究会、2009年5月)、⑦「南朝の新興貴族」(東洋史研究会大会、2009年11月3日、要旨:『東洋史研究』68-3、153頁、東洋史研究会、2009年12月)、⑧「大学の自治と評議会・教授会」(『東北大学百年史 三 通史三』、105～122頁、東北大学、2010年3月)。

川崎 信定

①『新仏教綱要』上巻(共著、真言宗豊山派教化センター発行、有限会社・豊山刊、平成22年3月、「仏教綱要」295～407頁)、⑦『『チベットの死者の書』からの現代日本社会へのメッセージ』(日本財団、宗元会特別講演、平成21年10月21日)、「大乘仏教思想の核心—『般若心経』を読み解く—」(真言宗豊山派宗務所、真言宗豊山派教化センター公開講座「仏教文化の諸相」第5回講演、平成21年11月6日)。

川島 真

①『叢書・中国の問題群 [12] グローバル中国への道程—外交150年』(毛里和子氏と共著、岩波書店、2009年11月、全212頁)、②『中国近代外交の胎動』(岡本隆司氏と共編、東京大学出版会、2009年4月、211+21頁)、③『『歴史』をめぐるガバナンスと文書管理—東アジア歴史認識問題をめぐる』(『年報行政研究』44号〈変貌する行政—公共サービス・公務員・行政文書〉、109～123頁、2009年5月)、「外務の形成—外務部の成立過程」(『中国近代外交の胎動』、181～202頁、東京大学出版会、2009年4月)、China's Re-interpretation of the Chinese "World Order", 1900-40s, in Anthony Reid and Zheng Yangwen eds, *Nego-tiating Asymmetry: China's Place in Asia*, National University of Singapore

Press, 2009, pp.139-158.、「領域と記憶—租界・租借地・勢力範囲をめぐる言説と制度」(貴志俊彦・谷垣真理子・深町英夫編『模索する近代日中関係—対話と共存の時代』、159～183頁、東京大学出版会、2009年6月)、「戦後の国際環境と外交」(飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史〔3〕グローバル化と中国』、59～80頁、東京大学出版会、2009年9月)、「再論日本産経新聞之蒋介石秘録の史料価値—与蒋介石日記之比較」(中国社会科学院近代史研究編『民国人物与民国政治』、380～392頁、社会科学文献出版社、2009年9月)、⑥「陳冠任「日華斷交後の航空交渉—1972～75年—」(『近きに在りて』〈特集：東アジア国際政治史の新展開—戦後外交文書の公開と視点の多元化〉56号、93～116頁、2009年11月)、⑦ The Image of Asia in Modern China: Historiography of the Traditional Chinese ‘World Order’ (Session 12: Empire in Modernity: A Comparative Perspective, The First Congress of the Asian Association of World Historians, World History Studies and World History Education, 30 May 2009, Osaka University Nakanoshima Center (Organizer: Tomohiko Uyama, Chair: Jun Furuya, Commentator: Jun Akiba and Atsushi Aoki))、「戦後初期日華／日台關係之形成—關係的再制度化與國民國家的再建」(「戦後臺灣社會與經濟變遷」國際學術研討會・第四場、2009年12月23日、於：中央研究院台灣史研究所)、「蒋介石の高田時代」(国際シンポジウム「蒋介石と高田、そして日中ソ關係」、2009年11月30日、於：上越教育大学)、Empire and Radio (SOUNDS CHINESE : Performance, Commodification, and Interpretation II, July 18, 2009, KOMABA CAMPUS, University of Tokyo.)、Soviet-Taiwanese Relations During the Early Cold War (September 23, 2009, at Woodrow Wilson Center for Scholars)、Radio and War in Manchu-kuo (CSS Research Seminars, Center for Chinese Studies, The University of Michigan, at 1644 SSWB, September 24, 2009)、Sino-Japanese Textbook problem in 1910-40's :on the diplomatic phase (International Workshop on Cooperative Security and Reconciliation Strategies in Northeast Asia, October 17, 2009, at National Taiwan University (Center for China Studies), organized by National Chung Hsing University, Graduate Institute of International Politics, in cooperation with National Taiwan University (Center for China Studies) and Australian National University, Chair, Prof. Peter Van Ness)、Chinese Image and Policy toward East Asian Regional Integration: Historical Perspective (CIAS 2nd Seminar in Series, A Multidisciplinary Approach to Analyze Regional Integration, December 7, 2009, Venue: Seminar Room 213, Inamori Center, CIAS, Kyoto University, Regional Integration in Asia Introduction to the Seminar)、⑧「ポスト改

革開放時代の自画像」(『中央公論』2009年6月号、36～45頁)、「「改革・解放」の果実と賞味期限」(『読売クォーター』2009年秋号、No.11、12～21頁、2009年10月)、「未完成的オリンピック、或是可以成為過去與未來的分水嶺」(『文化研究』第8期、2009年春季、164～172頁、台北、2009年6月)、「新時代の日中関係に向けて—「成熟国家」と「規模の大国」」(『東亜』COMPASS、511号、2～3頁、2009年12月)、「日中間の歴史共同研究から見た教科書問題」(剣持久木・小菅信子・リオネル＝バビッチ編著『歴史認識共有の地平—独仏共通教科書と日中韓の試み』、158～177頁、明石書店、2009年)、「歴史認識をめぐる対話」(『街』創刊号、151～155頁、2009年7月)、「総括と提言—設立10年を経た『台湾研究』のイメージ(司会者総括発言)」(『日本台湾学会報』11号、91～93頁、日本台湾学会、2009年5月)、「日本(人)の中国観」(『SGRA REPORT』50号、第34回SGRAフォーラム/第8回日韓アジア未来フォーラム「日韓の東アジア地域構想と中国観」、33～39頁、関口グローバル研究所、2009年9月)、「国家ビジョンを示せ」(『毎日新聞』、〈論点 建国60周年の中国 世界とどう向き合う〉、2009年10月9日)、「東アジア共同体構想 外交の選択肢増やす」(『公明新聞』〈インタビュー 焦点を聞く〉、2009年10月21日)、「馮寄台駐日代表が語る日台関係」(聞き手、『交流』824号、28～34頁、2009年11月)、「時代を開く—近現代史の学び方」(加藤陽子氏との対談、『東京新聞』2010年1月1日、20～21面、『中日新聞』2010年1月1日、16～17面、『北海道新聞』2009年1月4日、8～9面)、「アジアの近現代史の学び方」(『西日本新聞』2010年1月1日、34～35面)、「近代東アジア国際関係の源流」(『日本経済新聞』「やさしい経済学—「社会科学」で今を読み解く」(10回連載)、2009年10月22日～11月4日)。

貴志 俊彦

②『中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産』(大里浩秋氏・孫安石氏と共編著、御茶の水書房、2010年3月、総326頁)、『模索する近代日中関係—対話と競存の時代』(谷垣真理子氏・深町英夫氏と共編著、東京大学出版会、2009年6月、総318頁)、③「通信特許と国際関係—在華無線權益をめぐる多国間紛争」(『模索する近代日中関係—対話と競存の時代』、229～248頁、東京大学出版会)、「通信メディアの展開と国際関係」(飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史〔2〕近代性の構造』、191～211頁、東京大学出版会、2009年8月)、「Effects on the Republic of China of the Collapse of the “Empires” after the First World War: Restoration of Sovereignty in the Former Concessions of Germany and Austria-Hungary」(『年報非文字資料研究』第6号、神奈川大学非文字資料研究

センター、2010年3月)、「天津の租界接收問題から見る東アジア地域秩序の変動」(『中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産』、1～47頁、御茶の水書房、2010年3月)、⑦「『満洲国』発行の絵はがきと東アジア絵はがきデータベース」(東亜地区租界生活之新議—仁川研究会一、2009年10月24日、於：仁川・仁川ハーバー・パークホテル〔韓国〕、要旨：『非文字資料研究』No.23、12～13頁、神奈川大学非文字資料研究センター、2010年1月)。

岸本 美緒

③「『中国』の擡頭—明末の文章書式に見る国家意識の一側面」(『東方学』118輯、1～21頁、東方学会、2009年7月)、「清初の『文武相見儀注』について」(『東洋史研究』68-2、92～121頁、東洋史研究会、2009年9月)、「冒捐冒考訴訟与清代地方社会」(邱澎生・陳熙遠編『明清法律運作中的權力与文化』、143～173頁、聯經出版公司、2009年4月)、⑤「『森正夫明清史論集』(全3巻、汲古書院、2006年)」(『中国—社会と文化』24号、391～400頁、中国社会文化学会、2009年7月)、⑧「『近世化』論と清朝」(岡田英弘編『別冊環⑩ 清朝とは何か』、232～238頁、藤原書店、2009年5月)、“Social Turbulence and Local Autonomy: Japanese Historians Interpret Chinese Social Groupings,” trans. by Joshua A. Fogel, *Late Imperial China*, Vol.30, No.1, June 2009, pp.119-150.。

北川 香子

①『東南アジア史研究の展開』(東南アジア学会監修、山川出版社、2009年5月、232 + 54頁)、③「プーム・キエン・ロミエト(カエト・トボーン・クモム)のハキーム任命騒動—プノム・ペン国立公文書館所蔵文書 No.20811の分析—」(『東南アジア—歴史と文化』38、187～208頁、東南アジア学会、2009年5月)、「元司法大臣アレクシス・ルイ・チュンの遺言状—フランス国立海外公文書センター所蔵文書 INDO-RSC-00495の分析—」(『南方文化』36、89～107頁、天理南方文化研究会、2009年12月)、“The Emergence of Pailin, The Lamd of Sapphires,” *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* No.67, pp. 109-127, Toyo Bunko, 2009.3.。

金 鳳珍

③「韓日共通の思想課題」(『翰林日本学』第14輯、63～85頁、翰林大学校日本学研究所、2009年5月)、「洪大容 燕行録의 対外観」(『世界政治 동아시 아 伝統地域秩序』12、第30集第2号、99～148頁、大学校国際問題研究所、

2010年2月)、⑦「Asianism in the Modern Korean Newspapers」(ASCJ at Sophia University—A Documentary History of an Ideology, 2009.6.21.)、「近代朝鮮と万国公法」(国際高等研究所研究プロジェクト「19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究」2009年度、2009年12月25日)、⑧「自他相関の開闢を目指す志民共創への呼びかけ」(『公共的良識人』第217号、1～2面、京都フォーラム、2009年12月1日)、「日韓共通の思想・実践課題と日本政府・民衆の当面課題」(『公共的良識人』第219号、6～7面、京都フォーラム、2010年2月1日)。

楠木 賢道

①『清初対モンゴル政策史の研究』(汲古書院、2009年12月、336頁)、③「清朝の皇帝儀礼と祖霊に供えた食物」(常木晃編『食文化—歴史と民族の饗宴』、124～146頁、悠書館、2010年3月)、「江戸時代知識人が理解した清朝」(岡田英弘編『別冊環⑩ 清朝とは何か』、240～253頁、藤原書店、2009年5月)、「『二国会盟録』からみた志筑忠雄・安部龍平の清朝・北アジア理解—江戸時代知識人のNew Qing History?—」(『社会文化史学』第52号、1～30頁、2009年5月)、⑧『『二国会盟録』からみた清朝・北アジア理解』(岡田英弘編『別冊環⑩ 清朝とは何か』、224～225頁、藤原書店、2009年5月)。

久保 亨

①『20世紀中国経済史の探究』(信州大学人文学部、2009年3月、138頁)、『叢書・中国的問題群〔5〕 進化する中国の資本主義』(加藤弘之氏と共著、岩波書店、2009年6月、250頁)、②『シリーズ20世紀中国史』(全4巻、飯島渉氏・村田雄二郎氏と共編、東京大学出版会、2009年7～10月、232+232+230+254頁)、③「『全球化の奔流と主体としての中国』」(『シリーズ20世紀中国史〔3〕 グローバル化と中国』、1～12頁、東京大学出版会、2009年9月)、「統制と開放をめぐる経済史」(『シリーズ20世紀中国史〔3〕 グローバル化と中国』、207～227頁、東京大学出版会、2009年9月)、「日本の20世紀中国史研究」(飯島渉氏・村田雄二郎氏と共著、『シリーズ20世紀中国史〔4〕 現代中国と歴史学』、1～24頁、東京大学出版会、2009年10月)、「『從戦時経済到戦後経済的轉換：嘗試与挫折』」(『一九四〇年代的中國』(上巻)、443～453頁、社会科学文献出版社、2009年5月)、⑦「戦後東アジア綿業の展開」(ワークショップ“グローバルヒストリー研究の新展開と近現代世界史像の再考”、2009年3月1～3日、於：淡路国際会議場)、「日本の民国史研究与“民国史論會”」(“中日学者民国史研究論壇”會議、2009年3月28・29日、於：南京大学)、「統制経済的起源」(“新中国建国史”国際学術

研討会、2009年6月22～24日、於：香港中文大学)、「關於戰時華北工場普查」(“明清以来区域發展与現代化進程”國際學術討論會、2009年8月17～19日、於：天津社会科学院)、「在華紡技術の評価と継承をめぐって」(“戰間期・大戦期の在華日本系企業の活動”シンポジウム、2009年9月28日、科研費交付グループ、於：東京大学本郷キャンパス)、「戦後中国の経済自由主義」(ワークショップ“中国近現代の自由主義”、2009年10月4日、科研費交付グループ、於：東京大学駒場キャンパス)、“The Cotton Industry under the War Economy in Free China”(“Wartime Economy and Culture in Chinese Daily Life, 1937-49”会議、2009年11月13・14日、於：カリフォルニア大学)、⑧「中国資本主義の個性」(『東亜』508、36～41頁、霞山会、2009年10月)、「羊肉餃子と張福運の20世紀中国」(『UP』444、36～41頁、東京大学出版会、2009年10月)。

窪添 慶文

③「南北朝期の国際関係と仏教」(鈴木靖民編『古代東アジアの仏教と王権』、269～292頁、勉誠出版、2010年3月)、「北魏服属諸族覚書」(『立正大学大学院紀要』26、27～48頁、2010年3月)。

熊本 裕

①“KHOTAN. History in the Pre-Iskamic Period,” Encyclopaedia Iranica online version at: <http://www.iranicaonline.org/articles/khotan-i-pre-islamic-history>、②“A St. Petersburg Bilingual Document and Problems of the Chronology of Khotan,” Journal of Inner Asian Art and Archaeology 3, (2008) [2009], pp. 75-82.、“Paul Pelliot and the Deśanā-parivarta of the Suvar ṇ abhāsa-sūtra,” Bulletin of the Asia Institute 19, (2005) [2009], pp. 79-84.、“The Injunctive in Khotanese,” Kazuhiko Yoshida and Brent Vine ed., East and West. Papers in Indo-European Studies, Bremen: Hempen (2009), pp. 133-149.

黒田 卓

⑦「ミールザー・ハビーブ・エスファハーニーによる『ハジ・ババの冒険』ペルシア語翻訳本をめぐって」(東北大学国際文化研究科「中東」表象研究会、2009年6月24日)、「『ギョーラン共和国』(1920-1921)をめぐる歴史と歴史認識：バクーとモスクワ」(東北大学東北アジア研究センターシンポジウム「歴史の再定義」、2010年2月21日、プロシーディング：同シンポジウム『歴史の再定義』、35～54頁、東北大学東北アジア研究センター、2010年2月)、⑧「イランの近代と向き合う」

『東北大学大学院国際文化研究科広報』22号、7頁、東北大学国際文化研究科、2009年10月)

敵 善平

①『叢書・中国的問題群 [7] 農村から都市へ—1億3000万人の農民大移動』(岩波書店、2009年7月、174頁)、③「格差是正と農民の権利回復—労働力移動に戸籍制限の壁」(関志雄・朱建栄ほか編『中国経済 成長の壁』、94～124頁、勁草書房、2009年10月)、「珠江デルタの農民工およびその就業状況—2008年珠江デルタ9市農民工アンケート調査に基づく分析」(『中国経済』、58～76頁、日本貿易振興会、2009年11月)、「農民工の就業と権利保障—2008年珠江デルタ9市農民工アンケート調査に基づく」(『大原社会問題研究所雑誌』、20～33頁、法政大学、2009年12月)、「帰郷と定住の間をさまよう農民工の選択—2008年珠江デルタ9市農民工アンケート調査に基づく」(『桃山学院大学経済経営論集』第51巻第2号、95～119頁、2009年12月)、「中国農村の基層組織：その構造と機能の転換」(『桃山学院大学総合研究所紀要』第35巻第2号、95～120頁、2009年12月)、「中国の雇用情勢、雇用促進対策および今後の展望—新大卒者、農民工を中心に」(『東亜』66～78頁、霞山会、2009年12月)、「特集・中国の農産物自給率を探る」(『農業と経済』2010年3月号、57～64頁、昭和堂)、「農家調査にみる貧困とその発生メカニズム—貴州省の事例分析を中心に」(『桃山学院大学経済経営論集』第51巻第3・4号、2010年3月)、「農民工の暮らしとネットワーク—2008年珠江デルタ9市農民工アンケート調査に基づく」(『桃山学院大学総合研究所紀要』第35巻第3号、2010年3月)、「20世紀中国における地域間人口移動」(中兼和津次編著『歴史的視野からみた現代中国経済』、77～109頁、東洋文庫、2010年3月)、⑤「阿古智子著『貧者を食らう国：中国格差社会からの警告』」(『中国研究月報』745号、中国研究所、2010年3月)、⑧「中国農業の基本問題を考える」(『オルタ』412、30～31頁、アジア太平洋資料センター、2009年9-10月)、「パネル討論 国際金融危機の中の中国経済：中国における労働力需給の構造変化」(『中国経済研究』第6巻第2号、60～72頁、中国経済学会、2009年9月)。

黄 東蘭

③「東洋史の時空—桑原隲蔵東洋史教科書についての一考察」(『愛知県立大学外国語学部紀要』(地域研究・国際学編)第42号、143～165頁、2010年3月)、④「歴史学」(社団法人中国研究所編『中国年鑑』2009年版、228～230頁、

毎日新聞社、2009年5月)、⑤「金子肇著『近代中国の中央と地方—民国前期の国家統合と行財政』(『東洋史研究』第68巻第2号、140～148頁、東洋史研究会、2009年9月)、⑧「教科書にみる日中の相互イメージ」(工藤貴正・樋泉克夫編『現代中国への道案内Ⅱ』、252～279頁、白帝社、2009年9月)。

興梠 一郎

①『中国 巨大国家の底流』(文藝春秋、2009年12月、318頁)。

小杉 泰

①『「クルアーン」一語りかけるイスラーム』(岩波書店、2009年12月、261頁+3頁)、②『イスラーム世界研究のための現代アラビア語マニュアル 2009』(岡本多平氏・竹田敏之氏と共著、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 イスラーム世界論講座 研究科附属イスラーム地域研究センター(KIAS) 若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP)、2009年4月、x+259頁)、『イスラーム銀行—金融と国際経済(イスラームを知る12)』(長岡慎介氏と共著、山川出版社、2010年1月、120頁+2頁)、『イスラーム地域研究のためのアラビア語基礎語彙3000語』(岡本多平氏・竹田敏之氏と共著、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター(KIAS) 大学院教育改革支援プログラム「研究と実務を架橋するフィールドスクール」、2010年2月、90頁)、『岩波イスラーム辞典 CD-ROM版』(大塚和夫氏等と共著、岩波書店、2009年4月、CD-ROM)、③「イスラームのこころ—宗教復興とイスラーム経済」(『こころの謎 kokoroの未来』、362～386頁、京都大学学術出版会、2009年11月)、「イスラーム世界の眺望」(田中浩編『ナショナリズムとデモクラシー(現代世界—その思想と歴史②)』、203～221頁、未來社、2010年3月)、「乾燥オアシス地帯における生存基盤とイスラーム・システムの展開」(『地球圏・生命圏・人間圏—持続的な生存基盤を求めて—』、89～124頁、京都大学学術出版会、2010年3月)、⑦「イスラーム金融の将来」(清水学氏との対談、論争アジア「イスラーム金融の将来」第31回アジアセミナー、2009年5月11日、『ワセダアジアレビュー2009』No.6、16～21頁、早稲田大学アジア研究機構・日経BP企画、2009年8月)、「イスラーム—7つの特質と現代的展開」(第15回フォーラム「新・地球学の世紀」、2009年5月12日)、「イスラーム地域研究とグローバル・イスラーム—国際組織の研究から—」(NIHUプログラム・イスラーム地域研究2009年度第1回合同集会、2009年7月11日、於：京都大学百周年時計台記念館・百周年記念ホール)、「イスラームの文理融合論と科学認識」(科学研究費補助金(基盤研究(A))「環インド

洋地域における宗教復興・テクノロジー・生命倫理」第1回研究会、2009年7月15日)、「宗教復興・現代社会・テクノロジー：イスラームの文理融合論と「科学」の問題」(科学研究費補助金(基盤研究(A))「環インド洋地域における宗教復興・テクノロジー・生命倫理」第2回研究会、2009年10月16日)、“Civilizational Challenges and Tasks in Front of Us: A Japanese Perspective”(国際シンポジウム“International Symposium on Islam, Science and Civilization”、科学研究費補助金(基盤研究(A))「環インド洋地域における宗教復興・テクノロジー・生命倫理」、共同利用・共同研究拠点早稲田大学公募研究「イスラームにおける知の構造と変容：思想的視点からの解明」、マレーシア国立大学イスラーム文明研究所(共催)、2009年10月31日)、「イスラーム復興をめぐる環インド洋地域の眺望」(科学研究費補助金(基盤研究(A))「環インド洋地域における宗教復興・テクノロジー・生命倫理」第5回研究会、2010年2月10日)、「外国人をとりまく諸問題—イスラーム編」(日本語教師養成講座、2009年7月1日、於：大阪YWCA専門学校)、⑧「社会と経済を変えた決定を活写、書評『失われた〈20年〉』、[編]朝日新聞「変転経済」取材班(朝日新聞、2009年4月12日)、「各国事情に左右される戦略物資、書評『石油をめぐる国々の角逐—通貨・安全保障・エネルギー』[著]長谷川榮一(朝日新聞、2009年4月19日)、「知恵を絞り徹底した情報管理、書評『サッカーという名の戦争—日本代表、外交交渉の裏舞台』[著]平田竹男(朝日新聞、2009年5月3日)、「連鎖的に進む破滅を強く警告、書評『壊れゆく地球—気候変動がもたらす崩壊の連鎖』[著]スティーヴン・ファリス(朝日新聞、2009年5月10日)、「人とモノの交流 つぶさに描く、書評『オマーン見聞録』[著]遠藤晴男(朝日新聞、2009年5月24日)、「発展めざましい地域の光と影、書評『ぼくが歩いた東南アジア』[著]村井吉敬(朝日新聞、2009年6月7日)、「間違った名で呼ばれるつらさ、書評『マイノリティの名前はどのように扱われているのか』[著]リアン・テルミ・ハタノ(朝日新聞、2009年6月28日)、「欧米の過ち 日本は他山の石に、書評『イスラームの怒り』[著]内藤正典(朝日新聞、2009年7月19日)、「必要な「尊い善意」生かす論議、書評『日本の臓器移植—現役腎移植医のジハード』[著]相川厚(朝日新聞、2009年7月26日)、「ユニークな女性学僧の人生論、書評『座標軸としての仏教学—パーリ学僧と探す「わたしの仏教」』[著]勝本華蓮(朝日新聞、2009年8月9日)、「友敵二元論がゆがめた国際関係、書評『イスラームはなぜ敵とされたのか—憎悪の系譜学』[著]臼杵陽(朝日新聞、2009年9月13日)、「電子本の登場が人文学を変える、書評『グーテンベルクからグーグルへ—文学テキストのデジタル化と編集文献学』[著]ピーター・シリングスバーク(朝日新聞、2009年10月11日)、「論争を重ね相対的位置が決まる、書評『イス

ラーム教「異端」と「正統」の思想史」[著] 菊地達也（朝日新聞、2009年10月25日）、「人材開国の機会にふらつく政策、書評『長寿大国の虚構—外国人介護士の現場を追う』」[著] 出井康博（朝日新聞、2009年11月15日）、「古今の哲学者と語った知的遍歴、書評『読むと書く—井筒俊彦エッセイ集』」[著] 井筒俊彦（朝日新聞、2009年11月22日）、「知識人の苦闘を記した追悼論集、書評『エドワード・サイード—対話は続く』」[編] ホミ・バーバ、W・J・T・ミッチェル（朝日新聞、2009年11月29日）、「書評委員お薦め「今年の3点」：渡辺公三『闘うレヴィ=ストロース』／青柳正規『興亡の世界史 00—人類文明の黎明（れいめい）と暮れ方』／梶屋友子『すぐわかる イスラームの美術 建築・写本芸術・工芸』」（朝日新聞、2009年12月27日）、「砂漠の中のみずみずしい世界、書評『湿原のアラブ人』」[著] ウィルフレッド・セシジャー（朝日新聞、2010年1月10日）、「極限まできた「反開発」を実証、書評『ホロコーストからガザへ—パレスチナの政治経済学』」[著] サラ・ロイ（朝日新聞、2010年1月17日）、「便利で安全な「集合知」の利用を、書評『ネット検索革命』」[著] アレクサンダー・ハラヴェ（朝日新聞、2010年2月14日）、「秩序崩壊後に新しい社会を構想、書評『西周の政治思想』」[著] 菅原光（朝日新聞、2010年3月7日）、「国際的な発信力を高める必要性、書評『日本語は生きのびるか—米中日の文化史的三角関係』」[著] 平川祐弘（朝日新聞、2010年3月21日）。

小浜 正子

- ①『中華人民共和国における生殖コントロールと女性たちの対応』（平成18～20年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書、2009年8月、全112頁）、
- ②『東南アジアにおける近代化とリプロダクションの変容』（松岡悦子氏・大日方純子氏・嶋澤恭子氏・幅崎麻紀子氏・宮菌夏美氏との共編著、平成18～20年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書〔研究代表者：松岡悦子〕、2009年、全199頁）、
- ③「非合法墮胎から計画生育へ—建国前後の性と生殖をめぐる言説空間の変容」（日本上海史研究会編『建国前後の上海』、143～172頁、研文出版、2009年6月）、「生殖コントロールとジェンダー」（飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史〔3〕 グローバル化と中国』、185～203頁、東京大学出版会、2009年9月）。

小松 久男

- ③「中央アジアの動態を読む：GISによる地域研究の試み」（後藤寛氏と共著、水島司・柴山守編『地域研究のためのGIS』、95～112頁、古今書院、2009年10

月)、⑦「イブラヒムの旅路：イスラーム世界と日本」(日本大学史学会大会、2009年6月13日、於：日本大学文理学部百周年記念館)、⑧「バルトリド：中央アジア史に不朽の業績」(歴史を記録した人々 19、『興亡の世界史』月報 19、1～3頁、講談社、2009年9月)。

小南 一郎

②『中国近世文芸論—農村祭祀から都市芸能へ』(斯波義信氏・田仲一成氏と共編、東洋文庫(東方書店との共同出版)、2009年12月、320頁)、③「白蛇伝」と宋代の杭州」(『中国近世文芸論—農村祭祀から都市芸能へ』、191～212頁、東洋文庫[東方書店]、2009年12月)、「半開きの扉の彼方に—靈魂のゆくえ」(『國學院中国学会報』55輯、1～18頁、國學院大学、2009年12月)、「天帝の貴畜—龍の機能をめぐって」(『泉屋博古館紀要』26巻、1～24頁、泉屋博古館、2010年2月)、「中国西部地域における伏羲・女媧図像(下)」(『龍谷大学論集』474・475輯、395～433頁、龍谷大学、2010年2月)、⑦「半開きの扉の彼方に—靈魂のゆくえ」(國學院中国学会大会、2009年6月14日、於：國學院大学)、「帝から天へ—天の觀念の形成」(日本道教学会大会、2009年11月7日、於：東京大学)、「図像配置の意味—漢代墓葬画像を例として」(中国考古学会大会、11月22日、於：筑波大学)。

櫻井 徹

⑧「映画『慕情』、歌と映像とモリソン Jr. と」(『友の会だより』5、6～8頁、東洋文庫、2009年10月)、「Editor's column」(『友の会だより』5、8頁、東洋文庫、2009年10月)、「美の巡礼『日本植物誌』」(『マンスリーみつびし』2010-1、5頁、三菱広報委員会、2010年1月)。

桜井 由躬雄

③「ハノイ、ホアンキエムの微高地地表の形成」(『東方学』第118輯、163～178頁、東方学会、2010年1月)。

佐藤 健太郎

③「13世紀マグリブの知識人と聖者崇敬—アブー・アッバース・アザフィーによる聖者伝を通して」(山本英史編著『アジアの文人が見た民衆とその文化』、145～173頁、慶應義塾大学言語文化研究所、2010年3月)、⑥イブン・ハルドゥーン「イブン・ハルドゥーン自伝2」(阿久津正幸・中町信孝訳註、佐藤健太郎註『イ

スラーム地域研究ジャーナル』2、35～56頁、早稲田大学イスラーム地域研究機構、2010年3月）、⑦「スペインのアラブ学とアンダルス」（早稲田大学イスラーム地域研究機構第7回定例研究会、2009年11月25日）、「16世紀スペインにおけるモリスコの「知」の伝達～アルハミーアとムハンマド伝」（慶應義塾大学言語文化研究所「アジアにおける「教育メディア」の比較史研究」研究会、2009年11月13日）、⑧「後ウマイヤ朝のカリフ宣言」、「コルドバの繁栄」、「アルハンブラの情景」（『世界史史料 第2巻 南アジア・イスラーム世界・アフリカ』、159～161、162～164、205～206頁、岩波書店、2009年7月）。

佐藤 次高

①『イスラーム—知の営み（イスラームを知る1）』（山川出版社、2009年9月、102頁）。

佐藤 宏

③ “Power as a Driving Force of Inequality in China: How Do Party Membership and Social Networks Affect Pay in Different Ownership Sectors?,” CESifo Economic Studies, Vol.55, No.3-4, pp.624-647, July 2009, joint with Shuang Li and Ming Lu.、 “Growth of Villages 1990-2002,” Frontiers of Economics in China, Vol.5, No.1, pp.135-149, January 2010.、「中国農村の収入増長：1990-2002」（『世界経済文庫』2009年第4期、53～62頁、復旦大学、2009年10月）、「誰进入了高收入行業？—関係、戸籍与生産率的作用」（陳釗氏・陸銘氏と共著、『経済研究』2009年第10期、121～132頁、中国社会科学院経済研究所、2009年）、“Social Networks and Labor Market Entry Barriers Understanding Inter-industrial Wage Differentials in Urban China,” Global COE Hi-Stat Discussion Paper Series No. 84, Hitotsubashi University, September 2009, joint with Zhao Chen and Ming Lu.、 “Identity, Inequality, and Happiness: Evidence from Urban China,” Global COE Hi-Stat Discussion Paper Series No. 131, Hitotsubashi University, March 2010, joint with Shiqing Jiang and Ming Lu.、「中国における農業産業化の展開と農民專業合作組織の経済的機能—世帯・行政村データによる実証分析—」（實劔久俊氏と共著、Global COE Hi-Stat Discussion Paper Series No. 86, 一橋大学、2009年9月）。

佐藤 仁史

③「近現代江南的村落社会与民間信仰—以吳江市的口述調查為中心」（復旦大学歴史系編『江南与中外交流（復旦史学集刊第三輯）』、69～82頁、復旦大学出版社、2009年11月）、「民国期江南の廟会組織と村落社会—吳江市における口

述調査を中心に」(『近きに在りて』55号、57～70頁、2009年5月)、⑦「従田野調査看近現代江南農村的“生活世界”—民間信仰與基層社會關係」(第4回日韓兩地域中国近現代史研究者交流会、2010年1月9日、於：東京学芸大学)、「船上生活者からみる近現代中国の基層社会—浙江省建徳・桐廬九姓漁戸口述調査に即して」(太田出氏との共同報告、国際ワークショップ「中国基層社会におけるフィールドワークの現状と課題」、2009年10月24日、於：慶應義塾大学東アジア研究所)、⑧『聞き書き・関西華僑のライフヒストリー』第2号(共著、神阪京華僑口述記録研究会編、4～97頁、神戸華僑歴史博物館、2009年12月)。

澤江 史子

③「移民をめぐるトランスナショナル政治と出身国—トルコを中心とした試論—」(日本比較政治学会編『国際移動の比較政治学』(日本比較政治学会年報第11号)、37～68頁、ミネルヴァ書房、2009年)、⑦“Islamic Women’s Advocacy in Turkey: The Case of the Capital City Women’s Platform,” The International Workshop “Diversity of Islamic NGOs,” October 10–11, 2009, Toyo University, Tokyo., “Rebuilding a Confessional State: Islamic Ecclesiology in Turkey, Russia, and China,” with Kimitaka MATSUZATO, The Second International Symposium of Comparative Research on Major Regional Powers in Eurasia “Comparing the Politics of the Eurasian Regional Powers: China, Russia, India, and Turkey,” December 12–13, 2009, Hosei University, Tokyo.。

塩沢 裕仁

①『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』(雄山閣、2010年1月、総300頁)、『東漢魏晋南北朝都城境域研究(洛陽博物館文化叢書)』(洛陽博物館、2009年4月、総210頁)、③「白居易の暮らした洛陽—その主要遺跡と水環境—」(『白居易研究年報』10号、100～134頁、白居易研究会、勉誠出版、2009年12月)、⑦「南陽・登封の遺跡」(六朝史研究会、2010年2月6日、於：京都大学)、「漢魏洛陽城の都市空間—隋唐長安・洛陽への契機—」(歴史研究会第34回大会、2009年11月28日、於：成蹊大学)、「許昌古城と周辺の遺跡」(京都大学人間環境学公開講座、2009年8月17日、於：京都大学)、「洛陽の関塞・街道・水道遺址」(洛陽考古論壇、2009年6月12日、於：洛陽市文物局)。

篠崎 陽子

⑧「日本の博物館の現状と課題—東洋文庫ミュージアムの一例を通して」(第4回

モンゴル日本文化フォーラム、2010年3月3日、於：モンゴル商工会議所）。

斯波 義信

②『中国近世芸論：農村祭祀から都市芸能へ』（小南一郎氏・田仲一成氏と共編、東洋文庫（東方書店との共同出版）、2009年12月、320頁）、③「近世における社会の都市化と宗教の世俗化」（『中国近世芸論』289～312頁、東洋文庫〔東方書店〕、2009年12月）、「中国社会経済史用語解の作成」（『東方』345号、2～4頁、東方書店、2009年11月）、「海洋史的効用」（『漢学研究通訊（台北）』28巻3期（通巻111号）、17～20頁、漢学研究センター、2009年8月）、⑦“On the emergence and intensification of the pattern of rural-urban continuum in the late imperial Jiangnan society” in International Symposium on the Market Economy of the Lower Yangzi delta. in Late Imperial China: Space, institution and Networks, October 5-6, 2009, Academia Sinica, Taipei.

嶋尾 稔

③「ベトナムの家礼と民間文化」（山本英史編『アジアの文人が見た民衆とその文化』、101～143頁、慶應義塾大学言語文化研究所、2010年3月）、「阮朝硃本と『大南寔録』（『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』41、205～224頁、2010年3月）。

清水 信行

③「渤海上京龍泉府出土の瓦 再考」（『扶桑 田村晃一先生喜寿記念論文集（青山考古25・26号合併号）』359～419頁、青山考古学会 2009年7月）、⑦「Co-research of Japan and Russia about Bohai History」（ロシア科学アカデミー極東支部諸民族歴史学・考古学・民族学研究所 中世部会研究発表会、2010年3月23日）、⑧「2009年度 ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告（遺構編）—第3章 まとめ—」（『青山史学』第28号、18～20頁、青山学院大学文学部史学研究室、2010年3月）、⑧「近代について—ガウチャーホールと新ガウチャーホール—」（『東京都渋谷区 青山学院構内遺跡 第4地点—青山学院青山キャンパス内大学A棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』、95～98頁、学校法人青山学院・（株）大成エンジニアリング、2010年3月）。

庄垣内 正弘

③「The Fanwangjing 梵網經 (Brahmajā-stra): A Chinese text transcribed in the Uighur script」（『突厥語文学研究—耿世民教授八十華誕記念文集—』、426～

434 頁、北京・中央民族大学出版社)、「ロシア所蔵のウイグル文『入阿毘達磨論』注釋書斷片」(『チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究』CSEL15、81～118 頁)。

真道 洋子

③ “The Islamic Glass Excavated in Egypt: Fustāt, Rāya and al- Ṭūr al-Kilānī,” *Annales du 17^e congrès de l’association internationale pour l’histoire du verre*, Antwerpen, 2006, pp. 308-313, 668, Antwerpen, 2009.、『初期イスラーム・ガラスの研究～ラーヤ遺跡出土品を中心に』(博士学位論文、早稲田大学、2010 年 3 月 15 日)、⑦ 「イスラーム時代の陶器とガラス器」(『「モノ」が語るイスラーム』、第 3 回 岩手イスラーム考古学研究会公開講演会、2010 年 3 月 20 日、於：北上市生涯学習センター)、「シナイ半島の港湾都市 ラーヤとトゥール・キラーニー」(『イスラーム地域研究機構 共同利用・共同研究拠点 早稲田大学イスラーム地域研究拠点強化事業 公開講演会「モノ」の世界から見たイスラーム 第 2 回 エジプト・シナイ半島の港町に見る生活文化』、2010 年 1 月 31 日、於：早稲田大学小野記念講堂)、「ラスター彩陶器成立の背景としてのラスター・ステイン装飾ガラス」(早稲田大学イスラーム地域研究機構 拠点強化事業『「モノ」から見た知の技術と生活文化の変容と交流』第 2 回研究会、2009 年 5 月 11 日、於：早稲田大学 41-31 号館 2 階大会議室)、「シナイ半島ラーヤおよびトゥール・キラーニー遺跡出土のガラス器と陶器に見る東西交易」(第 18 回日本ナイル・エチオピア学会学術大会、2009 年 4 月 26 日、於：総合地球環境学研究所講演室)。

新免 康

② Studied on Xinjiang Historical Sources in 17-20th Centuries, Toyo Bunko Research Library 12, (James A. MILLWARD 氏・菅原純氏と共編、東洋文庫、2010 年、xi + 317 頁)。

須川 英徳

③ 「士族家門における威信と富」(『韓国朝鮮文化研究』第 8 号、28～49 頁、韓国朝鮮文化研究会、2009 年 10 月)、「17-18 世紀の東アジア世界における日韓関係—グローバルヒストリーとの接続」(『第二期日韓歴史共同研究委員会 第二分科会報告書』、125～149 頁、2010 年 3 月)。

鈴木 恵美

⑦「エジプトにおける世襲議員の家族史」（東洋文庫現代イスラーム研究班合同研究会、2010年3月4日、於：東北大学）、「ヒズブッラー摘発事件—エジプトの対イラン政策と体制維持—」（『中東研究』第504号（2009/2010・Vol.1）、99～113頁、2009年度）、「エジプト・イラン関係悪化の諸要因」（『2009年大統領選挙後のイランの総合的研究—内政、外交、国際関係—』、99～113頁、財団法人日本国際問題研究所、2010年3月）。

鈴木 均

③「イランの台頭と中東域内関係の変容」（『軍縮問題資料』第342号、32～39頁、宇都宮軍縮研究室、2009年5月）、「A Critical Review of Opinion Polls relating to Iranian Voting Intentions: Problems of Research Methodology as applied to Complex Societies,」IDE-JETRO, Discussion Paper No.231, March 2010.、⑤「アフガン零年 OSAMA」、「エクソシスト」、「桜桃の味」、「カンダハール」、「10話」、「ハーフェズ ペルシヤの詩」、「マールムーラク（蜥蜴）」（井上順孝編『映画で学ぶ現代宗教』、弘文堂、2009年5月）、⑦「西アジアの茶文化—イランとアフガニスタン」（日本紅茶協会、2009年9月18日）、「イラン情勢と今後の展開」（東芝輸出管理セミナー、2010年2月9日）、⑧「イランからみたアフガニスタンの光景」（『子供の情景』映画パンフレット、12～13頁、岩波ホール、2009年4月）、「アフガニスタンの苦悩と国際支援」（『国際開発ジャーナル』第631号、28～29頁、2009年6月）、「アハマディネジャド逃げ切りか？—対抗馬ムサビの追い上げで波乱も」（『金融財政ビジネス』第10003号、20～23頁、2009年6月）、「近づく軍部独裁の足音—かき消された改革派の『勝利宣言』」（『金融財政ビジネス』第10008号、4～8頁、2009年6月）、「選挙後の危機が続くイラン政治『3つのシナリオ』」（『エコノミスト』第4047号、26～27頁、2009年7月）、「アフガニスタンとイラン—二つの大統領選挙が問うているもの」（『外交フォーラム』第255号、26～29頁、2009年10月）、「特集にあたって（特集：イラン—革命から30年目の危機）」（『アジア研ワールド・トレンド』第169号、2～5頁、2009年10月）、「イランの体制危機—対立の構図と今後の展開」（『アジア研ワールド・トレンド』第169号、31～34頁、2009年10月）、「参考資料—アフマディネジャド第二期閣僚候補者と承認状況」（『アジア研ワールド・トレンド』第169号、35頁、2009年10月）、「アフガン問題—米軍増派、カルザイ政権2期目、復興支援、対周辺国関係」（『エコノミスト』（臨時増刊）、100～101頁、2009年12月）、「アフガニスタンについて知っておくべきこと」（『宗教と現代がわかる本』、118～121頁、平凡社、2010年3月）、「イランのお茶事始め」（『緑茶通信』第26号、27～30頁、2010年3月）。

鈴木 博之

③「金龍四大王考—明代の大運河と河神—」(『集刊東洋学』102、22～38頁、中国文史哲研究会、2009年10月)。

砂山 幸雄

②『新中国の60年—毛沢東から胡錦濤までの連続と不連続』(共著、日本現代中国学会編、創土社、2009年9月、309頁)、②「『思想解放』と改革開放」(『現代中国』第83号、19～34頁、日本現代中国学会、2009年9月)、⑤「胡平著、石塚迅訳『言論の自由と中国の民主』」(『東方』344号、20～23頁、東方書店、2009年10月)、⑧「並木頼寿氏の遺稿に寄せて」(『中国研究月報』744号、32頁、中国研究所、2010年2月)。

妹尾 達彦

①『世界史史料3 東アジア・内陸アジア・東南アジアI—10世紀まで—』(共著、担当箇所:「北魏洛陽」「唐洛陽」「唐長安」、歴史学研究会編、岩波書店、2009年12月、総頁391+16頁)、③「胡人与漢人—「異人買宝譚」与漢人認識之変遷」(黄応貴主編『空間与文化場域:空間之意象、実践与社会的生産』、107～134頁、台北・漢学研究中心、2009年10月)、「中国城市建筑史研究在日本」(東南大学建築学院編『劉敦楨先生誕辰110周年紀年暨中国建筑史学史研討會論文集』、117～125頁、南京・東南大学出版社、2009年11月)、「長安、礼儀的都—以円仁『入唐求法巡礼行記』為素材—」(榮新江主編『唐研究』第15号、385～434頁、北京・北京大学出版社、2009年12月)、「都市の千年紀を迎えて—中国近代都市史研究の現在—」(中央大学人文科学研究所編『アフロ・ユーラシア大陸の都市と宗教』、63～140頁、中央大学人文科学研究所、2010年3月)、⑤「中国的、文学的近代—大木康『明清文学のふびと—職業別文学誌—』」(『創文』521、23～26頁、創文社、2009年7月)、⑦「世界史の新しい見方—中国都市史研究の立場から—」(竹川由梨氏整理、『茨城史学』第44号、18～28頁、茨城県高等学校教育研究会歴史部、2009年5月)、「長安、9世紀的世界都市—以圓仁『入唐求法巡礼行記』礼儀史料為素材—」(陝西師範大学校慶65周年特邀専場学術講座、2009年11月9日、於:西安・陝西師範大学長安校図書館一層大報告庁)、「長安与西市」(大唐西市公司專題講演会、2009年11月10日、西安・大唐西市公司)、“The Urban Pattern of the China Past in World History,” (ESF-JSPS Frontier Science Conference Series for Young Researcher “Contact Zones of Empires in Asia and Europe: Complexity, Contingency, Causality,” Kyushu

University, 3 March 2010.)、⑧「宋代の政治と士風の変遷」(妹尾達彦監訳・見城光威訳・黄寬重著、『中国—社会と文化』第24号、106～140頁、中国社会科学学会、2009年7月)。

関尾 史郎

①『世界史史料3 東アジア・内陸アジア・東南アジアI—10世紀まで—』(共著、歴史学研究会編、岩波書店、2009年12月、総頁391+16頁)、『魏晋南北朝史研究：回顧与探索—中国魏晋南北朝史学会第九届年会論文集—』(共著、中国魏晋南北朝史学会・武漢大学中国三至九世紀研究所編、湖北教育出版社、2009年8月、総頁775頁)、『百年敦煌学—歴史・現状・趨勢—』(共著、劉進寶主編、甘肅人民出版社、2009年12月、総530頁)、②『五胡十六国覇史輯佚(稿)』(岩本篤志氏と共編、新潟大学、2010年2月、総頁313頁)、③「南京出土の名刺簡について—「魏晋「名刺簡」ノート」補遺—」(『資料学研究』7、横58～64頁、新潟大学、2010年3月)、④「東亜細亜に於ける書写材料と文字の西漸を巡って—高昌・樓蘭・于闐を中心として—」(韓国・東北亜細亜歴史財団シンポジウム「古代文字資料による東亜細亜の文化交流と疏通」、2009年6月10日、於：ソウル・国立故宮博物館〔韓国〕、要旨：『「古代文字資料による東亜細亜の文化交流と疏通」予稿集』、127～144頁、韓国・東北亜細亜歴史財団、2009年6月)、「南北科研・西南班の課題と方法」(長沙呉簡研究会例会、2009年9月13日、於：立正大学大崎キャンパス)、「魏晋簡牘研究への一視点」(国際ワークショップ「新出魏晋簡牘をめぐる諸問題」、2009年9月13日、於：立正大学大崎キャンパス)、「画像磚の出土墓をめぐる—「甘肅出土、魏晋時代画像磚および画像磚墓の基礎的整理」補遺—」(南北科研・西北班例会、2009年9月26日、於：埼玉大学)、「研究課題と閲覧希望簡牘」(長沙呉簡研究会、2009年11月21日、於：立正大学大崎キャンパス)、「長沙簡牘博物館における調査(2009年12月)概要」(「古代における文字文化の形成過程の基礎的研究」研究会、2009年12月23日、於：国立歴史民俗博物館)、⑤「戸品出錢簡の形式をめぐる—2009年9月の調査から—」(『長沙呉簡研究報告』2009年度特刊、23～25頁、科学研究費補助金(基盤研究(A))「出土資料群のデータベース化とそれをういた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析」プロジェクト/三菱財団人文科学研究助成「新出土三国呉簡・西晋簡と地方行政システムの研究」プロジェクト、2010年2月)、「賦税納入簡の形式と機能をめぐって—2009年12月の調査から—」(『長沙呉簡研究報告』2009年度特刊、81～85頁、科学研究費補助金(基盤研究(A))「出土資料群のデータベース化とそれをういた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析」プロジェ

クト／三菱財団人文科学研究助成「新出土三国呉簡・西晋簡と地方行政システムの研究」プロジェクト、2010年2月）、「画像磚の出土墓をめぐって—「甘肅出土、魏晋時代画像磚および画像磚墓の基礎的整理」補遺—」（『西北出土文献研究』2009年度特刊、89～94頁、科学研究費補助金（基盤研究（A））「出土資料群のデータベース化とそれを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析」プロジェクト、2010年2月）。

関本 照夫

⑧「學問の思い出—中根千枝先生を囲んで」（『東方学』118、151～182頁、東方学会、2009年7月）。

曾田 三郎

①『立憲国家中国への始動—明治憲政と近代中国』（思文閣出版、2009年5月、388頁）。

高田 幸男

③「近代教育と社会変容」（飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史2 近代性の構造』東京大学出版会、2009年、125～144頁）、⑦「江南科研の概略・成果・課題」（国際シンポジウム「江南地域史と新史料」2009年12月19日、於東京・明治大学）。

高遠 拓児

③「清代秋審文書と「蒙古」—十八世紀後半～二十世紀初頭の蒙古死刑事案処理について」（『東洋文化研究所紀要』157、37～82頁、東京大学東洋文化研究所、2010年3月）、④「2008年の歴史学界—回顧と展望（中国—明・清）」（『史学雑誌』118-5、221～230頁、史学会、2009年5月）、⑤「国立国会図書館蔵『本庁審察紀事稿』について—ある秋審成案集の紹介」（『東洋法制史研究会通信』17、4～6頁、東洋法制史研究会、2009年8月）、⑥「太田出「明清時代「歌家」考—訴訟との関わりを中心に」（『法制史研究』59、330～333頁、法制史学会、2010年3月）、⑦「清代における秋審と「蒙古」（法制史学会第61回総会、2009年4月18日、要旨は『法制史研究』60に掲載予定）。

瀧下 彩子

⑦『『国聞週報』と早期中国映画』（香港大学・香港電影資料館主催『早期中国

電影歴史検討会』、2009年12月15、16日、於：香港大学)。

武内 紹人

③ “Tshar, srang, and tshan: Administrative units in Tibetan ruled Khotan,” *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 3, pp. 145–148, Circle of Inner Asian Art, 2009.)、⑧ 「敦煌出土の古代シャンシュン語文献」(国立民族学博物館編『チベットボン教の神がみ』126～127頁、千里文化財団、2009年4月)、「チベット語」(梶茂樹・中島由美・林徹編『事典 世界のことば141』、260～263頁、大修館書店、2009年4月)、「《英国図書館蔵斯坦因収集品中的新疆出土古藏文写本》導言」(楊銘・楊壯立訳、『西域研究』2009年第1期、67～77頁)、「西ブータンにおけるサイコロ占い現地調査報告」(西田愛氏と共著、『外国学研究』76、57～64頁、神戸市外国語大学、2009年)。

武田 幸男

① 『広開土王碑墨本の研究』(吉川弘文館、2009年4月、400頁)、③ 「広開土王碑「李超瓊本」の来歴問題」(『朝鮮学報』214、朝鮮学会、2010年1月)。

田島 俊雄

② 『中国セメント産業の発展—産業組織と構造変化』(朱蔭貴氏・加島潤氏と共編著、御茶の水書房、2010年3月、344頁)、③ 「巨大化する中国セメント産業と「小水泥」問題」(中兼和津次編著『歴史的視野からみた現代中国経済』、141～182頁、東洋文庫、2010年3月)、「中国・東アジアにおけるセメント産業の発展—産業特性と輸入代替工業化、産業組織の分散化—」(『中国セメント産業の発展—産業組織と構造変化』、3～30頁、御茶の水書房、2010年3月)、④ 「世界的食料価格高騰と東アジアの農業・食料」(『農業経済研究』第81巻第2号、2009年9月、113～114頁)、⑧ 「バイオエタノールと中国農業の現段階」(『天地人』第7号、総合地球環境学研究所中国環境問題研究拠点、2009年7月号、4～5頁)、「セメント産業に魅せられて」(『現代中国地域研究 拠点連携プログラム』ニューズレターNo.4、2009年9月、1頁)、「COP15と中国の環境・経済問題」(『天地人』9号、総合地球環境学研究所中国環境問題研究拠点、2010年1月号、1～2頁)。

多田 狷介

⑤ 「劉文海著・李正宇校点『西行見聞記』」(『史艸』50、169～177頁、日本女子大学史学研究会、2009年11月)、⑦ 「訪問西安的日本人」(陝西師範大学西

北歴史環境与経済社会発展中心、2009年12月24日)。

立川 武蔵

①『聖なる幻獣』(写真:大村次郷、集英社、2009年12月、219頁)、③「ボン教とはどのような宗教か」(長野泰彦編『チベット ボン教の神々』、20～27頁、千里文化財団、2009年4月)、「ボン教とマンダラ」(『チベット ボン教の神々』、28～36頁、千里文化財団、2009年4月)、「ボン教とチベット仏教」(『チベット ボン教の神々』、36～49頁、千里文化財団、2009年4月)、「ボン教の悪趣清浄マンダラ」(『チベット ボン教の神々』、79～86頁、千里文化財団、2009年4月)、「舎論の思想(一)」(『禅研究所紀要』35、45～55頁、愛知学院大学禅研究所、2010年3月)。

田仲 一成

②『中国近世文芸論—農村祭祀から都市芸能へ』(小南一郎氏・斯波義信氏と共編、東洋文庫[東方書店との共同出版]、2009年12月、320頁)、③「再論民間祭祀文化在戲劇起源史上的重要作用—対傳謹教授《中国戲劇史発源于鄉村祭祀儀礼説質疑》一文的回应」(中文、『民俗研究』2009年第2期、山東大学、2009年4月)、「我心目中的先師仁井田陞先生的生平與學術活動」(中文、『古今論衡』第19期、112～123頁、台湾中央研究院歷史語言研究所、2009年6月)、「農村祭祀を都市文芸に押し上げるメカニズム」(『中国近世文芸論』、3～23頁、東洋文庫[東方書店]、2009年12月)、「珠江デルタにおける市場地祭祀演劇の展開」(『中国近世文芸論』、129～156頁、東洋文庫[東方書店]、2009年12月)、「おわりに—総括と展望」(『中国近世文芸論』、313～320頁、東洋文庫[東方書店]、2009年12月)、「華南における正月の祭祀空間」(鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』、179～213頁、慶應義塾大学東アジア研究所、2009年12月)、⑦「中国郷村における演劇の発生—徽州の儺戯・目連戯を中心とする考察—」(早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム講座、2009年2月、講演記録・要旨:早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム『News Letter』第7号、6頁、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム、2010年3月)。

田中 仁

②『現代「中国」の社会変容と東アジアの新環境 第3回国際シンポジウム論文集』(宮原曉氏と共編、大阪大学中国文化フォーラム・大阪大学グローバルコラボレーションセンター、2009年8月、387頁)、「抗日戦争前期中国共産党的党軍関係初

探：中共党史研究的再考察」(中国社会科学院近代史研究所民国史研究室ほか編『一九四〇年代的中国』、306～316頁、社会科学文献出版社、2009年5月)、「日中戦争前期における華北農村と中国共産党：河北省涿源県の“800日”」(『現代「中国」の社会変容と東アジアの新環境 第3回国際シンポジウム論文集』、353～362頁、大阪大学中国文化フォーラム・大阪大学グローバルコラボレーションセンター、2009年8月)、⑦「日中戦争前期における華北農村と中国共産党：河北省涿源県の“800日”」(現代「中国」の社会変容と東アジアの新環境 第3回国際シンポジウム、2009年8月26日、於：JICA大阪)、「三校国際シンポジウムの成果と課題」(大阪大学中国文化フォーラム研究セミナー：現代中国研究における東アジア・学校間交流の可能性、2010年2月22日、於：大阪大学)。

田中 比呂志

①『近代中国の政治統合と地域社会—立憲・地方自治・地域エリート』(研文出版、2010年3月、436頁)、③「村の秩序と村廟」(『近きに在りて』55号、98～103頁、2009年5月)、「清末の鉄道国有化問題」の現在」(『歴史評論』711号、44～50頁、校倉書房、2009年6月)、「地域社会の構造と変動」(飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史〔2〕近代性の構造』、37～55頁、東京大学出版会、2009年8月)、⑤「金子肇著『近代中国の中央と地方』」(『歴史学研究』865号、46～49頁、歴史学研究会、2010年3月)、⑦「地方精英の立憲構想與地方自治論—以張謇為中心」(第五屆張謇國際研討會、2009年4月18日於：江蘇省海門市〔中国〕)、「集体化時代中国農村社会的家族」(集体化時代の中国農村社会研討會、2009年8月8日、於：山西省晋陽県大寨鎮〔中国〕)。

C. A. ダニエルス

②『タイ文化圏の中のラオス：物質文化・言語・民族』(慶友社、東京、2009年10月29日、401頁)。③「雲南人(ホー)のボンサーリー史—山地民を統治した傅一族の事例を通して」(新谷忠彦・クリスチャン・ダニエルス・園江満共編著『タイ文化圏の中のラオス：物質文化・言語・民族』71～124頁、慶友社、東京、2009年10月29日)、③“The Formation of Tai Polities Between the 13th and 16th Centuries: the role of technological transfer”, (Geoff Wade Ed., China and Southeast Asia; Routledge Library on Southeast Asia, Volume II Southeast Asia and Ming China (from the fourteenth to the sixteenth century) pp. 295~343, Routledge, London and New York, 2008)、⑦「傣族—雲南から国境を越えて」(工学院大学孔子学院中国文化講座、中国の少数民族西南編、2009年4月21日)、「雲

南と東南アジアに跨るタイ系民族の世界を行く」((財) 東洋文庫 2009 年度春期東洋学講座、2009 年 5 月 12 日、要旨：『東洋学報』91-2、139～140 頁、東洋文庫、2009 年 9 月)、⑦「タイ文化圏の歴史」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「タイ文化圏における山地民の歴史的研究」主催「タイ文化圏教育研究プログラム」、2009 年 5 月 15 日)、「雲南の天然資源保護・管理に関する史料とその解釈—18 世紀～19 世紀を中心として」、((財) 東洋文庫主催『中国環境史ワークショップ環境史の視角とその史料をめぐって』、2009 年 9 月 18 日、要旨：<http://www.tbcas.jp/ja/sympows09a.html>)、「C18-19th Stone inscriptions concerning the environment from Yunnan Province, China」(Needham Research Institute Text Reading Seminars, Michaelmas Term 2009、2009 年 10 月 16 日)、「18 世紀後半～19 世紀前半における地域住民の天然資源保護・管理—元江流域・メコン河流域を事例として」(2009 年史学会 107 回大会：公開シンポジウム「環境と歴史学」、東京大学、2009 年 11 月 7 日、要旨：『史学雑誌』119-1、95～96 頁、史学会、2010 年 1 月)。

竺沙 雅章

③「遼金代燕京の禅宗」(『禅学研究』88、115～148 頁、花園大学禅学研究会、2010 年 3 月)。

辻本 裕成

③「記録の中の医師達—医事説話集『医談抄』理解のために—」(『南山大学日本文化学科論集』10、15～35 頁、南山大学日本文化学科、2010 年 3 月)、「「虫」観・「虫」像の変遷と近代化—「五臓思想」から「脳・神経」中枢観へ—(上)」(長谷川雅雄氏・美濃部重克氏・ペトロ＝クネヒト氏との共著、『アカデミア 人文社会科学編』89、151～215 頁、南山大学、2009 年 9 月)、「「虫」観・「虫」像の変遷と近代化—「五臓思想」から「脳・神経」中枢観へ—(下)」(長谷川雅雄氏・美濃部重克氏・ペトロ＝クネヒト氏との共著、『アカデミア 人文社会科学編』90、141～258 頁、南山大学、2010 年 1 月)。

土田 哲夫

③「中日戦争与中国宣戦問題」(中国社会科学院近代史研究所・西南大学編『戦時国際関係—中日戦争国際共同研究第四次会議論文集』、78～90 頁、中国社会科学院近代史研究所・西南大学、2009 年 9 月)、「美國宣教士畢範宇與蒋介石—以抗戰期間的國際宣傳活動為中心」(『蒋介石の権力ネットワーク及其政治運

作」国際学術研討会』、353～370頁、中央研究院近代史研究所蒋介石研究群、2009年9月)、⑦「日中戦争期の中国国民外交と民間団体」(日本アメリカ史学会第16回例会、2009年7月25日、於:専修大学、報告要旨掲載なし)。

坪井 祐司

③「コラム『祖国情勢』に関するノート」(山本博之編『『カラム』の時代:マレー・イスラム世界の「近代」(CIAS Discussion Paper No.13)』、10～17頁、京都大学地域研究情報統合センター、2010年3月)、⑦「英領マラヤにおけるマレー人概念の形成—植民地行政における人種の概念化」(第54回国際東方学者会議、2009年5月15日、シンポジウム要旨:“Colonial Rule and Notions of Ethnicity (Chairpersons’ Reports, Symposium I),” Transactions of the International Conference of Eastern Studies LIV, pp.141-145, Tōhō Gakkai, 2009.)。

寺田 浩明

③「清代刑事審判中律例作用的再考察—關於実定法的「非規則」形態」(曹陽訳・陳新宇校、張世明・歩徳茂・娜鶴雅主編『世界学者論中国伝統法律文化(1644～1911)』、80～113頁、法律出版社、2009年12月)、「清代州縣档案中的命案處理實態—從「巴県档案(同治)」命案部分談起」(陳宛妤訳、『臺灣東亞文明研究學刊』第6卷第2期、247～269頁、臺灣大学人文社會高等研究院、2009年12月)。

唐 成

③「毛沢東時代の中国経済の再評価—国民の生活水準を焦点に—」(現代中国学会編『中華人民共和国の60年—毛沢東から胡錦濤への連続と不連続—』創土社、2009年9月、309頁。第4章、55～82頁)、「中国における家計貯蓄行動の分析」(季刊『個人金融』Vol4, No. 3、30～39頁、郵貯財団、2009年10月)、「中国における銀行業の生成と発展—近代から現代へ—」(中兼和津次編著『歴史的視野からみた現代中国経済』247～277頁、東洋文庫、2010年3月)。

戸倉 英美

④「東方学会第59回全国会員総会シンポジウム『六朝隋唐文学に見るアジア—芸能・思想・物語の交錯』の報告」(『東方学会報』No.97、22～24頁、東方学会、2009年12月)、⑥「葛曉音著『真の学者—日本中国学会会長丸尾常喜教授を悼む—』」(『公孫樹人』第9号、20～26頁、東京大学文学部中国語中

国文学研究室、2009年11月)、「葛晓音著『日本の伎楽「師子」と唐楽「蘇莫者」から見た西域音楽の東漸と変遷』要旨(『東方学』第119輯、202～203頁、東方学会、2010年1月)、⑦「聊齋志異」(第25回漢文教育研修会教養講座、2009年7月30日、全国漢文教育学会)、「中国文学に見る水の諸相—海、山水、水の夢—」(第111回東京大学公開講座「水—その文化と科学—」、2009年10月24日、要旨:『講義要項』29～31頁、東京大学総合研究会、2009年10月)、『青海波—李白と源氏が愛した舞曲—」(東方学会第59回全国会員総会シンポジウム「六朝隋唐文学に見るアジア—芸能・思想・物語の交錯」、2009年11月6日、要旨:『東方学』第119輯、203～204頁、東方学会、2010年1月、このシンポジウムでは組織責任者・司会を務めた)、「紹介東京大学中文系研究生的研究情況」(広西大学中文系・海外学者特別講演会、2009年12月2日、於:広西大学〔中国桂林市〕)、⑧「日本中国学会第61回大会第二部会(文学・先秦～唐)」(司会、2009年10月10日、於:文教大学)、『『甘泉賦』新釈新考(二)』(企画と監修、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第12号、3篇の論文の監修、UT Repository、<http://hdl.handle.net/2261/28126>、28頁、2009年10月)、『『太平広記』を読む:虎に食べられそうになる話』(企画と監修、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第12号、「はじめに」の執筆、『太平広記』巻427「稽胡」/『太平広記』巻433「柳井」/『太平広記』巻426「峡口道士」の注釈・翻訳の監修、UT Repository、<http://hdl.handle.net/2261/28127>、21頁、2009年10月)。

朽尾 武

⑦「日本における山海経図—山海経絵と山海異物」(財団法人東洋文庫2009年度秋期東洋学講座、2009年11月16日、要旨:『東洋学報』91-4、97～101頁、東洋文庫、2010年3月)、⑧「尾形働先生を思う」(『成城国文学』26、100～102頁、成城国文学会、2010年3月)。

富澤 芳亜

③「近代的企業の発展」(飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史[3] グローバル化と中国』、145～165頁、東京大学出版会、2009年9月)、⑦「戦時期、戦後における在華紡技術の移転の可能性」(社会経済史学会第78回全国大会パネルディスカッション「両大戦間・第二次大戦期の中国における在華日本系企業の活動」、2009年9月27日、於:東洋大学)。

鳥海 靖

①『もう一度読む山川日本史』（五味文彦氏と共著、山川出版社、2009年8月、354頁）、②『歴代内閣首相事典』（吉川弘文館、2009年12月、754+61頁）、③「明治日本と日露戦争」（『歴史ハンドブック・坂の上の雲』、132～139頁、日本放送出版協会、2009年12月）、⑦「帝国議会の開設と鉄道問題—鉄道敷設法の成立を中心に—」（〈鉄道を通して見た日本の近代〉研究会、2009年9月18日、於：財団法人東日本鉄道文化財団）、「元老たちの日露戦争—伊藤博文と山県有朋を中心に—」（NHK公開セミナー〈スペシャルドラマ〉坂の上の雲、2009年10月24日、於：NHK名古屋放送局豊橋支局・NHK文化センター名古屋総支社豊橋支社）、「世界における日本近代」（経営文化フォーラム、2010年1月25日、於：経営文化フォーラム）、⑧「いつかきた道—市川房枝の戦前戦後」（『女性展望』第616号、7～12頁、市川房枝記念会・婦選会館、2009年7月）、「躍動する明治日本の魅力」（『文藝春秋臨時増刊・坂の上の雲と司馬遼太郎』、68～69頁、文藝春秋、2009年12月）、「頻発な政権交代—『歴代内閣首相事典』を編輯して」（『本郷』No.85、5～7頁、吉川弘文館、2010年1月）。

中兼 和津次

①『体制移行の政治経済学—なぜ社会主義国は資本主義に向かって脱走するのか』（名古屋大学出版会、2010年2月、343頁）、②『歴史的視野から見た現代中国経済』（東洋文庫、2010年3月、vi+312頁）、③「中国改革開放の一評価—中国は世界の中心になれるか」（毛里和子編『中国 ポスト改革開放 30年を考える』、109～118頁、早稲田大学現代中国研究所、2010年2月）、「SOE Reform and Privatization in Transition: China in Comparative Perspective,」 Shinichi Ichimura, Tsuneaki Sato and William James eds., Transition from Socialist to Market Economies—Comparison of European and Asian Experiences, pp.79-100, Palgrave Macmillan, 2009.。

中村 元哉

③「言論・出版の自由」（飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ 20世紀中国史 [3] グローバル化と中国』、123～144頁、東京大学出版会、2009年9月）、「国民党「党治」下の憲法制定活動—張知本と呉経熊の自由・権利論—」（『中華民国の模索と崩壊 1912-1949』、43～80頁、中央大学出版部、2010年3月）、⑤「松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』」（『アジア研究』55巻2号、122～125頁、アジア政経学会、2009年4月）、⑦「国民党党治下の自由論と国際政治観—張知本と『中華民国憲法草案』—」（近現代中国リベラリズム研究会ワークショップ

プ、2009年10月4日、報告ペーパー：『ワークショップ「中国近現代の自由主義
論文集』121～140頁、近現代中国リベラリズム研究会、2009年10月）。

長沢 栄治

① Modern Egypt through Japanese Eyes, A Study on Intellectual and So-cio-economic Aspects of Egyptian Nationalism, Cairo, Merit Publishing House, 2009, 410p.、⑤「岩崎えり奈著『変革期のエジプト社会—マイグレーション・就業・貧困—』(『アジア経済』第51巻第2号、59～61頁、日本貿易振興機構アジア経済研究所研究支援部、2010年2月)、⑧「エジプトの西部砂漠を訪ねて」(『イスラーム地域研究ジャーナル』第2巻、3～12頁、早稲田大学イスラーム地域研究機構、2010年3月)、「包囲された者たちの声」(『詩人会議』第48巻、30～32頁、詩人会議、2009年12月)。

永田 雄三

⑦「世紀末イスタンブルの演劇空間」(NPO日本トルコ交流協会、2009年6月6日、要旨：『日本トルコ交流協会ニューズレター』3、2～3頁、日本トルコ交流協会、2009年10月)。

永積 洋子

② Large and Broad: The Dutch Impact on Early Modern Asia, Essays in Honor of Leonard Blussé, Toyo Bunko Research Library 13, Toyo Bunko, 2010, xvi + 293p.

長縄 宣博

③「帝政ロシア末期のワクフ：ヴォルガ・ウラル地域と西シベリアを中心に」(『イスラム世界』73号、1～27頁、日本イスラム協会、2009年9月)、⑦“Holidays in Kazan: City Assembly, Public Sphere, and Theo-logical Politics among Muslims in Late Imperial Russia,” Seminar at the Harriman Institute, Columbia University, 11 May 2009.、“Muslim Travelers and Empire: Local Politics and World Order in Late Imperial Russia,” Junior Scholars Training Workshop “Mobility in Russia and Eurasia” (U.S. Department of State Title VIII Program) at the University of Illinois at Urbana-Champaign, 17 June 2009.、「近現代史の視点から」(スラブ研究センター共同利用・共同研究拠点公募プログラム・シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築：ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」、11月1日)、「帝国とイスラーム・ネットワーク：欧露のムスリムの場合（19世紀後半から20世紀初

頭)」(比較教育社会史研究会 2010 年春季大会、3 月 27 日)、「報告者:セルゲイ・アバシン(ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所)「ロシアの中央アジア征服: 帝國的・民族的視点」へのコメント(ロシア語)」(ロシア史研究会 2009 年度大会、10 月 10 日)、Session 2: Education Reforms between the Abode of Islam and Homeland で討論者(英語)(新学術領域研究第 5 班・第 4 班合同中規模国際集会 “Islamic Institutions and Imperial Reach: The Complex Articulation of Ideas, Education and Mobility”)。なお、研究会自体も組織。研究会の概要については、http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20100219naganawa_j.html。

中見 立夫

③「田川孝三の昭和十四年満洲国“史料採訪”一史料状況の記録一」(『満族史研究』7、95～113 頁、満族史研究会、2009 年 6 月)、“From ‘Tartary’ to ‘Northeast Asia’: Search for a Portion of ‘Asia’,” International Conference “Asia in the Changing world: Looking Back and Forward”, pp. 67-86, Seoul: College of Social Science, Seoul National University, 2009.、「モンゴル」(国分良成編『現代東アジア—朝鮮半島・中国・台湾・モンゴル』、403～437 頁、慶應義塾大学出版会、2009 年 11 月)、“Иван Яковлевич Коростовец: Бурная жизнь русского дипломата и его литературное наследие,” Иван Яковлевич Коростовец, Девять месяцев в Монголии: Дневник русского уполномоченного в Монголии, Август 1912- Май 1913 г., стр. 30-40, Уланбаатар: ADMON, 2009.、「あるロシア帝国外交官の数奇な運命と遺された史料—イワン・ヤコヴレヴィチ・コロストヴェツのモンゴル「日記」—」(『セーヴェル(セーヴェル)』26、5～18 頁、ハルビン・ウラジオストクを語る会、2010 年 3 月)、“On the Papers of George Ernest Morrison Kept in the Mitchell Library, Sydney,” Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko No.67, pp.1-30, Toyo Bunko, 2009.3.、④「第 54 回国際東方学者会議シンポジウムⅡ: 清朝とその隣邦」(『東方学会報』96、12～14 頁、東方学会、2009 年 7 月 24 日)、“<Symposium II> The Qing Empire and Its Neighbors,” Transactions of the International Conference of Eastern Studies No.LIV 2009, pp.146-149, Tōhō Gakkai, 2010.、⑦“Opening Remarks: The Qing Empire and Its Neighbors—Myth and Reality,” The 54th International Conference of Eastern Studies, Symposium II (The Qing Empire and Its Neighbors), May 15, 2009, 要旨: “Opening Remarks: The Qing Empire and

Its Neighbors—Myth and Reality,” Transactions of the International Conference of Eastern Studies No.LIV 2009, p.94, Tōhō Gakkai, 2010.、““Myth and Mystery” among the Modern Mongolians: The Case of Toqtaqu (1863–1922),” The 52nd Annual Meeting of the Permanent International Altaistic Conference, July 27, 2009, Huhhot: Shangri-La Hotel, 要旨: Permanent International Altaistic Conference/52nd Annual Meeting/ Myth and Mystery in the Altaic World –Proceedings–, p.117, Inner Mongolia University & The Altaic Society of China, 2009.、「清朝“辺疆史地学”与日本“東洋史学”的交流—《元朝秘史》抄本の来日—」(第十三届国际清史学术研讨会、2009年9月19日、於:北京・九華山莊〔中国〕、要旨:『第十三届国际清史学术研讨会論文提要匯編』、74～76頁、北京・国家清史編纂委員會、故宮博物院、2009年9月)、“From ‘Tartary’ to ‘Northeast Asia’: Search for a Portion of ‘Asia’,” International Conference “Asia in the Changing world: Looking Back and Forward”, September 23, 2009, Seoul: Seoul National University Asia Center.、「20世紀前半時期の“東北アジア”情勢は、後半時期とのあいだで、連続性がみられるのか、断絶しているのか？」(科学研究費補助金(基盤研究(A))「北東アジアの冷戦:新しい資料と展望」研究会、2009年12月11日、於:早稲田大学大学院アジア・太平洋研究科)、「記念発言」(紀念亦邻真先生逝世十周年国际蒙古史研讨会、2009年12月20日、於:北京・中国人民大学逸夫学術會議中心〔中国〕)、“The Search for the Manchu Buddhist Canon: Its ‘Discovery’, Study, and Reissue,” Research colloquium: ‘Religion and Manchu society, 1600–2009’, 17 February 2010, London: School of Oriental & African Studies, University of London.、「“東北(北東)”アジアは、どのようにとらえられてきたか—「世界」と「地域」の認識に関連して—」(河合塾近畿地区世界史研究会、2010年3月19日、河合塾京都校)、③「《コメント・1》視座による「交流圏」の多様性」(三谷博・並木頼寿・月脚達彦編『大人のための近現代史／19世紀編』、16～17頁、東京大学出版会、2009年10月)。

西 英昭

①『「臺灣私法」の成立過程』(九州大学出版会、2009年10月、320頁)、③「中華民國民法親屬繼承編起草作業と慣習調査—Escarra 報告書を手がかりに」(鈴木秀光・高谷知佳・林真貴子・屋敷二郎編『法の流通』、587～607頁、慈学社出版、2009年12月)、「近代中国法制関連欧語論文データベース(仮)について」(『東洋法制史研究会通信』第17号、11～32頁、東洋法制史研究会、2009年8月)、④「2009年学界回顧「アジア法」のうち「5 中華人民共和国(香港、マ

カオを含む)、台湾」部分(『法律時報』第81巻13号、311～314頁、日本評論社、2009年12月)、⑤「加藤雄三「租界社会と取引—不動産の取引から」(『法制史研究』第59号、339～341頁、法制史研究会、2010年3月)、「高漢成『簽注視野下的大清刑律草案研究』(『法史学研究会会報』第14号、180～185頁、法史学研究会、2010年3月)、「後藤武秀『台湾法の歴史と思想』(『法史学研究会会報』第14号、186～190頁、法史学研究会、2010年3月)。

西尾 寛治

- ②『マレー世界における公正／正義概念の展開 (CIAS Discussion Paper No. 10)』(山本博之氏と共編著、京都大学地域研究統合情報センター、2010年3月、56頁)、③「17-19世紀のマレー諸国と“アディル”概念」(『マレー世界における公正／正義概念の展開』、18～25頁、京都大学地域研究統合情報センター、2010年3月)。

延廣 眞治

- ③「怪談咄の幽霊」(『アジア遊学』125号、110～117頁、勉誠出版、2009年8月)、「落語『紋三郎稻荷考』」(『朱』53号、67～72頁、伏見稻荷社、2010年3月)、「江戸文学の多様性—『肉附きの面』を通して見る—」(『帝京大学文学部紀要』日本文化学41号、1～24頁、帝京大学、2010年3月)。

濱下 武志

- ①『中国、東亜与全球經濟—区域和歴史的視角』(王玉茹・趙勁松・張瑋訳、社会科学文献出版社、2009年12月、全290頁)、③「Chineseの国際移動と国際秩序—歴史、現在、未来」(『アジア研究』第55巻第2号、アジア政経学会、2009年4月、56～69頁)、「華僑華人研究の現在—グローバルとローカルの間で」(『華僑華人研究』6、日本華僑華人学会、2009年11月、5～19頁)。

濱本 真実

- ⑦「Russifikatsiia musul' manskoi verkhushki i russkaia aristokratiia. Issledovanie na osnovanii rodosloviia Narbekovykh (ムスリム上層階級のロシア化とロシア貴族：ナルベコフ家の系譜に基づいて)」(Mezhdunarodnaia konferentsiia «Verkhovnaia vlasti, elita i obshchestvo v Rossii XIV-pervoi polovine XIX vv.» (国際会議「14-19世紀前半ロシアの君主権・エリート・社会」)、2009年6月24日、報告要旨は未出版)。

林 佳世子

② Periodicals Catalogue of the Hakki Tarik Us Collection Preserved in the Bayazit State Library (TUFS Middle Eastern Studies 1、東京外国語大学中東イスラーム研究教育プロジェクト、2010年3月、328頁)、『トルコ新聞記事翻訳ハンドブック 2010年版』(千條真理子氏と共編、TUFS Middle Eastern Studies 2、東京外国語大学中東イスラーム研究教育プロジェクト、2010年3月、114頁)。

林 俊雄

⑦ 「Relationship between the Turkic Qaghan' s and the Tang Emperor' s Mausolea」(国際シンポジウム Role of Turkic World in the Dialogue of Civilizations, 2009年4月28日、於:アルマトゥ市 [カザフスタン])、 「Illig Qa γ an or Illig Qa γ an—Small Inscription on Roof Tile—」(国際シンポジウム Interpreting the Turkic runiform sources and the position of the Altay corpus, 2009年5月22日、於:ゴルノ・アルタイスク市 [ロシア連邦アルタイ共和国])、 「The coup d' état of Ton Bagha in 780」(国際学会 International Conference on Study of Early Uighur State, 2009年8月2日、モンゴル、ウランバートル市、病気のためペーパーのみ提出)、 「On the Origin of Turkic Stone Statues」(2009年10月14日、於:ベルリン・ドイツ科学アカデミートルファン学研究所 Turfanforschung [ドイツ])、 「History of Saddles and Stirrups」(2010年2月3日、ヘルシンキ大学アジアアフリカ言語文化研究所 [フィンランド])。

原 實

③ “Divine Witness,” Journal of Indian Philosophy 37-3, pp. 253-272, Dordrecht, Springer Netherlands, 2009.6.、“Divine Procreation,” Indo-Iranian Journal 52, pp. 217-248, Leiden, Indo-Iranian Journal, 2009、「大地(2)—古代インドの地球観—」(『超域アジア研究報告—付 歴史・文化研究—』6、41～63頁、東洋文庫、2010年2月、⑦ “Divine Procreation,” The 14th World Sanskrit Conference [University of Kyoto], September 4, 2009.。

平野 健一郎

③ “Acculturation for Resistance,” journal of Cultural Interaction in East Asia, vol.1, pp. 37-56, Society for Cultural Interaction in East Asia, March 2010.、⑦ 「国際文化論」(『リーダーシップと国際性—国際文化会館新渡戸国際塾講義録1—』I-House Press、2009年6月)。

弘末 雅士

②『東南アジア史研究の展開』（東南アジア学会監修・東南アジア史学会 40 周年記念事業委員会編、山川出版社、2009 年 5 月、vi+286 頁）、③ “The Role of Local Informants in the Making of the Image of “Cannibal-ism” in North Sumatra,” From Distant Tales: Archaeology and Ethnohistory in the Highlands of Sumatra, Dominik Bonatz, John Miksic, David Neidel and Mai Lin Tjoa-Bonatz, ed., pp. 169-194, Cambridge Scholars Publishing, 2009.5.、「港市ネットワークの形成と植民地化」（春山成子・藤巻正己・野間春雄編『朝倉世界地理講座 3 東南アジア』、85～97 頁、朝倉書店、2009 年 9 月）、「ミステリアスな現地妻（ニヤイ）—インドネシア民族意識の生みの母？」（『史苑』第 70 巻第 1 号、1～11 頁、立教大学史学会、2009 年 12 月）。

深沢 眞二

①『「和漢」の世界—和漢聯句の基礎的研究—』（清文堂出版、2010 年 1 月、486 頁）、②『おくのほそ道大全』（楠元六男氏と共編、笠間書院、2009 年 7 月、516 頁）。

藤本 幸夫

①『五山禪宗寺院に伝わる典籍の総合的学調査研究Ⅱ—建仁寺兩足院所藏本を中心に—』（赤尾栄慶ほか 14 名、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(B)) 研究調査報告書、2010 年 3 月、500 頁）、⑦「朝鮮出版文化と日本」（COE 講演会、2009 年 4 月 26 日、於：仙台市博物館）、「朝鮮本について」（国際仏教学大学院大学講演会、2009 年 5 月 29 日、於：国際仏教学大学院大学）、「日本現存朝鮮本とその研究」（韓国東国大学校 BK21 事業講演会、2010 年 2 月 20 日、於：韓国・東国大学校）、⑧『2002-2007 / 環日本海講演会記録集』（鳥取県立図書館、2010 年 3 月、175 頁）。

古田 和子

①『上海网络与近代东亚 19 世纪后半期东亚の貿易与交流』（王小嘉訳・虞和平审校、中国社会科学出版社、2009 年 9 月、253 頁）、⑦ “Why and How Do We Reconsider Market Order in China from the Song Dynasty to the Republican Period?,” The 15th World Economic History Congress, Utrecht, August 2009.、“Information Asymmetry and Market Order in Chi-na: An Open Economy of the Late Nineteenth and Early Twentieth Centu-ries,” The 15th World Economic History Congress, Utrecht, August 2009.、「問題提起：情報、信頼、市場の質」（社

会経済史学会第78回全国大会、2009年9月26日・27日、於：東洋大学）、“The Shanghai Network: Reconsidering the Economic Order in Late Nineteenth-Century East Asia,” The Center for Chinese Studies—Special Lecture, The School of Pacific and Asian Studies, University of Hawaii at Manoa, October 2009.

古屋 昭弘

③「上古音の開合と戦国楚簡の通仮例」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』54、211～228頁、2009年4月）、『倭名類聚抄』と双声・疊韻（『水門』21、14～23頁、勉誠出版、2009年6月）、⑦「18世紀末『琉球劇文和解』の中国語音」（『水門の会』語学部門、2010年3月20日、於：早稲田大学）。

弁納 才一

③「20世紀前半中国における草蓆の生産について—日中経済摩擦と在来・外来の視点から」（『史学研究』第265号、1～18頁、広島史学研究会、2009年8月）、⑧「巻頭言—近現代中国農村研究の行方」（『近きに在りて』第55号、1頁、汲古書院、2009年5月）、「華東農村訪問調査報告（3）—2009年3月、江蘇省・上海市の農村」（『金沢大学経済論集』第30巻第1号、331～343頁、金沢大学経済学経営学系、2009年12月）、「華東地域における日系企業の現況—2009年9月」（『金沢大学経済論集』第30巻第1号、345～360頁、金沢大学経済学経営学系、2009年12月）、「巻頭言—東洋史学の甦生」（『史滴』第31号、1頁、早稲田大学東洋史懇話会、2009年12月）。

寶劍 久俊

②『中国農村改革と農業産業化（アジア研選書 No.18）』（池上彰英氏と共編著、アジア経済研究所、2009年12月、266頁）、③「中国における農業産業化の展開と農民專業合作組織の経済的機能—世帯・行政村データによる実証分析」（佐藤宏氏と共著、Global COE Hi-Stat Discussion Paper Series No. 86、28頁、一橋大学、2009年9月）、「中国のトウモロコシ供給・需要体制と食糧安全保障政策」（清水達也編『食糧危機と途上国におけるトウモロコシの需要と供給』、107～146頁、アジア経済研究所、2010年3月）、「中国における農業経営の史的変遷と現代的意義—現代農業と1930年代の農業との比較分析」（中兼和津次編著『歴史的視野から見た現代中国経済』、279～310頁、東洋文庫、2010年3月）。

細谷 良夫

③ “Chinese Bannermen in the Late Qing: The Shang Famil,” *Memoirs of The Research Department of The Toyo Bunko* No.67, Toyo Bunko, pp. 49–87, 2009.3.

堀川 徹

⑦ “The Significance of Islamic Court Documents as Historical Sources of Social Information in Central Asia” (*Uzbek–Japanese Scientific Cooperation: History and Culture of Central Asia. Sources and Methodological Issues*. Tashkent. 2009.9.4、要旨: Abstracts 11–12)、「テュルク民族と栄光のイスタンブル」(日本トルコ文化協会 第 100 回トプカプサロン、2010 年 3 月 7 日、要旨: 『きよぶる通信』未刊)、「中央アジアにおける『テュルク・イスラーム文化』の実像」(平成 21 年度第 7 回東西学術研究所研究例会、2010 年 2 月 12 日、要旨: 『東西学術研究所所報』未刊)。

牧野 元紀

③ 「ベトナム宣教にみられる書記言語について: イエズ会からパリ外国宣教会へ」(川村信三編『超領域交流史の試み: ザビエルに続くパイオニアたち』416 ~ 432 頁、SUP 上智大学出版、2009 年 11 月)、「ベトナム前近代史のなかのカトリック: 信仰生活共同体クレティアンテと信者のくらし」(『上智大学キリスト教文化研究所紀要』28、3 ~ 23 頁、上智大学キリスト教文化研究所、2010 年 3 月)、“The Vietnamese Written Languages and European Missionaries: From the Society of Jesus to the Société des Missions Etrangères de Paris,” *Beyond Borders; A Global Perspective of Jesuit Mission History*, pp. 342–349, Eds. Shinzo Kawamura and Cyril Veliath, Sophia University Press, Tokyo, 2009.10.、「新聞報道にみるドイモイ以降のベトナム現代カトリック事情: ヴェチカンとの関係を中心に」(『国際宗教研究所ニュースレター』62、16 ~ 26 頁、財団法人国際宗教研究所、2009 年 4 月)、「⑦ 「フランス・カトリック・ベトナム: パリ外国宣教会の布教戦略」(日仏東洋学会 2010 年度総会、2010 年 3 月 28 日、於: 京大会館)、「パリ外国宣教会宣教師書簡にみる前近代ベトナム北部キリスト教社会の一段面」(5th Vietnamese & Japanese Students' Scientific Exchange Conference(VJSE)、2009 年 10 月 10 日、於: 東京大学)、「ベトナム前近代史のなかのカトリック」(上智大学キリスト教文化研究所第 37 回連続講演会「東アジアのキリスト教」、2009 年 6 月 6 日、於: 上智大学)。

松井 太

③ “Dumdadu Mong γ ol ulus “the Middle Mongolian Empire” ,” V. Rybatzki et al. (eds.), *The Early Mongols: Language, Culture and History: Studies in Honour*

of Igor de Rachewiltz on the Occasion of His 80th Birthday, pp. 111-119, Indiana University, 2009.4.、“Mongol Globalism attested by the Uigur and Mongol Documents from East Turkestan,” (『人文社会論叢』人文科学篇 22、33～42 頁、弘前大学人文学部、2009年8月)、“Bezekliik Uigur Administrative Orders Revisited,” (張定京・阿不都熱西提=亞庫甫(編)『突厥語文學研究—耿世民教授八十華誕紀念文集』、339～350 頁、中央民族大学出版社、2009年11月)、⑤ “Michael C. Brose, Subjects and Masters: Uyghurs in the Mongol Empire, Western Washington 2005,” In-ternational Journal of Asian Studies 6-2, pp. 247-249, the Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, 2009.7.、⑦ “Mongol Globalism Attested by the Uigur and Mongol Documents from East Turkestan,” The First Congress of the Asian Association of World Historians, May 30, 2009.、“Uigur Almanac Fragments from Dunhuang,” International Conference Dunhuang Studies: Prospects and Problems for the Coming Second Century of Research, September 3, 2009.。

松重 充浩

③「營口」(安富歩・深尾葉子編『「満洲」の成立』名古屋大学出版会、2009年11月、327～364頁)、「戦前期ハルビン絵はがき Web 検索システムの施策」(共著、松重他5名、『人文科学とコンピューターシンポジウム論文集:デジタル・ヒューマニティズの可能性:情報処理学会シンポジウムシリーズ』Vol.2009、No.16、300～316頁、社団法人情報処理学会、2009年12月)、⑦「第一次世界大戦後における新たな日中関係の模索:租借地大連からの視点」(日本大学通信教育部公開シンポジウム「東アジアと日本:歴史から見た『東アジア共同体』の可能性」、2009年8月9日、要旨:『研究紀要』23号、15～36頁、日本大学通信教育部、2010年3月)。

松永 泰行

③ “The Secularization of a Faqih-headed Revolutionary Islamic State of Iran: Its Mechanisms, Processes, and Prospects,” Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East, vol. 29, no. 3, pp. 468-482, 2009.、“Popular Sovereignty and Republicanism in Iran’ s Postrevolutionary Elec-toral Democracy,” in Development of Parliamentarism in the Modern Islamic World, ed. Sato Tsugitaka (Tokyo: The Toyo Bunko, 2009), pp. 134-153.、⑤「小林寧子著『インドネシア—展開するイスラーム』」(『国際政治』160号、191～193頁、日本国際政治学会、2010年3月)、⑦ “The Secularization of Iran’ s Faqih-headed Islamic State: Its Mechanisms

and Prospects,” ‘The Iranian Revolution: Thirty Years After’ conference, The Center for Iranian Studies, Tel Aviv University, Tel Aviv, Israel, May 25, 2009.、
“Postrevivalist New Thinkers of Religion: The Case of Mohsen Kadivar,” 43rd Annual Meeting of the Middle East Studies Association of North America (MESA), Boston, United States of America, November 21, 2009.、
“Human Rights and the New Jurisprudence in Mohsen Kadivar’ s Advocacy of New-Thinker Islam,” MEIS International Symposium: Otherness and Beyond, ILCAA-Tokyo University of Foreign Studies, December 6, 2009.。

松本 弘

②『中東・イスラーム諸国民主化ハンドブック 2009』（NIHU プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点、2009年6月、301頁）。

丸川 知雄

①『「中国なし」で生活できるか—貿易から読み解く日中関係の真実』（PHP 研究所、2009年11月、239頁）、『叢書・中国的問題群〔6〕中国企業のルネサンス』（大橋英夫氏と共著、岩波書店、2009年9月、xv+177頁）、③ “Why Japanese multinationals failed in the Chinese mobile phone market: a comparative study of new product development in Japan and China,” *Asia Pacific Business Review* 15-3, pp. 411-431, Routledge, July 2009.、「中国の『78年画期説』の再検討—工業の場合—」（『現代中国』第83号、59～68頁、日本現代中国学会、2009年9月）、「中国の太陽電池産業」（『中国経済研究』6-2、31～40頁、中国経済学会、2009年9月）、「探析温州産業集群的產生過程」（『日本当代中国研究 2009』、110～125頁、人間文化研究機構・当代中国地区研究基地連合項目・核心基地・早稲田大学現代中国研究所、2009年10月）、「中国経済は転換点を迎えたのか？—四川省農村調査からの示唆」（『大原社会問題研究所雑誌』616、1～13頁、法政大学大原社会問題研究所、2010年2月）、“The Emergence of Industrial Clusters in Wenzhou, China,” Bernard Ganne and Yveline Lecler eds. *Asian Industrial Clusters, Global Competitiveness and New Policy Initiatives*, pp.213-237, World Scientific, Singapore, 2009.、“Regionalism and nationalism in the information technology industry: A comparison of East Asia and Europe,” Tamio Nakamura ed. *East Asian Regionalism from a Legal Perspective, Current features and a vision for the future*, pp. 25-42, Routledge, Abington, 2009.、「国の制度・企業福祉観・福利厚生と労働費用—東アジア7カ国・地域の比較」（末廣昭氏・金炫成氏と共著、末廣昭編『東

アジア福祉システムの展望—7カ国・地域の企業福祉と社会保障制度』、34～83頁、ミネルヴァ書房、2010年3月）、「中国—アンケート調査にみる企業福祉の変貌」（末廣昭編『東アジア福祉システムの展望—7カ国・地域の企業福祉と社会保障制度』、120～145頁、ミネルヴァ書房、2010年3月）、「中国における産業集積の発生—温州市と広東省のケース」（中兼和津次編著『歴史的視野からみた現代中国経済』、111～139頁、東洋文庫、2010年3月）⑧「金融危機後の中国経済」（『オルタ』412、26～27頁、アジア太平洋資料センター、2009年9-10月）、「太陽電池 シャープ VS サンテック VS ファーストソーラー」（『週刊エコノミスト臨時増刊』2010年3月28日号、81～83頁、毎日新聞社、2010年3月）、「ヤミ携帯が大量流通する端末市場」（『日経コミュニケーション』538〈特集・中国携帯電話市場の真実〉、46～49頁、日経BP社、2009年7月15日）。

三浦 徹

③ “Continuity and Discontinuity of Damascus from the Mamluk Period to the Ottoman Rule: Preliminary Remarks on Urban Development,” Pro-ceedings of the International Symposium on Bilad al-Sham during the Otto-man Era: Damascus, 26-30, September 2005, pp. 23-33, Istanbul: IRCICA, 2009、⑤「サイド『オリエンタリズム』」（樺山紘一編『新・現代歴史学の名著（中公新書2050）』、105～120頁、中央公論新社、2010年3月）、⑦ “From the Mamluks to the Ottomans: Proliferation of Waqf Prop-erties and their Rent Contracts in Damascus,” Journée d’ études IRE-MAM<Les waqfs ottomans: Droit religieux, droit coutumier, droit civil: les contrats locatifs>, 2009.10.23. IREMAM: Aix-en Provence, France.

水野 善文

⑤ “McComas Taylor, The Fall of the Indigo Jackal: The Discourse of Divi-sion and Purnabhadra’ s Pancatantra (State Univ. of New York Press, 2007, 236p.),” International Journal of Asian Studies, Vol.6, Pt.2, pp. 271-272, Cambridge University Press, July 2009.、⑥「インドラ神への讃歌」ほか6項目の翻訳・解説（歴史学研究会編『世界史史料2 南アジア・イスラーム世界・アフリカ』、10～16頁、25～28頁、岩波書店、2009年7月）、⑦ “On the story of Chandrasahsa : Transmission of a Narrative and Bhakti”（第10回国際バクティ学会 10th International Bhakti Conference, Early Modern Literatures in North India, at Sapiennnta-Hungarian University of Transiylvania, Miercurea Ciuc, Romania, 22-24 July 2009、2009年7月22日）、“On Oneiromancy in India; Several Paths

for transmitting Texts” (第14回国際サンスクリット学会(14th World Sanskrit Conference, 1-5, Sep., Kyoto University) 第7部会 ‘Sanskrit and Regional Language and Literature’、2009年9月1日)、「文学・文芸という視座」(人間文化研究機構プログラム「現代インド地域研究」2009年度全体集会における報告2009年12月5日)。

三田 昌彦

⑤「水島司『前近代南インドの社会構造と社会空間』(『南アジア研究』第21号、191～197頁、日本南アジア学会、2009年12月)、⑥「S・スプラフマニヤム『接続された歴史—インドとヨーロッパ』(太田信宏氏と共訳、名古屋大学出版会、2009年6月、xii+355+21頁)、⑦「インド中近世城郭史研究序説—ラージャスターンを中心に」(中部南アジア研究会、2009年8月1日、於：名城大学)、⑧「中世初期ラージプート王朝の起源伝承(9世紀)」(歴史学研究会編『世界史史料2南アジア・イスラーム世界・アフリカ』、48～49頁、岩波書店、2009年7月)。「チャウルキヤ朝のサーマンタ体制(10-14世紀)」(歴史学研究会編『世界史史料2南アジア・イスラーム世界・アフリカ』、49～50頁、岩波書店、2009年7月)。「中世インドにおける土地寄進(9世紀末)」(歴史学研究会編『世界史史料2南アジア・イスラーム世界・アフリカ』、50～52頁、岩波書店、2009年7月)。「中世インドにおける下賜文書の範例(15世紀)」(歴史学研究会編『世界史史料2南アジア・イスラーム世界・アフリカ』、52～53頁、岩波書店、2009年7月)。

村井 章介

②『日朝交流と相克の歴史』(北島万次氏・孫承喆氏・橋本雄氏と共編、校倉書房、2009年11月、397頁)、③“Poetry in Chinese as a Diplomatic Art in Premodern East Asia,” Edited by Andrew E. Goble, Kenneth R. Robinson, and Haruko Wakabayashi, *Tools of Culture—Japan’s Cultural, Intellectual, Medical, and Technological Contacts in East Asia, 1000s–1500s-*, pp. 49–69, Association for Asian Studies, INC. 2009.、「倭城をめぐる交流と葛藤」(『日朝交流と相克の歴史』、144～158頁、校倉書房、2009年11月)、「“寺社造営料唐船”再探—以貿易、文化交流、沈船を中心」(郭万平・張捷主編『舟山普陀与東亞海域文化交流』、1～17頁、浙江大学出版社、2009年11月)、「15世紀から16世紀の東アジア国際秩序と日中関係」(『日中歴史共同研究第一期報告書』、79～97頁、2010年1月)、「倭寇とはだれか—14～15世紀の朝鮮半島を中心に—」(『東方学』119、1～22頁、東方学会、2010年1月)、④「2008年の歴史学界—回顧

と展望・総説』（『史学雑誌』118-5、1～5頁、史学会、2009年6月）、⑤「大山喬平編『中世裁許状の研究』（『法制史研究』59、255～262頁、法制史学会、2010年3月）、⑦「倭寇と日本・アジアの交流史」（財団法人東洋文庫2009年度春期東洋学講座、2009年5月26日、要旨：『東洋学報』91-2、144～146頁、東洋文庫、2009年9月）、「記念講演・古代末期の北と南」（法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究所「日本の中の異文化」総括シンポジウム「古代末期の境界世界—石江遺跡群と城久遺跡群を中心として—」、2009年11月14日、於：法政大学）、「15世紀朝鮮・南蛮の海域交流—成宗の椒種求請一件から—」（九州史学研究会朝鮮学会シンポジウム「中近世の朝鮮半島と東アジア海域」、2009年12月13日、於：九州大学）、⑧「討論」（東アジア美術文化交流研究会編『寧波の美術と海域交流』文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」文化交流研究部門調整班、2008年度〔発行は2009年度〕、「解説 世界観・地理」（新編森克己著作集編集委員会編『続々日宋貿易の研究 新編森克己著作集3』、439～451頁、勉誠出版、2009年10月）、「田中健夫氏の訃」（『日本歴史』740、172頁、日本歴史学会、2010年1月）、「つねに先陣を切って—田中健夫先生を悼む—」（『東方学』119、262～263頁、東方学会、2010年1月）。

村田 雄二郎

②『シリーズ20世紀中国史』（全4巻、飯島渉氏・久保亨氏と共編、東京大学出版会、2009年7～10月、232+232+230+254頁）。『中島雄其人与《往復文信目録》：日本公使館与総理衙門通信目録1874-1899』（孔祥吉氏と共編、北京：国家図書館出版社、2009年3月、758頁）、③「アジアからの問題提起—中国医学をめぐって」（飯田隆氏ほか編『岩波講座哲学15 変貌する哲学』、25～45頁、岩波書店、2009年7月）、「京師白雲觀与晚清外交」（孔祥吉氏と共著、『社会科学研究』3、159～164頁、四川省社会科学院、2009年3月）、「章炳麟と支那亡国記念会」（孔祥吉氏と共著、『孫文研究』45、61～74頁、孫文研究会、2009年3月）、「錢玄同与漢字簡化—另一个簡体字」（牛大勇・歐陽哲生編『五四的歴史与歴史中的五四』、341～352頁、北京大学出版社、2010年1月）、「冊封朝貢体制論再考：従日本的視点来看」（吳志攀・李玉編『東亜的価値』、147～159頁、北京大学出版社、2010年1月）、⑤「解題 吳重慶著『孫村 ある共時的コミュニティー—「ポスト革命時代」の人と鬼と神』」（宮田義矢訳、『思想』1026、104～107頁、岩波書店、2009年10月）、⑧「6月のとある日、駒場キャンパス、某研究室にて—外貨兌換券をめぐる教師と学生の会話」（『UP』2009年9月号、20～28頁、東京

大学出版会)。「ドアの内と外—各人自掃門前雪、…」(『中国研究月報』741号、60頁、中国研究所、2009年11月)。

毛里 和子

①『中日関係—従戦後走向新時代』(徐顕芬訳、社会科学文献出版社、2009年、237頁)、『叢書・中国的問題群〔12〕 グローバル中国への道程—外交150年』(川島真氏と共著、岩波書店、2009年11月、全212頁)、③「地域研究と国際関係学のあいだ—中国研究の立場から」(山本武彦編『国際関係論のニューフロンティア』、成文堂、2010年)、「現代中国60年をどう見るか—パラダイム・シフトを考える」(『中国研究月報』743号、12～27頁、中国研究所、2010年1月)、「現代中国研究40年—三つの挑戦」(『ワセダ・アジアレビュー』第7号、30～35頁、早稲田大学アジア研究機構、2010年1月)、「中国の改革開放30年を評価する—制度化の視点から」(『ロシア・ユーラシア経済—研究と資料』第928号、105～117頁、ユーラシア経済研究所、2009年11-12月号)、「“動く中国”と“変わらない中国”—現代中国研究のパラダイム・シフトを考える」(『アジア研究』第55巻第2号、70～84頁、アジア政経学会、2009年7月)、⑦「毛沢東時期中国外交論—中蘇同盟を事例に」(華東師範大学冷戦史研究センター主催・日中冷戦史workshop、2010年3月16日)、「新領域研究」(ユーラシア地域大国の比較研究プログラム国際シンポジウム、2009年12月、於：法政大学)、「新段階の日中関係と東アジア」(中国語、2009年11月、於：北京外国語大学日本学センター)、「新段階の日中関係」(中国語、2009年11月、於：上海国際問題研究所)。

本野 英一

③「清末民初における商標権侵害紛争—日中関係を中心に—」(『社会経済史学』第75巻第3号、3～21頁、社会経済史学会、2009年9月)、⑤「Tomoko Shiroyama, China During the Great Depression: Market, State, and the World Economy, 1929-1937, Harvard University Press, 2008」(『東洋史研究』第68巻第2号、155～162頁、東洋史研究会、2009年9月)、⑦“The Market System in Late Qing and Early Republican Period, 1870-1919: An analysis of the Role of Foreign Merchants,” paper presented to the XVth World Economic History Congress, Utrecht University, August 4, 2009.。

初山 明

- ①『中国古代訴訟制度研究』（李力訳、上海古籍出版社、2009年12月、352頁）、
③「卒史覆獄試探—以里耶秦簡 J1 ⑧ 134 為綫索—」（『里耶古城・秦簡与秦文化研究』122～126頁、科学出版社、2009年10月）。

守川 知子

- ③「『イラン史』の誕生」（『歴史学研究』863号、12～21頁、歴史学研究会、2010年2月）。⑥「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースイー著『被造物の驚異と万物の珍奇』（守川知子監訳・ペルシア語百科全書研究会訳注、『イスラーム世界研究』第2巻2号、198～218頁、2009年3月）、「同（2）」（『イスラーム世界研究』第3巻1号、403～441頁、2009年7月）。⑦「伝説から史実へ—イラン・イスラーム社会における古代遺跡と歴史認識」（歴史学研究会大会・合同部会「刻まれるメッセージ、読み解かれるメッセージ」、2009年05月24日、於：中央大学、要旨：『歴史学研究』増刊号859号、169～177頁、歴史学研究会、2009年10月）。

森平 雅彦

- ③「10世紀～13世紀前半における日麗関係史の諸問題—日本語による研究成果を中心に—」（『第2期日韓歴史共同研究報告書：第2分科会篇』、205～222頁、日韓歴史共同研究委員会、2010年3月）、「全羅道沿海における宋使船の航路—『高麗図経』所載の事例—」（『史淵』第147輯、103～145頁、2010年3月）、「黒山島海域における宋使船の航路—『高麗図経』所載の事例から—」（『朝鮮学報』第212輯、1～45頁、2009年7月）、⑦「高麗・宋通交をささえた海の知識と技術」（九州史学会朝鮮學部会・科研費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」計画研究「中・近世朝鮮をめぐる東アジア交流と寧波」共催シンポジウム《中近世の朝鮮半島と東アジア海域》、2009年12月13日、於：九州大学）、「威鎮東方極辺末附日本国辺面勾当一元帝国における高麗の機能的位置をめぐる—」（国際シンポジウム「13-14世紀東アジアと高麗：高麗・大元関係の性格探究」、2009年12月4日、於：慶北大学校〔韓国〕）、「高麗・宋通交と朝鮮西南島嶼」（韓国・朝鮮文化研究会第10回研究大会シンポジウム「全羅道への地域研究的アプローチ—環シナ海の視点から—」、2009年10月24日、於：慶應大学）、「麗宋間航路研究からみえるもの—『高麗図経』を素材として—」（第4回韓日（日韓）人文社会科学会、2009年8月15日、於：又石大学校（紙上参加））。

森安 孝夫

③「シネウス碑文訳注」(鈴木宏節氏・齊藤茂雄氏・田村健氏・白玉冬氏と共著、『内陸アジア言語の研究』24号、1～92頁+12pls、中央ユーラシア学研究会、2009年6月)、⑦“The Discovery of Manichaean Paintings in Japan and Their Historical Background,”(The First Congress of the Asian Association of World Historians、2009年5月30日、於：大阪大学中之島センター)、「中央アジア出土古ウイグル手紙文書の書式研究・序説」(平成21年度東洋史研究会、2009年11月3日、於：京都大学)、「日本へのマニ教絵画の伝来とその世界史的背景」(北海道高等学校教育研究会地歴・公民部会、2010年1月7日、於：札幌東高等学校)。

柳澤 明

⑦「清帝国の非漢語世界一文書と現地から」(早稲田大学アジア研究機構第5回シンポジウム「早稲田アジア学：確立への挑戦」、2009年5月)、⑧「清朝とロシア：その関係の構造と変遷」(岡田英弘編『別冊環⑩ 清朝とは何か』、191～200頁、藤原書店、2009年5月)、「7.2 多民族国家の構造」(岡洋樹・境田清隆・佐々木史郎編『東北アジア』(朝倉世界地理講座—大地と人間の物語—2)、243～253頁、朝倉書店、2009年11月)。

柳田 征司

③「舌内入声音」(横山邦治先生叙勲ならびに喜寿記念論文集編集委員会編『日本のことばと文化—日本と中国の日本文化研究の視点—』、336～353頁、溪水社、2009年10月)、「医書の抄物—(原典、漢籍医書)」(『抄物の研究』17、1～43頁、抄物研究会、2010年2月)。

柳谷 あゆみ

⑦「ヒドゥマの成立・解消・維持についての考察：ザンギー朝期(1127-1234年)の事例を中心に」(日本オリエント学会第51回大会、2009年10月11日、要旨：『オリエント』52-2号、220～221頁、日本オリエント学会、2010年3月)、“An Interim Report on the Cata-log-making of the Sophia Collection of Southeast Asian Kitabs,” by ARAI Kazuhiro & YANAGIYA Ayumi, NIHU Program Islamic Area Studies Inter-national Workshop “Towards the Comparative Study of Kitabs in Southeast Asia,” 2009.11. 8, 要旨：2009年度人間文化研究機構地域研究推進事業(イスラーム地域研究)研究実績報告書。

矢吹 晋

①『中国力—その強さと脆さ』（蒼蒼社、2010年2月、437頁）、『複眼中国—現代中国の襞を読み解く』（譚璐美氏と共著、99～158頁、時事通信社、2010年2月）、③“Asakawa Kan’ ichi’ s View of History,” Japan and the World, Yale CEAS, 2008, Received 2009.、「輸出指向型から内需指向型への転換」（『マンスリー・ウォッチング』第48号、2009年4月12日）、「金正雲後継情報の読み方」（『マンスリー・ウォッチング』第49号、2009年7月1日）、「金正雲後継情報の読み方・再論」（『マンスリー・ウォッチング』第50号、2009年12月5日）、「金正雲後継情報の読み方・三論」（『マンスリー・ウォッチング』第51号、2009年12月15日）、「興味津々、日中インターネットシンポジウム」（『マンスリー・ウォッチング』第52号、2010年2月3日）、「中国が世界を支配するとき」（『マンスリー・ウォッチング』第53号、2010年3月8日）、「岡田克也外務大臣宛ての調査依頼の手紙」（『マンスリー・ウォッチング』号外、2010年3月18日）、「パクス・アメリカーナ（Pax Americana）からパクス・シニカ（Pax Sinica）への転換を説いたジェイクスの新著を酷評した英紙書評」（『マンスリー・ウォッチング』第54号、2010年3月26日）、「天安門事件20周年、歩みと民主化への展望」（『週刊 e-World』2009年4月8日号）、「中国建国60周年」（『週刊 e-World』2009年9月30日号）、「中国2010年展望」（『週刊 e-World』2010年1月13日号）、「シアターテレビ「ポスト胡錦濤の中国・上」（『週刊 e-World』2010年2月24日号）、「シアターテレビ「ポスト胡錦濤の中国・下」（『週刊 e-World』2010年3月10日号）、⑤「『山村の守望』（『東方』345号、18～21頁、2009年11月）、「読書アンケート」（『中国図書』2010年1月号、内山書店）、「『趙紫陽回想録』（共同通信配信、2010年3月14日）、⑦「世界恐慌下の中国経済」（『善隣』2009年5月号）、「天安門事件20年、政治改革はなぜ進まないのか」（富丘経済研究会、2009年6月16日、於：プレスセンター）、「ポスト胡錦濤の中国」（霞山会、2009年10月29日、『東亜』12月号掲載）、「中国の政治経済」（上海富士電機グループ、2010年3月13日）、「全人代以後の中国」（北京菱友会、2010年3月15日）、⑧「天安門事件20年」（『読売新聞』2009年5月27日）、「建国60年の中国」（『まなぶ』2009年5月号）、「建国60周年と権力の腐敗」（『国際貿易』2009年9月29日号）、「山川健次郎・朝河貫一シンポジウム」（記録2009年5月刊、2008年10月23日会津で行われたもの）。

山内 民博

③「朝鮮後期戸籍大帳僧戸秩及び新式戸籍僧籍の性格（下）」（『資料学研究』7号、34～57頁、新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト、2010年3月）。
山口 瑞鳳

③「西田哲学「純粹経験」論の幻想」(『成田山仏教研究所紀要』33, 21～92頁、大本山成田山新勝寺成田山仏教研究所、2010年2月)。

山本 英史

②『伝統中国判牘資料目録』(三木聰氏・高橋芳郎氏と共編、汲古書院、2010年3月、213頁)、『アジアの文人が見た民衆とその文化』(慶應義塾大学出版会、2010年3月、267頁)、③「公牘の中の“よき民”と“悪しき民”——清代康熙期の事例を中心にして——」(山本英史編『アジアの文人が見た民衆とその文化』、67～100頁、慶應義塾大学出版会、2010年3月)、⑦「公牘中的『良民』与『奸民』——以清代康熙朝の事例為中心——」(中国明代史研究学会、2009年5月16日)、「中国的『当為』与『実態』——以《清代中国の地域支配》為論証——」(東呉大学人文社会学院歴史学系講演会、2009年5月18日)、「江南基層社会から見た土地改革前史・序説——旧松江府の図正と帰戸併冊——」(三田史学会大会東洋史部会、2009年6月27日)、「近代蘇州における基層社会の管理と郷村役」(慶應義塾大学東アジア研究所第24回学術大会、2009年6月27日)、「2008年度プロジェクト活動記録：近代中国の地域像」(『慶應義塾大学東アジア研究所ニューズレター』No. 12、6～8頁、2009年6月)。

湯浅 剛

③「ソ連のアフガニスタン経験：外部勢力による国家形成への介入」(『防衛研究所紀要』第12巻第1号、1～28頁、2009年12月)、⑦“Central Asia in the context of Japanese-Russian Relations,” Report for the International Conference “Energy, Environment and the Future of Security in Central Asia,” hosted by Link Campus University, Rome, October 15-16, 2009.、⑧“Thinking Strategically 'from the Outside In' on Central Asia: A Conference in Rome,” Essay on the website of the Hokkaido University Global COE Program “Reshaping the Japan's Border Studies, released on November 2, 2009, <http://www.borderstudies.jp/en/essays/essays/pdf/091015-16/091015-16.pdf>.、「選挙監視活動という仕事：2010年2月、ウクライナでの経験から」(『ユーラシア・ウォッチ』第172号、秋野豊ユーラシア基金メール・マガジン、2010年3月)。

吉澤 誠一郎

③「公理と強権——民国8年の国際関係論」(貴志俊彦・谷垣真理子・深町英夫編『模索する近代日中関係——対話と競存の時代』、141～156頁、東京大学出版会、

2009年6月)、「清代後期における社会経済の動態」(飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史[1] 中華世界と近代』、101～120頁、東京大学出版会、2009年7月)、「中国における近代史学の形成—梁啓超「新史学」再読」(『歴史学研究』863号、2～11頁、歴史学研究会、2010年2月)。

吉田 豊

③ “Visa’ Sura’ s corpse disconered?,” *Bulletin of the Asia Institute* 19, pp. 237-242, 2009.12.、「新出マニ教画の形而上」(『大和文華』121、3～34頁、大和文華館、2010年3月)、「新出のソグド語資料について—新米書記の父への手紙から：西巖寺橘資料の紹介を兼ねて」(『京都大学文学部紀要』49、1～24頁、2010年2月)、*Buddhist literature in Sogdian*, R. E. Emmerick ed, *The literature of Pre-Islamic Iran. Companion volume I to A history of Persian literature*, I. B. Tauris, pp. 288-329, 2009.4.、*Sogdian*, G. Windfuhr ed, *The Iranian languages*, Routledge pp. 279-335, 2009.12.、*Minor moods in Sogdian*, *East and West. Papers in Indo-European Studies*, Hempfen, pp. 281-295, 2009.4.、*Turco-Sogdian features*, W. Sundermann ed, *Exegisti monumenta. Festschrift in honour of N. Sims-Williams*, Harrassowitz, pp. 571-585, 2009.4.、*A newly recognized Manichaean painting: Manichaean Daena from Japan*, M.-A. Amir Moezzi ed, *Pensée grecque et sagesse d’ Orient. Hommage a` Michel Tardieu*, Brepols, pp. 697-714, 2009.12.、*Karabalgasun Inscription and the Khotanese documents*, D. Durkin-Mesterernst ed, *Literaische Stoffe und ihre Gestaltung in mitteliranischer Zeit*, Reichert, pp. 349-360, 2009.4.、*On the Sogdian version of the Muryojukyo or Larger Sukhavativyuha*, Takashi IRISAWA ed, “The way of Buddha” 2003: The 100th anniversary of the Otani Mission and the 50th of the Research Society for Central Asian Cultures, pp. 85-94, 2010.3.、⑤ 「庄垣内正弘著『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』京都・松香堂書店、2008年」(『仏教学セミナー』90、45～62頁、大谷大学佛教学会、2009年12月)、⑦ 「中央アジアの諸言語」(2009年7月25日)、“Some more Manichaean paintings from Japan,” *Seventh International Conference of Manichaean Studies*, 2009.9.11., Ireland, Dublin.、「中央アジア出土のソグド語資料」(旅順博物館蔵仏教写本国際討論会、2010年3月29日)。

吉水 千鶴子

③ “The Logic of the Samdhinirmocanasūtra: Establishing Right Reasoning Based on Similarity (sārūpya) and Dissimilarity (vairūpya),” *Logic in Earli-est Classical*

India, Brendan S. Gillon, ed., Papers of the 12th World Sanskrit Conference held in Helsinki, Finland, 13-18 July 2003, vol. 10.2, pp. 139-166, Motilal Banarsidass, Delhi, February 2010.、⑦「チベット仏教の潮流 2. 仏教のチベットの展開」(第4回チベットの歴史と文化学習会、2009年4月11日、於：文京区民センター、第4回チベットの歴史と文化学習会の記録、1～13頁、チベットの歴史と文化学習会)、「チベット仏教の潮流 3. 現代チベット仏教思潮—ダライ・ラマの時代を中心に—」(第5回チベットの歴史と文化学習会、2009年7月11日、於：文京区民センター、第5回チベットの歴史と文化学習会の記録、1～13頁、チベットの歴史と文化学習会)、“The logical value of the thesis (pratijñā) in Candrakīrti’s Madhyamaka thought.” (第14回国際サンスクリット学会、2009年9月1日、於：京都大学)、⑧「COLUMN5 日本語の中のアジア—アジア文化のメッセージを探る」(野村港二編『研究者・学生のためのテクニカルライティング』、196～197頁、みみずく舎、2009年5月)、「作曲家とインド思想の深い関係 リヒャルト・ワーグナー」(『月刊シヨパン』11月号、20～21頁、シヨパン、2009年11月)。

吉村 慎太郎

②『核拡散問題とアジア—核抑止論を超えて』(飯塚央子氏と共編、国際書院、2009年7月、234頁)、⑦「冷戦と石油国有化運動の黎明—錯綜するイラン政治と大国政治の一段面—」(「イラン政治研究会」、京都大学 KIAS、2009年11月)、⑧「第10回大統領選挙と抗議運動」(『アジア研ワールド・トレンド』第169号、10～12頁、日本貿易振興会アジア経済研究所、2009年10月)、「『6月危機』とイラン革命30年」(『歴史学研究』864号、35～42頁、歴史学研究会、2010年3月)、「イギリスとイラン防衛同盟(1814年)」(歴史学研究会編『世界史史料8 帝国主義と各地の抵抗1』、206～207頁、岩波書店、2009年10月)、「イギリスとイランの通商条約(1841年)」(歴史学研究会編『世界史史料8 帝国主義と各地の抵抗1』、209～210頁、岩波書店、2009年10月)。

六反田 豊

②『中近世朝中関係資料集(稿)』(森平雅彦氏・村井章介氏・長森美信氏と共著、科学研究費補助金(特定領域研究)「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生」中近世朝鮮班[代表:森平雅彦]、2010年3月、352頁)、③「『西岳志』異本考—その概要と類型化」(『朝鮮学報』211、1～40頁、朝鮮学会、2009年4月)、⑦「東洋文庫の朝鮮史料と朝鮮近世財政史研究」(財団法人東洋文庫2009年度秋期東洋学講座、2009年11月2日、要旨:『東洋学

報』91-4、95～96頁、東洋文庫、2010年3月)、「15・16世紀朝鮮の「水賊」(九州史学会2009年度大会朝鮮学部会シンポジウム「中近世の朝鮮半島と東アジア海域」、2009年12月13日、要旨：なし)。

和田 恭幸

- ②『浅井了意全集 仏書編第2巻』(岩田書院、2009年5月、647頁)、③「仮名草子と仏教」(『江戸文学からの架橋』、361～378頁、竹林舎、2009年7月)、④「江戸時代の庶民文学と仏教」(「娯楽と仏教—江戸時代の庶民教化と諸相—」、2009年4月、『教化研究』147号、38～63頁、真宗大谷派教学研究、2010年1月)。

IV 業務報告

1. 総務報告

A. 会議事項

(1) 理事会

第 338 回 開催日 2009 年 6 月 9 日 (火曜日)

出席者 榎原 稔、山川尚義、大崎 仁、草原克豪、佐藤次高、斯波義信、
田仲一成、鶴見尚弘、中根千枝、濱下武志、原 實、福澤 武、
三木繁光

委任状 石井米雄

第 339 回 開催日 2009 年 6 月 9 日 (火曜日)

出席者 榎原 稔、山川尚義、大崎 仁、草原克豪、佐藤次高、斯波義信、
田仲一成、鶴見尚弘、中根千枝、濱下武志、原 實、福澤 武、
三木繁光

委任状 石井米雄

第 340 回 開催日 2010 年 2 月 16 日 (火曜日)

出席者 榎原 稔、山川尚義、佐藤次高、斯波義信、田仲一成、鶴見尚
弘、中根千枝、原 實、福澤 武

委任状 大崎 仁、草原克豪、濱下武志、三木繁光

(2) 評議員会

第 161 回 開催日 2009 年 6 月 9 日 (火曜日)

出席者 荒蒔康一郎、梅村 坦、尾池和夫、後藤 明、平野健一郎

委任状 有馬朗人、安西祐一郎、岸本美緒、久保正彰、小宮山宏、
白井克彦、瀬谷博道、西田龍雄、増田信行、間野英二、
Wang Gungwu

第 162 回 開催日 2010 年 2 月 16 日（火曜日）

出席者 荒蒔康一郎、梅村 坦、岸本美緒、久保正彰、瀬谷博道、
長尾 真、平野健一郎

委任状 有馬朗人、後藤 明、白井克彦、清家 篤、西田龍雄、
濱田純一、松本 紘、増田信行、間野英二、Wang Gungwu

（3）東洋学連絡委員会

前 期 開催日 2009 年 5 月 26 日（火曜日）

出席者 榎原 稔、石井米雄、梅原 郁、尾崎 康、興膳 宏、
斯波義信、竺沙雅章、中根千枝、間野英二、森本公誠

議 題 1. 2008 年度財団法人東洋文庫事業報告について

2. 文部科学省「平成 21 年度科学研究費補助金（特定奨励費）
の審査結果の所見について

3. その他

後 期 開催日 2010 年 2 月 2 日（金曜日）

出席者 榎原 稔、梅原 郁、興膳 宏、斯波義信、中根千枝、
吉田順一

議 題 1. 2010 年度財団法人東洋文庫事業計画案について

2. その他

B. 総務・広報事項

- ・図書部に資料整理課及び閲覧複写課を設置した。
- ・普及展示部を新設した。
- ・東洋文庫規程集を作成、各課に設置した。
- ・ホームページのリニューアルを行った。
- ・「三菱デジタルライブラリー」（三菱広報委員会）への収蔵品映像展示、「マンズリー三菱」への収蔵品掲載、文京区関係広報誌等への掲載協力等を行い、広報普及活動を図った。

C. 設備・営繕事項

- ・施設の全面建替工事中。

2. 人事報告

A. 役員

年月日	役職名	氏名	区分	備考
2009.6.9	監事	岡野理一郎	退任	
〃	〃	西村敏行	就任	
〃	評議員	安西祐一郎	退任	
〃	〃	尾池和夫	〃	
〃	〃	小宮山宏	〃	
〃	〃	清家篤	就任	
〃	〃	長尾真	〃	
〃	〃	濱田純一	〃	
〃	〃	松本紘	〃	
2010.2.12	理事	石井米雄	逝去	

B. 東洋学連絡委員

年月日	役職名	氏名	区分	備考
2009.4.1	委員	吉田順一	就任	

C. 職員・研究員異動

年 月 日	役 職 名	氏 名	区 分	備 考
2009.4.1	資料整理課長	會 谷 佳 光	就 任	
"	閲覧複写課長	會 谷 佳 光	"	
"	研 修 員	中 村 邦 子	"	国立国会図書館より派遣
"	"	新谷 芙美子	"	"
"	研 究 員	池 田 温	委 嘱	
"	"	枋 尾 武	"	
"	"	永 田 雄 三	"	
"	"	原 實	"	
"	"	柳 田 征 司	"	
2009.6.1	"	石 塚 晴 通	"	
"	"	辛 島 昇	"	
"	研究員(兼任)	梅 村 坦	"	
"	"	太 田 信 宏	"	
"	"	粕 谷 元	"	
"	"	嶋 尾 稔	"	
"	"	妹 尾 達 彦	"	
"	"	高 田 幸 男	"	
"	"	深 沢 眞 二	"	
"	"	山 本 英 史	"	
"	"	吉水 千鶴子	"	
2009.9.1	嘱託職員	牧 野 元 紀	"	
2009.12.31	研 究 員	山 崎 元 一	退 任	
2010.2.12	研 究 顧 問	石 井 米 雄	逝 去	
2010.3.31	研 修 員	新谷 芙美子	退 任	
"	研 究 員	風間 喜代三	"	
"	研究員(兼任)	中兼 和津次	"	
"	"	御 牧 克 己	"	
"	"	籾 山 明	"	

D. 客員研究員異動

年 月 日	役 職 名	氏 名	区 分	備 考
2009.4.1	研究員(客員)	青 木 敦	委 嘱	
〃	〃	浅 田 進 史	〃	
〃	〃	飯 島 涉	〃	
〃	〃	石 川 寛	〃	
〃	〃	宇 山 智 彦	〃	
〃	〃	小 田 壽 典	〃	
〃	〃	北 川 香 子	〃	
〃	〃	佐 藤 仁 史	〃	
〃	〃	高 遠 拓 児	〃	
〃	〃	田 中 比 呂 志	〃	
〃	〃	坪 井 祐 司	〃	
〃	〃	長 縄 宣 博	〃	
〃	〃	西 英 昭	〃	
〃	〃	濱 本 真 美	〃	
〃	〃	松 井 太	〃	
〃	〃	三 田 昌 彦	〃	
〃	〃	守 川 知 子	〃	
〃	〃	吉 澤 誠 一 郎	〃	
2009.6.1	〃	石 塚 晴 通	退 任	
〃	〃	辛 島 昇	〃	
〃	〃	梅 村 坦	〃	
〃	〃	太 田 信 宏	〃	
〃	〃	粕 谷 元	〃	
〃	〃	嶋 尾 稔	〃	
〃	〃	妹 尾 達 彦	〃	
〃	〃	高 田 幸 男	〃	
〃	〃	深 沢 眞 二	〃	
〃	〃	山 本 英 史	〃	

年 月 日	役 職 名	氏 名	区 分	備 考
〃	研究員(客員)	吉水 千鶴子	委 嘱	
〃	〃	江川 ひかり	〃	
〃	〃	澤 江 史 子	〃	
〃	〃	鈴 木 恵 美	〃	
〃	〃	田 中 仁	〃	
〃	〃	服 部 龍 二	〃	
〃	〃	湯 浅 剛	〃	
2009.9.1	〃	岡 野 誠	〃	
〃	〃	梶 谷 懐	〃	
〃	〃	金 子 修 一	〃	
〃	〃	川 合 安	〃	
〃	〃	佐藤 健太郎	〃	
〃	〃	真 道 洋 子	〃	
〃	〃	唐 成	〃	
〃	〃	中 村 元 哉	〃	
〃	〃	寶 劍 久 俊	〃	
2009.3.31	〃	設 樂 國 廣	〃	
〃	〃	薙 勇 造	〃	
〃	〃	関 本 照 夫	〃	
〃	〃	武 田 幸 男	〃	
〃	〃	鶴 見 尚 弘	〃	
〃	〃	延 廣 眞 治	〃	
〃	〃	花 田 宇 秋	〃	
〃	〃	濱 田 正 美	〃	
〃	〃	細 谷 良 夫	〃	
〃	〃	松 濤 誠 達	〃	
〃	〃	三 谷 孝	〃	

3. 会計報告

貸借対照表(一般会計)

2010年3月31日現在

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	2,321,342	2,478,478	△ 157,136
未収金	6,381,659	12,135,286	△ 5,753,627
商 品	3,108,768	3,460,223	△ 351,455
前払費用	2,167,979	2,864,451	△ 696,472
流動資産合計	13,979,748	20,938,438	△ 6,958,690
2. 固定資産			
(1)基本財産			
図書資料	1,041,708,012	1,041,708,012	0
土地	110,494	110,494	0
保証金	50,000	50,000	0
投資有価証券	2,842,500,000	2,842,419,502	80,498
預金	115,322	115,322	0
基本財産合計	3,884,483,828	3,884,403,330	80,498
(2)特定資産			
退職給付引当資産	39,009,470	31,708,144	7,301,326
建物設備修繕引当資産	86,440,784	63,276,068	23,164,716
展示開設準備引当資産	15,000,000	0	15,000,000
特定資産合計	140,450,254	94,984,212	45,466,042
(3)その他固定資産			
建物	274,235,919	286,633,675	△ 12,397,756
構築物	806,801	1,075,735	△ 268,934
什器備品	18,174,336	23,359,960	△ 5,185,624
図書資料	180,927,050	153,859,313	27,067,737
ソフトウェア	8,052,813	4,204,302	3,848,511
電話加入権	364,000	364,000	0
保証金	2,215,440	2,215,440	0
長期前払費用	1,358,727	1,817,492	△ 458,765
運営調整積立資産	97,455,950	82,413,540	15,042,410
その他固定資産合計	583,591,036	555,943,457	27,647,579
固定資産合計	4,608,525,118	4,535,330,999	73,194,119
資産合計	4,622,504,866	4,556,269,437	66,235,429
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	1,505,690	2,977,285	△ 1,471,595
預り金	1,167,012	1,252,112	△ 85,100
賞与引当金	7,155,998	7,559,536	△ 403,538
流動負債合計	9,828,700	11,788,933	△ 1,960,233
2. 固定負債			
退職給付引当金	39,009,470	31,708,144	7,301,326
固定負債合計	39,009,470	31,708,144	7,301,326
負債合計	48,838,170	43,497,077	5,341,093
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
寄付金等	202,110,494	202,110,494	0
指定正味財産合計	202,110,494	202,110,494	0
(うち基本財産への充当額)	(202,110,494)	(202,110,494)	(0)
2. 一般正味財産			
(うち基本財産への充当額)	4,371,556,202	4,310,661,866	60,894,336
(うち特定資産への充当額)	(3,682,373,334)	(3,682,292,836)	(80,498)
(うち特定資産への充当額)	(101,440,784)	(63,276,068)	(38,164,716)
正味財産合計	4,573,666,696	4,512,772,360	60,894,336
負債及び正味財産合計	4,622,504,866	4,556,269,437	66,235,429

正味財産増減計算書（一般会計）

2009年4月1日から2010年3月31日まで

（単位：円）

科 目	当年度	前年度	増減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産運用益	85,738,335	81,600,328	4,138,007
特定資産運用益	249,625	89,539	160,086
受取寄付金	101,040,000	95,400,000	5,640,000
維持会費収入	46,540,000	40,200,000	6,340,000
寄付金収入	54,500,000	55,200,000	△ 700,000
受取会費	390,500	462,500	△ 72,000
受取分担金	20,000,000	25,400,000	△ 5,400,000
受託金	12,000,000	12,000,000	0
事業収益	7,838,211	8,847,504	△ 1,009,293
受取補助金等	110,000,000	112,160,000	△ 2,160,000
雑収益	3,442,076	566,985	2,875,091
経常収益計	340,698,747	336,626,866	4,171,891
(2) 経常費用			
事業費	231,261,888	230,038,968	1,222,920
調査研究費	29,316,857	32,014,932	△ 2,698,075
資料収集・整理費	14,675,224	15,471,370	△ 796,146
研究資料出版費	23,456,128	29,518,223	△ 6,062,095
普及活動費	16,232,185	13,900,993	2,331,192
学術情報提供費	8,081,856	10,427,213	△ 2,345,357
地域研究プログラム費	13,080,084	12,923,941	156,143
受託研究費	9,243,325	10,530,318	△ 1,286,993
人件費	82,430,589	66,584,968	15,845,621
役員報酬	2,412,000	0	2,412,000
給料手当	62,924,840	54,757,558	8,167,282
賞与引当金繰入	4,384,585	3,618,128	766,457
退職給付費用	4,209,692	1,936,304	2,273,388
福利厚生費	8,499,472	6,272,978	2,226,494
事務費	34,745,640	38,667,010	△ 3,921,370
設備保守修繕費	3,085,874	3,047,237	38,637
水道光熱費	4,662,664	6,163,368	△ 1,500,704
賃借料	360,213	76,293	283,920
業務委託費	1,857,757	1,882,669	△ 24,912
減価償却費	16,904,289	20,932,990	△ 4,028,701
諸雑費	7,874,843	6,564,453	1,310,390
管理費	48,851,944	66,655,695	△ 17,803,751
人件費	42,133,752	54,948,937	△ 12,815,185
役員報酬	8,308,000	10,720,000	△ 2,412,000
給料手当	23,167,169	30,388,311	△ 7,221,142
賞与引当金繰入	2,771,413	3,941,408	△ 1,169,995
退職給付費用	3,091,634	3,821,352	△ 729,718
福利厚生費	4,795,536	6,077,866	△ 1,282,330
事務費	6,718,192	11,706,758	△ 4,988,566
設備保守修繕費	62,977	477,367	△ 414,390
水道光熱費	95,156	1,128,535	△ 1,033,379
謝金	1,781,010	1,845,420	△ 64,410
減価償却費	3,676,847	5,168,732	△ 1,491,885
諸雑費	1,102,202	3,086,704	△ 1,984,502
経常費用計	280,113,832	296,694,663	△ 16,580,831
当期経常増減額	60,584,915	39,832,193	20,752,722
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
固定資産受贈益	394,383	17,296,191	△ 16,901,808
経常外収益計	394,383	17,296,191	△ 16,901,808
(2) 経常外費用			
固定資産除却損	14,962	153,134,625	△ 153,119,663
経常外費用計	14,962	153,134,625	△ 153,119,663
当期経常外増減額	379,421	△ 135,838,434	136,217,855
税引前当期一般正味財産増減額	60,964,336	△ 96,006,241	156,970,577
法人税、住民税及び事業税	70,000	70,000	0
当期一般正味財産増減額	60,894,336	△ 96,076,241	156,970,577
一般正味財産期首残高	4,310,661,866	4,406,738,107	△ 96,076,241
一般正味財産期末残高	4,371,556,202	4,310,661,866	60,894,336
II 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	202,110,494	202,110,494	0
指定正味財産期末残高	202,110,494	202,110,494	0
III 正味財産期末残高	4,573,666,696	4,512,772,360	60,894,336

財務諸表に対する注記（一般会計）

1. 重要な会計方針

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

満期保有目的有価証券

償却原価法（定額法）を採用しております。

(2) 棚卸資産の評価基準及び評価方法

最終仕入原価法を採用しております。

(3) 固定資産の減価償却方法

① 有形固定資産

定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 30～50年

什器備品 3～10年

② 無形固定資産

定額法を採用しております。

(4) 引当金の計上基準

① 賞与引当金

役員及び職員の賞与金の支払いに備えて、賞与支給見込額のうち当事業年度負担額を計上しております。

② 退職給付引当金

役員及び職員の退職給付に備えるため、当事業年度における退職給付債務に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。

うち、役員退職給付引当金9,380,000円が含まれています。

(5) 消費税等の会計処理

税込方式を採用しております。

2. 基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりです。

（単位：円）

科 目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
図書資料	1,041,708,012	—	—	1,041,708,012
土地	110,494	—	—	110,494
保証金	50,000	—	—	50,000
有価証券	2,842,419,502	1,302,500,000	1,302,419,502	2,842,500,000
預金	115,322	1,302,503,078	1,302,503,078	115,322
小計	3,884,403,330	2,605,003,078	2,604,922,580	3,884,483,828
特定資産				
退職給付引当資産	31,708,144	7,301,326	—	39,009,470
建物設備修繕引当資産	63,276,068	23,164,716	—	86,440,784
展示開設準備引当資産	—	15,000,000	—	15,000,000
小計	94,984,212	45,466,042	0	140,450,254
合計	3,979,387,542	2,650,469,120	2,604,922,580	4,024,934,082

3 基本財産及び特定資産の財源等の内訳

基本財産及び特定資産の財源等の内訳は、次のとおりです。

(単位：円)

科 目	当期末残高	(うち指定正味財 産からの充当額)	(うち一般正味財 産からの充当額)	(うち負債に対応 する額)
基本財産				
図書資料	1,041,708,012	—	(1,041,708,012)	—
土地	110,494	(110,494)	—	—
保証金	50,000	—	(50,000)	—
有価証券	2,842,500,000	(202,000,000)	(2,640,500,000)	—
預金	115,322	—	(115,322)	—
小計	3,884,483,828	(202,110,494)	(3,682,373,334)	—
特定資産				
退職給付引当資産	39,009,470	—	—	(39,009,470)
建物設備修繕引当資産	86,440,784	—	(86,440,784)	—
展示開設準備引当資産	15,000,000	—	(15,000,000)	—
小計	140,450,254	—	(101,440,784)	(39,009,470)
合 計	4,024,934,082	(202,110,494)	(3,783,814,118)	(39,009,470)

4 固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は、次のとおりです。

(単位：円)

科 目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
建物	812,020,671	△ 537,784,752	274,235,919
構築物	26,893,390	△ 26,086,589	806,801
什器備品	77,596,594	△ 59,422,258	18,174,336
ソフトウェア	11,144,510	△ 3,091,697	8,052,813
合 計	927,655,165	△ 626,385,296	301,269,869

5 満期保有目的の債券の内訳ならびに帳簿価額、時価及び評価損益

満期保有目的の債券の内訳ならびに帳簿価額、時価及び評価損益は次のとおりです。(単位：円)

科 目	帳簿価額	時 価	評 価 損 益
国債	2,500,000	2,505,250	5,250
三菱UFJセキュリティーズ [®] 国際ショナル	300,000,000	271,044,000	△ 28,956,000
三菱UFJセキュリティーズ [®] 国際ショナル	1,000,000,000	943,120,000	△ 56,880,000
三菱セキュリティーズ [®] インタークレジットリンク債	500,000,000	499,360,000	△ 640,000
三菱UFJ証券クレジットリンク債	500,000,000	433,705,000	△ 66,295,000
三菱UFJセキュリティーズ [®] 国際ショナル	500,000,000	408,665,000	△ 91,335,000
共同発行市場公募地方債	40,000,000	41,657,200	1,657,200
合 計	2,842,500,000	2,600,056,450	△ 242,443,550

6 補助金の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高

補助金の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高は次のとおりです。

(単位：円)

補助金等の名称	交付者	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高	貸借対照表上の記載区分
一般会計 補助金 科学研究費補助金 (特定奨励費)	文部科学省	0	110,000,000	110,000,000	0	—
合 計		0	110,000,000	110,000,000	0	—

7 退職給付関係

(1) 採用している退職給付制度の概要

確定給付型の制度として退職一時金制度をもうけています。

(2) 退職給付債務及びその内訳

退職給付債務 Δ 39,009,470 円

退職給付引当金 Δ 39,009,470 円

(3) 退職給付費用に関する事項

勤務費用 7,301,326 円

退職給付費用 7,301,326 円

(4) 退職給付債務等の計算の基礎に関する事項

退職給付債務の計算に当たっては退職一時金制度に基づく期末自己都合要支給額を基礎として計算しています。

8 金融商品関係

(1) 金融商品の状況に関する事項

当法人は資金運用については短期的な預金及び元本償還の確実性の高い公社債等に限定しております。

(2) 金融商品の時価等に関する事項

① 現金預金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、開示は省略しております。

② 退職給付引当資産

③ 建物設備修繕引当資産

④ 展示開設準備引当資産

⑤ 運営調整積立資産

これらは預金に限定されており短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、開示は省略しております。

⑥ 投資有価証券

これらの時価について、取引所の価額又は取引金融機関からの提示された価額によっております。

また、期末における貸借対照表計上額、時価及び差額については前述5.に記載されているため、開示は省略しております。

財 産 目 録

2010年3月31日現在

(単位：円)

科 目	金 額		
(資産の部)			
I 流動資産			
現金預金			
三菱東京UFJ銀行駒込支店普通預金	13,029,595		
三菱東京UFJ銀行駒込支店定期預金	864,000,000		
郵便振替口座	32,990		
未収金			
有価証券未収利息等	6,381,659		
商品			
出版物等	3,108,768		
前払費用			
保険料等	2,571,979		
流動資産合計		889,124,991	
II 固定資産			
(1) 基本財産			
図書資料		1,041,708,012	
和漢書	515,330冊		
洋書	364,722冊		
複写資料	29,800点		
土地		110,494	
所在地番地目面積	東京都文京区本駒込2丁目28番21号 東京都文京区本駒込2丁目147番1号 宅地 3,687.63平方米		
保証金			
日本腎臓病保証株式会社保証金	50,000		
投資有価証券			
満期保有目的有価証券	2,842,500,000		
預金			
三菱東京UFJ銀行駒込支店普通預金	115,322		
基本財産合計		3,884,483,828	
(2) 特定資産			
建物		148,036,441	
所在地番地目面積	東京都文京区本駒込2丁目147、157-2 構造 鉄骨造 建築面積 216.45平方米 延床面積 408.14平方米 空調衛生、昇降機、電気給排水等諸設備		
構築物		5,837,882	
建設仮勘定		916,738,465	
設計料等			
什器備品		133,660	
金庫	1点		
保証金		220,000	
敷金			
退職給付引当資産			
三菱東京UFJ銀行駒込支店普通預金	19,009,470		
定期預金	20,000,000		
建物設備修繕引当資産			
三菱東京UFJ銀行駒込支店普通預金	3,440,784		
定期預金	83,000,000		
展示開設準備引当資産			
三菱東京UFJ銀行駒込支店定期預金	15,000,000		
特定資産合計		1,211,418,702	
(3) その他固定資産			
建物		274,235,919	
所在地番地目面積	東京都文京区本駒込2丁目28番21号 構造 鉄筋コンクリート造 建築面積 810.74平方米 延床面積 4,091.02平方米 空調衛生、昇降機、電気給排水等諸設備		
構築物		806,801	
什器備品		18,174,336	
事務用器具等	152点		
図書資料		180,927,050	
和漢書	16,468冊		
洋書	23,155冊		
マイクロFILM等	718冊		
ソフトウェア	9点	8,052,813	
電話加入権	5回線	364,000	
保証金		2,215,440	
敷金			
長期前払費用		1,358,727	
保険料			
運営調整積立資産			
三菱東京UFJ銀行駒込支店普通預金	37,455,950		
定期預金	60,000,000		
その他固定資産合計		583,591,036	
固定資産合計		5,679,491,566	
資産合計			6,568,616,557
(負債の部)			
I 流動負債			
未払金			
出版物印刷料等	1,505,690		
預り金	1,167,012		
職員に対する給与源泉所得税等	7,155,998		
賞与引当金			9,828,700
役員賞与引当額			
流動負債合計			
II 固定負債			
退職給付引当金			
役員退職金引当額	39,009,470		
固定負債合計			39,009,470
負債合計			48,838,170
負債と資本			6,519,778,387

収支計算書(一般会計)

2009年4月1日から2010年3月31日まで

(単位:円)

科 目	予算額	決算額	増 減	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	82,200,000	85,657,837	△ 3,457,837	
維持会費収入	60,000,000	46,540,000	13,460,000	
寄付金収入	55,000,000	54,500,000	500,000	
会費収入	500,000	390,500	109,500	
分担金収入	25,000,000	20,000,000	5,000,000	
受託金収入	12,000,000	12,000,000	0	
研究活動収入	7,500,000	7,838,211	△ 338,211	
補助金等収入	110,000,000	110,000,000	0	
雑収入	500,000	3,399,666	△ 2,899,666	
事業活動収入計	352,700,000	340,326,214	12,373,786	
2. 事業活動支出				
事業費	266,200,000	236,413,430	29,786,570	
調査研究費	31,500,000	29,316,857	2,183,143	
資料収集・整理費	38,000,000	38,313,628	△ 313,628	
研究資料出版費	21,500,000	23,456,128	△ 1,956,128	
普及活動費	19,000,000	16,232,185	2,767,815	
学術情報提供費	18,200,000	7,730,401	10,469,599	
地域研究プログラム費	25,000,000	16,508,249	8,491,751	
受託研究費	12,000,000	9,243,325	2,756,675	
人件費	76,000,000	78,220,897	△ 2,220,897	
事務費	25,000,000	17,391,760	7,608,240	
管理費	38,000,000	42,144,289	△ 4,144,289	
人件費	35,000,000	39,042,118	△ 4,042,118	
事務費	3,000,000	3,102,171	△ 102,171	
事業活動支出計	304,200,000	278,557,719	25,642,281	
事業活動収支差額	48,500,000	61,768,495	△ 13,268,495	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
運営調整積立資産取崩収入	30,000,000	20,000,000	10,000,000	
投資活動収入計	30,000,000	20,000,000	10,000,000	
2. 投資活動支出				
固定資産取得支出	2,500,000	6,199,080	△ 3,699,080	
退職給付引当資産取得支出	5,000,000	7,216,417	△ 2,216,417	
建物設備修繕引当資産取得支出	23,000,000	23,000,000	0	
展示開設準備引当資産取得支出	0	15,000,000	△ 15,000,000	
運営調整積立資産取得支出	48,000,000	35,000,000	13,000,000	
投資活動支出計	78,500,000	86,415,497	△ 7,915,497	
投資活動収支差額	△ 48,500,000	△ 66,415,497	17,915,497	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入	0	0	0	(注1)
2. 財務活動支出	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
当期収支差額	0	△ 4,647,002	4,647,002	
前期繰越収支差額	5,689,282	5,689,282	0	
次期繰越収支差額	5,689,282	1,042,280	4,647,002	

(注) 1. 借入金限度額 30,000,000円

収支計算書に対する注記（一般会計）

1. 資金の範囲

資金の範囲には、現金預金、未収金、前払費用、未払金、預り金、賞与引当金を含めています。

なお、前期末残高及び当期末残高は、下記2に記載するとおりです。

2. 次期繰越収支差額に含まれる資産及び負債の内訳（単位：円）

科 目	前期末残高	当期末残高
現金預金	2,478,478	2,321,342
未収金	12,135,286	6,381,659
前払費用	2,864,451	2,167,979
合 計	17,478,215	10,870,980
未払金	2,977,285	1,505,690
預り金	1,252,112	1,167,012
賞与引当金	7,559,536	7,155,998
合 計	11,788,933	9,828,700
次期繰越収支差額	5,689,282	1,042,280

V 役 職 員 名 簿

2010年3月31日現在の財団法人東洋文庫の役職員は、以下のとおりである。

1. 役 員

役 職 名	氏 名	現 職
理 事 長	榎 原 稔	東洋文庫理事長 三菱商事株式会社相談役
専務理事	山 川 尚 義	東洋文庫専務理事
理 事	大 崎 仁	人間文化研究機構長特別顧問
〃	草 原 克 豪	前拓殖大学副学長
〃	佐 藤 次 高	東洋文庫研究部長 早稲田大学教授 東京大学名誉教授
〃	斯 波 義 信	東洋文庫文庫長 日本学士院会員 大阪大学名誉教授
〃	田 仲 一 成	東洋文庫図書部長 日本学士院会員 東京大学名誉教授
〃	鶴 見 尚 弘	横浜国立大学名誉教授
〃	中 根 千 枝	日本学士院会員 東京大学名誉教授
〃	濱 下 武 志	東洋文庫図書顧問 龍谷大学教授
〃	原 實	日本学士院会員 東京大学名誉教授
〃	福 澤 武	三菱地所株式会社相談役
〃	三 木 繁 光	株式会社三菱東京UFJ銀行相談役
監 事	東 條 和 彦	三菱商事株式会社顧問
〃	西 村 敏 行	三菱金曜会事務局長

2. 評 議 員

役 職 名	氏 名	現 職
評 議 員	荒 蒔 康一郎	キリンホールディングス株式会社相談役
〃	有 馬 朗 人	科学技術館館長 武蔵学園長 東京大学名誉教授
〃	梅 村 坦	中央大学教授
〃	岸 本 美 緒	お茶の水女子大学教授
〃	久 保 正 彰	日本学士院院長 東京大学名誉教授
〃	後 藤 明	東洋大学教授 東京大学名誉教授
〃	白 井 克 彦	早稲田大学総長
〃	清 家 篤	慶應義塾塾長
〃	瀬 谷 博 道	旭硝子株式会社相談役
〃	長 尾 真	国立国会図書館館長 京都大学名誉教授
〃	西 田 龍 雄	日本学士院会員 京都大学名誉教授
〃	濱 田 純 一	東京大学総長
〃	平 野 健一郎	東京大学名誉教授 早稲田大学名誉教授
〃	増 田 信 行	三菱重工業株式会社相談役
〃	松 本 紘	京都大学総長
〃	間 野 英 二	京都大学名誉教授
〃	Wang Gungwu	シンガポール大学東亜研究所長

3. 東洋学連絡委員会委員

役 職 名	氏 名	現 職
委 員 長	榎 原 稔	東洋文庫理事長 三菱商事株式会社相談役
委 員	梅 原 郁	京都大学名誉教授
〃	尾 崎 康	元慶應義塾大学教授

役職名	氏名	現職
〃	興善宏	京都大学名誉教授
〃	斯波義信	東洋文庫文庫長
〃		日本学士院会員
〃		大阪大学名誉教授
〃	竺沙雅章	京都大学名誉教授
〃	中根千枝	日本学士院会員
〃		東京大学名誉教授
〃	西田龍雄	日本学士院会員
〃		京都大学名誉教授
〃	間野英二	京都大学名誉教授
〃	御牧克己	京都大学教授
〃		日本学士院会員
〃	森本公誠	東大寺長老
〃	吉田順一	早稲田大学教授

4. 名誉研究員

氏名	所属機関
BLUSSE, Leonard	Universite Leiden
De BARY. W. T.	Columbia University
ELVIN, Mark	The Australian National University(Prof. Emerit us)
HUMPHREYS, R. Stephen	University of California
GERNET, Jacques.	Collège de France
KADIVAR, Mohsen	Tarbiat Modarres University
韓永愚	Seoul 大学校 (Prof. Emerit us)
黄寬重	国立中興大学 中央研究院歴史語言研究所
KYCHANOV, E.I.	Saint-Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies of Russian Academy of Sciences
LANCIOTTI, Lionelio	University of Naples(Prof. Emerit us)
李伯重	清華大学人文社会科学学院經濟学研究所
McDERMOTT, Joseph P.	St. Johns college, Cambridge University
RAFEQ, Abdul-Karim	The College of William and Mary Department of History
SAHIN, Ilhan	Kirgizistan-Turkiye Manas Universitesi
WANG, Gungwu	National University of Singapore

5. 職員・研究員

部 名	職 名	氏 名	現 職 (*印は国立国会図書館研修生)
	理 事 長	横 原 稔	東洋文庫理事長 三菱商事株式会社相談役
	文 庫 長 専 務 理 事	斯 波 義 信 山 川 尚 義	(普及展示部長兼務) (総務部長兼務)
総務部	部 長 代 理	青 木 雄 二	
〃	課 長	柴 代 淳 子	
〃	参 事	長 谷 川 茂 広	
〃	〃	藤 代 和 卓	
〃	〃	藤 村 由 美 子	
〃	〃	牧 祐 紀 子	
図書部	部 長	田 仲 一 成	(龍谷大学教授)
〃	図 書 顧 問	濱 下 武 志	研究員を兼務
〃	課 長	會 谷 佳 光	
〃	研 究 員	櫻 井 徹 子	
〃	〃	篠 崎 陽 子	
〃	〃	山 村 義 照 子	
〃	参 事 員	橘 伸 子	*
〃	研 修 員	中 村 邦 子	*
〃	〃	新 谷 芙 美 子	
普及展示部 研究部	嘱 託 職 員 部 長	牧 野 元 紀 佐 藤 次 高	東洋文庫研究員(兼任) (早稲田大学教授)
〃	主 幹 研 究 員	瀧 下 彩 子	
〃	研 究 員	原 山 隆 広	
〃	〃	大 澤 肇	現代中国研究資料室派遣研究員
〃	〃	柳 谷 あゆみ	イスラーム地域研究資料室派遣研究員
〃	〃	池 田 温	(創価大学名誉教授)
〃	〃	池 田 雄 一	(中央大学名誉教授)
〃	〃	石 塚 晴 通	(北海道大学名誉教授)
〃	〃	市 古 宙 三	(お茶の水女子大学名誉教授)
〃	〃	大 江 孝 男	(東京外国語大学名誉教授)
〃	〃	太 田 幸 男	(東京学芸大学名誉教授)
〃	〃	岡 田 英 弘	(東京外国語大学名誉教授)
〃	〃	風 間 喜 代 三	(東京大学名誉教授)

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研 究 員	辛 島 昇	(東京大学名誉教授)
〃	〃	菊 池 英 夫	(元中央大学教授)
〃	〃	草 野 靖	(元熊本大学教授)
〃	〃	酒 井 憲 二	(田園調布学園短期大学名誉教授)
〃	〃	斯 波 義 信	東洋文庫文庫長(大阪大学名誉教授)
〃	〃	志 茂 碩 敏	
〃	〃	末 成 道 男	(元東京大学教授)
〃	〃	多 田 狷 介	(日本女子大学名誉教授)
〃	〃	田 仲 一 成	(東京大学名誉教授)
〃	〃	田 中 時 彦	(東海大学名誉教授)
〃	〃	田 村 晃 一	(青山学院大学名誉教授)
〃	〃	竺 沙 雅 章	(京都大学名誉教授)
〃	〃	千 葉 熈	(元桐朋学園大学理事長)
〃	〃	枋 尾 武	(成城大学名誉教授)
〃	〃	土 肥 義 和	(國學院大学名誉教授)
〃	〃	鳥 海 靖	(東京大学名誉教授)
〃	〃	永 田 雄 三	(元明治大学教授)
〃	〃	永 積 洋 子	(元東京大学教授)
〃	〃	西 田 龍 雄	(京都大学名誉教授)
〃	〃	濱 島 敦 俊	(暨南国際大学教授)
〃	〃	原 實	(東京大学名誉教授)
〃	〃	本 庄 比 佐 子	
〃	〃	牧 野 元 紀	嘱託職員を兼務
〃	〃	松 丸 道 雄	(東京大学名誉教授)
〃	〃	松 村 潤	(日本大学名誉教授)
〃	〃	柳 田 征 司	(元奈良大学教授)
〃	〃	矢 吹 晋	(横浜市立大学名誉教授)
〃	〃	山 口 瑞 鳳	(東京大学名誉教授)
〃	〃	吉 田 寅	(元立正大学教授)
〃	〃	渡 辺 紘 良	(獨協医科大学名誉教授)
〃	研究員(兼任)	飯 島 武 次	駒沢大学教授
〃	〃	石 橋 崇 雄	国士舘大学教授
〃	〃	内 山 雅 生	宇都宮大学教授
〃	〃	梅 村 坦	中央大学教授
〃	〃	小 名 康 之	青山学院大学教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(兼任)	糟 谷 憲 一	一橋大学教授
〃	〃	粕 谷 元	日本大学准教授
〃	〃	加 藤 直 人	日本大学教授
〃	〃	川 崎 信 定	東洋大学教授
〃	〃	岸 本 美 緒	お茶の水女子大学教授
〃	〃	窪 添 慶 文	立正大学教授
〃	〃	後 藤 明	東洋大学教授
〃	〃	小 松 久 男	東京大学教授
〃	〃	嶋 尾 稔	慶應義塾大学准教授
〃	〃	妹 尾 達 彦	中央大学教授
〃	〃	高 田 幸 男	明治大学教授
〃	〃	C.A.ダニエルス	東京外国語大学アジア・アフリカ言語 文化研究所教授
〃	〃	中 兼 和津次	青山学院大学教授
〃	〃	長 澤 栄 治	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	中 見 立 夫	東京外国語大学アジア・アフリカ言語 文化研究所教授
〃	〃	柳 澤 明	早稲田大学准教授
〃	〃	八尾師 誠	東京外国語大学教授
〃	〃	濱 下 武 志	龍谷大学教授
〃	〃	林 佳世子	東京外国語大学教授
〃	〃	平野 健一郎	早稲田大学教授
〃	〃	弘 末 雅 士	立教大学教授
〃	〃	深 沢 眞 二	和光大学教授
〃	〃	古 屋 昭 弘	早稲田大学教授
〃	〃	三 浦 徹	お茶の水女子大学教授
〃	〃	御 牧 克 己	京都大学教授
〃	〃	毛 里 和 子	早稲田大学教授
〃	〃	初 山 明	埼玉大学教授
〃	〃	柳 澤 明	早稲田大学准教授
〃	〃	山 本 英 史	慶應義塾大学教授
〃	〃	吉 田 光 男	東京大学教授
〃	〃	吉 水 千 鶴 子	筑波大学准教授
〃	嘱託職員	近 藤 敦 子	

6. ■客員研究員■

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(客員)	青 木 敦	大阪大学准教授
〃	〃	青 山 瑠 妙	早稲田大学教授
〃	〃	秋 葉 淳	千葉大学准教授
〃	〃	浅 田 進 史	首都大学東京助教
〃	〃	浅 野 秀 剛	大和文華館館長
〃	〃	天 児 慧	早稲田大学教授
〃	〃	新 井 政 美	東京外国語大学教授
〃	〃	荒 川 正 晴	大阪大学教授
〃	〃	飯 尾 秀 幸	専修大学教授
〃	〃	飯 島 涉	青山学院大学教授
〃	〃	池 田 美 佐 子	名古屋商科大学教授
〃	〃	石 川 寛	早稲田大学非常勤講師
〃	〃	磯 貝 健 一	京都外国語大学国際平和言語研究所 研究員
〃	〃	井 上 和 枝	鹿児島国際大学教授
〃	〃	井 上 和 人	国立文化財機構奈良文化財研究所都 城発掘調査部長
〃	〃	今 西 祐 一 郎	九州大学教授
〃	〃	上 野 英 二	成城大学教授
〃	〃	内 田 知 行	大東文化大学教授
〃	〃	梅 田 博 之	麗澤大学名誉教授
〃	〃	梅 原 郁	京都大学名誉教授
〃	〃	宇 山 智 彦	北海道大学スラブ研究センター教授
〃	〃	江 川 ひ かり	明治大学教授
〃	〃	大 河 原 知 樹	東北大学准教授
〃	〃	大 澤 正 昭	上智大学教授
〃	〃	太 田 信 宏	東京外国語大学准教授
〃	〃	大 谷 俊 太	奈良女子大学教授
〃	〃	岡 野 誠	明治大学教授
〃	〃	丘 山 新	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	小 川 裕 充	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	奥 村 哲	首都大学東京教授
〃	〃	小 田 壽 典	豊橋創造大学名誉教授
〃	〃	梶 谷 懐	神戸学院大学准教授
〃	〃	片 桐 一 男	青山学院大学名誉教授
〃	〃	片 山 章 雄	東海大学教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(客員)	片 山 剛	大阪大学教授
〃	〃	加藤 弘之	神戸大学教授
〃	〃	金子 修一	國學院大学教授
〃	〃	金丸 裕一	立命館大学教授
〃	〃	川井 伸一	愛知大学教授
〃	〃	川合 安	東北大学大学院教授
〃	〃	川島 真	東京大学大学院准教授
〃	〃	貴志 俊彦	神奈川大学教授
〃	〃	北川 香子	立教大学兼任講師
〃	〃	北本 朝展	情報・システム研究機構国立情報学 研究所准教授
〃	〃	金 鳳 珍	北九州市立大学教授
〃	〃	楠木 賢道	筑波大学准教授
〃	〃	久保 亨	信州大学教授
〃	〃	熊本 裕	東京大学教授
〃	〃	黒田 卓	東北大学教授
〃	〃	気賀澤 保規	明治大学教授
〃	〃	巖 善平	桃山学院大学教授
〃	〃	胡 潔	名古屋大学准教授
〃	〃	黄 東 蘭	愛知県立大学准教授
〃	〃	興 梶 一郎	神田外語大学教授
〃	〃	小嶋 芳孝	金沢学院大学教授
〃	〃	小 杉 泰	京都大学教授
〃	〃	小浜 正子	日本大学教授
〃	〃	小南 一郎	龍谷大学教授
〃	〃	齋藤 真麻里	人間文化研究機構国文学研究資料館准教授
〃	〃	早乙女 雅博	東京大学准教授
〃	〃	桜井 由躬雄	前東京大学教授
〃	〃	佐藤 健太郎	早稲田大学イスラーム地域研究機構研 究院准教授
〃	〃	佐藤 慎一	東京大学教授
〃	〃	佐藤 宏	一橋大学教授
〃	〃	佐藤 仁史	一橋大学准教授
〃	〃	澤江 史子	東北大学大学院准教授
〃	〃	塩沢 裕仁	法政大学講師
〃	〃	重近 啓樹	静岡大学教授
〃	〃	設樂 國廣	立教大学教授
〃	〃	蒨 勇造	東京大学教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(客員)	清 水 宏 祐	九州大学教授
〃	〃	清 水 信 行	青山学院大学教授
〃	〃	庄垣内 正弘	京都大学教授
〃	〃	真 道 洋 子	イスラーム考古学研究所主任研究員
〃	〃	新 免 康	中央大学教授
〃	〃	須 川 英 徳	横浜国立大学教授
〃	〃	鈴 木 恵 美	早稲田大学イスラーム地域研究機構客員准教授
〃	〃	鈴 木 均	アジア経済研究所新領域研究センター 国際関係・紛争研究グループ長
〃	〃	鈴 木 博 之	山形短期大学講師 愛知大学教授
〃	〃	鈴 木 立 子	愛知大学教授
〃	〃	砂 山 幸 雄	愛知大学教授
〃	〃	關 尾 史 郎	新潟大学教授
〃	〃	関 本 照 夫	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	曾 田 三 郎	広島大学教授
〃	〃	高 遠 拓 児	中京大学准教授
〃	〃	武 内 紹 人	神戸市外国語大学教授
〃	〃	武 田 幸 男	岐阜聖徳学園大学教授
〃	〃	田 島 俊 雄	東京大学教授
〃	〃	立 川 武 蔵	愛知学院大学教授
〃	〃	田 中 明 彦	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	田 中 仁	大阪大学教授
〃	〃	田 中 比 呂 志	東京学芸大学教授
〃	〃	辻 本 裕 成	南山大学准教授
〃	〃	土 田 哲 夫	中央大学教授
〃	〃	坪 井 祐 司	立教大学兼任講師
〃	〃	鶴 見 尚 弘	横浜国立大学名誉教授
〃	〃	寺 田 浩 明	京都大学教授
〃	〃	唐 成	桃山学院大学准教授
〃	〃	唐 亮	横浜市立大学准教授
〃	〃	戸 倉 英 美	東京大学教授
〃	〃	富 澤 芳 亜	島根大学准教授
〃	〃	長 縄 宣 博	北海道大学スラブ研究センター准教授
〃	〃	中 村 元 哉	南山大学准教授
〃	〃	西 英 昭	九州大学准教授
〃	〃	西 尾 寛 治	防衛大学校教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(客員)	延 廣 真 治	帝京大学教授
〃	〃	萩 田 博	東京外国語大学准教授
〃	〃	長谷川 誠 夫	千葉工業大学講師
〃	〃	服 部 龍 二	中央大学准教授
〃	〃	花 田 宇 秋	明治学院大学教授
〃	〃	濱 田 正 美	京都大学教授
〃	〃	濱 本 真 美	NIHU 東京大学拠点研究員
〃	〃	林 俊 雄	創価大学教授
〃	〃	平 勢 隆 郎	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	平 野 聡	東京大学准教授
〃	〃	廣 瀬 紳 一	A. T Kearney. Principal
〃	〃	藤 田 忠	国土館大学教授
〃	〃	藤 本 幸 夫	麗澤大学教授
〃	〃	古 田 和 子	慶應義塾大学教授
〃	〃	弁 納 才 一	金沢大学教授
〃	〃	寶 劔 久 俊	日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員
〃	〃	細 谷 良 夫	東北学院大学教授
〃	〃	堀 川 徹	京都外国語大学教授
〃	〃	松 井 太	弘前大学准教授
〃	〃	松 重 光 浩	日本大学教授
〃	〃	松 永 泰 行	東京外国語大学准教授
〃	〃	松 本 弘	大東文化大学准教授
〃	〃	丸 川 知 雄	東京大学教授
〃	〃	水 野 善 文	東京外国語大学教授
〃	〃	三 田 昌 彦	名古屋大学大学院助教
〃	〃	三 谷 孝	一橋大学教授
〃	〃	宮 崎 修 多	成城大学教授
〃	〃	村 井 章 介	東京大学教授
〃	〃	村 田 雄 二 郎	東京大学教授
〃	〃	本 野 英 一	早稲田大学大学院教授
〃	〃	守 川 知 子	北海道大学文学研究科准教授
〃	〃	森 平 雅 彦	九州大学准教授
〃	〃	森 安 孝 夫	大阪大学教授
〃	〃	山 内 弘 一	上智大学教授
〃	〃	山 内 民 博	新潟大学准教授
〃	〃	山 本 毅 雄	情報・システム研究機構国立情報学研究所名誉教授
〃	〃	湯 浅 剛	防衛省防衛研究所主任研究官
〃	〃	吉澤 誠一郎	東京大学准教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(客員)	吉 田 伸 之	東京大学教授
〃	〃	吉 田 豊	京都大学教授
〃	〃	吉 村 慎太郎	広島大学准教授
〃	〃	六反田 豊	東京大学准教授
〃	〃	和 田 恭 幸	龍谷大学准教授

I Toyo Bunko's activities in FY2009

The following outlines the projects that Toyo Bunko conducted during the 2009 fiscal year, and discusses developments in the projects.

Firstly, the following explains the changes in officials and staff members made during the 2009 fiscal year. At the Council meeting held in June, all 10 members were reappointed as Directors after their terms had expired. Mr. Kazuhiko Tojo was reappointed as an Auditor and Mr. Toshiyuki Nishimura was newly appointed as an Auditor after two Auditors' terms had expired. The terms of all the 16 Councilors had expired on the day of the Council meeting held in June. In the Board of Directors meeting, 13 members were reappointed as Councilors including Mr. Aramaki, Mr. Arima, Mr. Umemura, Ms. Kishimoto, Mr. Kubo, Mr. Goto, Mr. Shirai, Mr. Seya, Mr. Nishida, Mr. Hirano, Mr. Masuda, Mr. Mano and Mr. Wang. Mr. Atsushi Seike, Mr. Makoto Nagao, Mr. Jun'ichi Hamada and Mr. Hiroshi Matsumoto were newly appointed as Councilors. Therefore, the organization of Toyo Bunko now includes 14 Directors, 2 Auditors and 17 Councilors.

It is regrettable to report that Adviser Mr. Yoneo Ishii, who had consecutively held the post of a Director at Tokyo Bunko since 1992, passed away in February 2010.

There was no reassignment of staff members in the 2009 fiscal year. Mr. Sakurai, Research Fellow in the Library Department, was given a citation for his many years of service. Mr. Aoki, Assistant General Manager at the General Affairs Department has taken leave since March due to a health problem.

Mr. Jun'ichi Yoshida, Professor at Waseda University, took his post as a member of the committee at the Oriental Studies Advisory Council in April 2009.

The reconstruction of Toyo Bunko building is progressing as planned. Following the air conditioning equipment work in the annex building and

the library building in the 2008 fiscal year, the demolition of the old office building was completed and the construction of the main building was launched in June 2009. Contractors for the construction of the book stacks, display, office facilities and the landscaping have been chosen and it is expected that the total cost will stay within the budget. It is planned that the new main building will be completed by the end of 2010, which will be followed by relocation, the demolition of the old book stacks and external work. All the reconstruction work will be completed by the end of September 2011.

Regarding the Library Department, the contract for Toyo Bunko to serve as a branch of the National Diet Library, which lasted for about 60 years from 1948, was terminated at the end of March 2009. The Reading Room of Toyo Bunko therefore started operating as a private library. Upon the new start for the library, the Acquisitions & Cataloging Section and the Library Service Section were established in the Library Department on April 1 and Research Fellow Mr. Aitani was appointed as the head of the two sections. Ms. Kuniko Nakamura and Ms. Fumiko Niya were seconded from the National Diet Library as trainees. The stamp for our books was revised and corrected.

The monthly hit count for the database of Toyo Bunko remained around 100,000 hits per month in the 2009 fiscal year. The number of books possessed by Toyo Bunko increased by 10,295 in total during the 2009 fiscal year, which included 6,018 purchased books and 4,277 donated books.

The Research Department published seven books in addition to nine regular publications in the 2009 fiscal year. A memorandum for the five-year re-extension of the cooperation agreement with l'École française d'Extrême-Orient (EFEO) was signed when the Director of EFEO visited Japan.

Oriental Studies Lecture Series was held in the spring and autumn, each

contained three lectures. The lecture series were conducted under the theme of 「東洋文庫とアジアーその1、その2ー」 (Toyo Bunko and Asia 1, 2).” The lectures in the spring included: 「雲南と東南アジアに跨るタイ系民族の世界を行く」 (Exploring the World of the Tai Spreading over Yunnan and Southeast Asia)” given by Mr. Christian Daniels; 「満洲語の世界を開拓する」 (Pioneering the Studies on the World Written in the Manchurian Language)” given by Mr. Naoto Kato; 「倭寇と日本・アジアの交流史」 (Japanese Pirates and the History of Exchanges between Japan and the Rest of Asia)” given by Mr. Shosuke Murai. The lectures in the autumn included: 「私の東南アジア研究と東洋文庫」 (My Research into Southeast Asia and Toyo Bunko)” given by Mr. Yoneo Ishii; 「東洋文庫の朝鮮史料と朝鮮近世財政史研究」 (Historical Documents on Korea in Toyo Bunko and Research into Early-modern History of Public Finance in Korea)” given by Mr. Yutaka Rokutanda; 「日本における山海経図－山海経絵と山海異物」 (*Shan Hai Jing* Illustrations in Japan: *Shan Hai Jing* Pictures and *Sankai Ibutsu* - Mythical Creatures of the Mountains and the Seas)” given by Mr. Takeshi Tochio. The lectures were held in an auditorium of the Mitsubishi Corporation in the Marunouchi district due to the reconstruction of Toyo Bunko building.

Various seminars and lectures were held 104 times in total, receiving a total of 950 participants. Toyo Bunko received three overseas researchers, and it also provided services for 32 researchers from Azerbaijan, China, France, Poland, Russia and Taiwan.

The Museum Department was established on July 1 and Executive Librarian Mr. Shiba was appointed as the Dept. Head while continuing to serve as the Executive Librarian. Mr. Motonori Makino was employed as full-time staff member in the department in September. With regard to exhibitions, an account “Allowance for museum production expense” was established as a specified asset by the Board of Directors meeting in June in order to spread the costs of opening the museum over multiple years. The opening of the museum is planned for October 2011.

Regarding Toyo Bunko's finances, the special contribution of 55 million yen per year from Mitsubishi Kin'yo-kai ended in the 2009 fiscal year and Toyo Bunko will receive annual donations of 60 million yen from Mitsubishi companies from the 2010 fiscal year. Therefore, it is expected that annual income and expenditures will be in the red for the next two years or so and Toyo Bunko will need to use the retained reserves. Toyo Bunko has been nominated as a specified public-service promotion corporation, but the renewal procedures for the status were delayed considerably due to various circumstances, so the renewal of the approval will not be completed until the 2010 fiscal year. This resulted in procedural difficulties for the relevant companies concerning their contributions to Toyo Bunko.

With respect to internal control, Toyo Bunko is continuing its work to develop necessary regulations. In addition to the establishment of regulations on asset management and their supplementary provisions, Toyo Bunko revised the following regulations: regulations on the official seals; regulations on organization management; regulations on the employment of research supporters; regulations on salaries; regulations on travel expenses; and regulations on Toyo Bunko Society of Friends. A subsidy system for English training was established for the improvement of the staff's English proficiency.

Regarding the transfer of status to a new regulations, Toyo Bunko is preparing its application with the aim of submitting the application in June 2012. Its procedures and other related information were reported to the Board of Directors meeting and the Council meeting in February.

The website was renewed and the content on the Research Department was significantly improved. Links to other organizations' databases were also increased so that the world's major databases on Asian studies literature can be accessed through the website of Toyo Bunko.

With regard to public relations, Toyo Bunko has been given opportunities

since 2007 to introduce its precious books every two months in a monthly magazine "The Monthly Mitsubishi" which is published by the Mitsubishi Public Affairs Committee, and 12 articles have been published as of the end of the 2009 fiscal year. This series is expected to continue in the 2010 fiscal year.

Important visitors to Toyo Bunko included a group led by the President of the Union Académique Internationale and Mr. Omiya, the President of Mitsubishi Heavy Industries, Ltd. and his wife Mrs. Omiya, among others. Regarding exhibitions, images of Toyo Bunko's collections have been exhibited since September at the Mitsubishi Center Digital Gallery of the Mitsubishi Public Affairs Committee which adjoins the Mitsubishi Ichigokan Museum in the Marunouchi district.

II Activities Report

1. Survey and Research

The Toyo Bunko has for over 80 years been continuously involved in systematically collecting source materials related to the historical and cultural development of the various regions of Asia.

The main purpose of this activity has been to provide scholars interested in Asian studies with a scientifically cataloged library of sources to assist them in their endeavors to better understand the field across all the academic disciplines.

In order to enhance the effectiveness of the above endeavors, a full revision of the Research Department was carried out in 2003, and involved: (1) a reorganization of the Asian studies program and proactive efforts to enlist younger scholars to participate in it. (2) incorporating the study of contemporary Asia based on interdisciplinary research programs (3) renewed efforts to expand international exposure to Asian studies research done in Japan through publication in Western languages. (4) promotion of opening research sources and information to the public and encouraging its joint utilization.

As a result, the Research Department was organizationally divided into two departments: Supradisciplinary Studies and Asian Regional Studies: the former aiming at interdisciplinary research on contemporary Asia, emphasizing the utilization of primary sources; the latter stressing important empirical research issues in the study of Asian history and culture along the more traditional academic disciplines.

<Asian Section>

A. Supradisciplinary Studies Group

Since the decade of the 1940s on, great changes have been experienced in all the regions of Asia, on coat tails of rapid economic growth, which in the 21st century has significantly raised the importance of Asia in the contemporary world order.

For example, after the revolution of 1949, in particular from its openness policies beginning in 1979, the rapid change and development that China has achieved no longer presents issues and problems of to be understood merely in an internal, domestic framework, but today requires integrated, multifa-

ceted empirical research on how the largest country in the world is influencing its neighbors on its East, Southeast and Central Asian borders.

One more example is the globalization and growing leadership role displayed by Islam in the contemporary world, phenomena which have become indispensable keys to objectively understanding reality in not only the Middle East and Central Asia, but also China and Southeast Asia.

These two issues facing contemporary Asia were chosen by the Research Department in the course of its reorganization as the subjects of the Supradisciplinary Studies to be viewed as spheres of influenced and subjected interdisciplinary joint research project incorporating all the humanities and social sciences, including political science and economics, history and religion, to be approached through the collection and analysis of source materials and viewed over the long term.

(1) Contemporary Chinese Studies

Interdisciplinary Research on China (Phase II)

China today continues to carry out wide-ranging political, economic and social reform, and in so doing influence both its neighbors in East Asia and the rest of the world.

The present project has put together a research system (consisting of teams dealing with source materials, politics, economy, and international relations and culture) aiming at understanding this dynamic situation.

The project will be reorganized along the lines of source collection centered around the holdings of the Toyo Bunko Library and their interdisciplinary study and wide public circulation.

In the process, links will be strengthened with such Japanese institutions and such international bodies as Academia Sinica, the Chinese Academy of the Social Sciences and Harvard-Yenching Institute and the projects research teams will continue to hold academic meetings and publish their results beginning next year.

[Research Activities]

- a) The Source Materials Group was involved in cataloging the Morrison Pamphlet Collection, which forms the nucleus of the Library's holdings regarding modern China, for the purpose of forming it into a systematic body of research. Also, preparations were begun to compile an online catalog of the Collection.

- b) The Political Group continued its full schedule of research meetings aiming at the clarification of the political issues facing contemporary China that would make it possible to sustain economic growth and social development.
- c) The Economics Group assembled the results of its joint research project on structural changes that have occurred in the contemporary Chinese economy into a volume entitled 『歴史的視野からみた現代中国経済』 (*The Contemporary Chinese Economy from a Historical Perspective*). Also, the work continues on a project to incorporate the data from the Lossing Buck Collection of pre-WWII rural surveys kept at Nanjing University into a valuable Library source for Toyo Bunko users.
- d) The International Relations and Culture Group has continued its research project on the relationship of social and cultural change to international relations, concluding its study of the Second Sino-Japanese War and proceeding into the decade of the 1950s. Activities concerning this new theme, which promises fresh insights into contemporary Japan, China and Taiwan, includes delving into both existing and newly discovered research, providing it to the Library and discussing it in research gatherings.
- e) All of the titles purchased during the project have been cataloged in conjunction with the Library's Documentation Center for China Studies. Concerning publication, the Political Group is planning a volume of research on China's complaint system to be released within the next two years.

(2) Contemporary Islamic Studies

Fundamental Supradisciplinary Research Approaches to Contemporary Islam: Collection of Primary Sources and Comparative Analysis Related to Parliamentarism and Constitutional Systems

This project is concerned with collecting, cataloguing and analyzing the virtually unstudied Arabic, Persian and Turkish documents relating to parliamentary bodies in the countries of the Middle East in order to examine and compare both parliamentary ideas that were conceived there and the resulting constitutional polities. Since the start of the new millennium, the project has also turned to the collection, cataloging and analysis of primary sources for similar comparison with the countries of Central Asia, hopefully resulting in comprehensive empirical consideration of the

historical role and contemporary significance of the nation-state in such Islamic regions as the Middle East and Central Asia.

In the process, the project hopes collect and catalogue Islamic sources for publication into databases and consolidation of a Japanese source material center.

[Research Activities]

The project's activities have been divided among four groups along the regional lines of Arab, Iran, Turkey and Central Asia. The three Middle Eastern groups continued their work done during the first phase of the project, between 2003 and 2008.

- a) The Arab Group continued the work began last year to utilize its *Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt* that it published in 2006 in reading and analyzing the available documentation.
- b) The Iran Group utilized the index (available in CD-ROM) that it compiled in 2005 to analyze the available documentation.
- c) The Turkey Group continued to collect sources and analyze the available documentation based on the themes contained in the collection of papers it published in 2006 entitled 『トルコにおける議会制の展開』 (*The Development of Turkish Parliamentary System*).
- d) The Central Asia Group collected and catalogued source materials its first year. Each group held three research conferences during the year, then convened a joint conference to compare the four regions and determine common terminology. Experts on parliamentarism and constitutional politics in Japan and China also asked to present reports.

B. Historical and Cultural Studies Group

One indispensable key to understanding the complex and dynamic nature of the development going on in contemporary Asia is a basic knowledge about the history and culture of the people involved. The Historical and Cultural Studies Group aims at a fundamental, long-term integrated view of the historical and cultural elements that remain closely linked to contemporary Asian affairs.

< East Asian Section >

(1) Premodern Chinese Studies

① Ancient Chinese Regional Studies: Analysis of *Shuijing Zhu* 水經注 (*Water Classic and Commentaries*) (Phase II)

The team, which is involved in the investigation the structure of ancient Chinese regional society, has chosen to study China's oldest work of geography dating back the sixth century AD and reexamine the existing commentaries on it. The reading of the commentaries will be done in conjunction with relevant information gleaned from the most recent archeological findings and Radosat mapping technology of the river basins in question, in the hope of coming to a better concrete understanding of their historical ecologies, social realities and how their social structures changed over time. The results of this investigation will appear in the forthcoming volumes of 『水經注疏訳註』 (*Translation with Notes on the Water Classic and Commentaries*) dealing with the Weishui 渭水 River (Part II) and the Luoshui 洛水 and Yishui 伊水 Rivers, which together form the regional center of the "Yellow River Civilization." This new regional history approach will hopefully take us beyond the mere bibliographical treatment of *Shuijing Zhu* and open up new perspectives on ancient China yet to be explored either within or without Japan.

[Research Activities]

- a) Biweekly research meetings continued reading the section on the Weishui River contained in Chen Qiaoyi's re-compilation of *Shuijing Zhu-shu* 水經注疏 (*Annotated Shuijing Zhu*; Jiangsu Guji Publishing), with the aim of releasing a second volume (Chen's Chapter 19) on the Weishui for the *Translation* in 2012.
- b) In preparation for the publication of volumes on the Luoshui and Yishui Rivers for the *Translation*, fieldwork and scholarly exchange were conducted in Taiwan and Sanxi Province, for the purpose of collecting gazetteers and archeological survey reports on the Luoshui, Yishui and Lower Weishui River basins. Of special note is the fieldwork and meetings conducted with researchers regarding excavations being conducted in Sanxi, enabling a better understanding of the present condition of ancient sites located in the river basins.

② Compilation and Digitalization of a Dictionary of Song Period Social and Economic Terms

The team is now involved in editing and revising the results of its 6-volume 『宋史食貨志譯註』 (*Treatise on the Economy and Finance of*

the Sung) published in 1961–2006 and Glossary of 『宋会要輯稿食貨篇 社会經濟用語集成』 (*The Terminology of Socio-Economy in the Section of The Song Digest*) in 2008 into a database to be published in print and on CD-ROM.

[Research Activities]

- a) The work is nearing completion on extracting the terminology from the sources and editing it into 54 categories under the 3 major headings of fiscal terms (23 categories), economic terms (10 categories) and social terms (11 categories). The writing of definitions continues and should be completed in time for publication come 2011.
- b) The glossary compilation project could not have begun without setting up a collection of source materials to glean for terms, sources including primary Song period materials, descriptions of tools and machinery, as well as secondary research, already and yet to be released. Concerning this last group of sources, Academia Sinica's revised compilation of complete works, *Xin-Hanjiqanwen Ziliaoqu* 新漢籍全文資料庫, was of great use; and the whole source collection phase of the project provided the Library with new materials on legal precedents (*panyu* 判語), administrative directives (*guanzen* 官箴), personal essays and memos (*biji* 筆記), gazeteers (*fanzhi* 方志), as well as private legal contracts from the Ming, Qin and Minquo periods.

③ Archeological Study Survey and Research of East Asian Cities (Phase III)

The comparative study, which began in 2004, of walled cities in the region centering upon Bohai 渤海. Two volumes of research have been published to date 『東アジアの都城と渤海』 (*The Capital Castles of East Asia and Bohai*) in 2005 and Volume II of 『渤海都城の考古学的研究』 (*Archeological Studies on the Capital Castles of Bo'hai*) in 2007. However, due to the inordinately large number of artifacts unearthed from the Bohai Shangjing Longquan-fu 渤海上京龍泉府 Site (Dongjing 東京, Castle), the task of cataloging them will continue during 2008.

[Research Activities]

- a) An investigation was made of the content of the survey report concerning the excavation of Balian-Cheng 八連城, located in Hunchun, Jilin Province and thought to be Bohai's eastern capital of Dongjing Longyuan-fu 東京龍原府.

- b) Photographs were taken of Bohai Buddhist sculpture in China and prepared as reference materials.

④ Evolution of “Civil Law” Codes in Premodern China

This project aims at analyzing clarifying such “civil law”-related affairs as household registration, land holding and money lending. Within the research to date on the period-by-period legal history of China, one characteristic feature over the past 20 years has been verifying the efficacy and strict implementation of legal codes from such sources as the many public notices, local ordinances and contractual documents which have been discovered and made available in China. The present research team, which has been pursuing such lines of research over the past 5 years, has come to the conclusion that civil-related legal codes not only reflect social conditions, but also changes in those conditions as existing legal codes become obsolete over time, revealing one important aspect of the long-term evolution of Han society.

[Research Activities]

- a) Local public statutes and ordinances from the Song, Yuan, Ming and Qin periods were collected.
- b) Scheduled research meetings (including outside experts from Japan and abroad) were held to catalog, read and discuss the collected sources.

(2) Modern Chinese Studies

Japanese Surveys in China During the First Half of the 20th Century

The object of this project is to continue the work began by the former Committee for Research on Modern China to collect source materials related to fieldwork conducted in mainly northern China by Japanese research institutes during the 1910s, 20s, 30s and 40s. In addition to the existing Japanese language sources, related Chinese language sources will be examined, and while continuing to stress northern China, central and southern China will be included in survey area in order to discover any regional differences. By utilizing the Japanese and Chinese sources in tandem, and following the lead of recent research results, it is hoped that a new way of organizing the materials will be discovered leading to an overall image of Chinese society during the first half of the last century. Moreover, while continuing the collection of sources related to fieldwork done in China by Japanese research institutes before and during the

Second Sino-Japanese War, efforts will be made to encourage more joint study with research institutes based in China. Already cooperation with such institutes as the Chinese Academy of Social Sciences, Shanghai Municipal Archives, Qingdao Academy of Social Sciences and Shandong Academy of Social Sciences has resulted in the discovery of sources indispensable to filling the gaps that exist in modern Chinese studies both in Japan and elsewhere. With the addition of new members to the project team, joint research activities will be extended such institutes of higher learning as Beijing University, Nankai University, Sanxi University and Nanjing University, providing the Toyo Bunko with a steady stream of new sources related modern and contemporary China to analyze, catalogue and introduce to the world.

[Research Activities]

- a) The work continued collecting Chinese sources related to Japan's administration of China.
- b) The search for source materials concerning survey institutions yet to be studied, including Japanese consulates and Chambers of Commerce, was conducted not only in the Library, but also at the Diplomatic Record Office of the Ministry of Foreign Affairs, the Policy Research Institute of the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries, and the National Institute for Defense Studies' Library.
- c) Partial results of these activities were reported in the periodical 『近代中国研究彙報』 (*Report of Modern Chinese Studies*), No. 32.

(3) Northeastern Asian Studies

① Study of Source Materials Preserved in Japan on Late Premodern Korea (Phase II)

Completion of the work which began in 2004 to survey records from the period in question held at Kyoto University, Tenri University (Imanishi Collection), other organizations and personal collections and compile them into a catalogue with explanatory notes. Prior to the start of the present project, a comprehensive survey of classical Chinese works published in Korea called "Chosen-Bon" was already in progress and had just about clarified their diffusion throughout Japan. However, the whereabouts of records from the period, referred to as *seisatsu* 成冊, regional and private sector sources, mainly in the form of ledgers, were virtually unknown. Phase I of the present project was successful in finding such

sources that are no longer extant in Korea and analyzing their content. The completion of Phase II will result in the existence of such sources throughout Japan.

[Research Activities]

- a) Preparation continued for the publication of Volume II of 『日本所在朝鮮近世記録類解題』 (*Catalogue of Late Premodern Korean Sources in Japan*).
- b) The investigation continued into what the analysis of the target sources has to say about the whole genre of records (*kiroku* 記録), from diaries to tax ledgers, for the late premodern period in general.
- c) The investigation continued into the conditions surrounding the transmission of the target sources from Korea to Japan.

② Manchu Archival Sources (Phase II)

It is now clear that use of Manchurian as the Qing Dynasties primary official language extended throughout its entire history. Although from the reign of Emperor Qianlong (1736–1795) bannermen residing in Beijing came to use Chinese in everyday life, the use of Manchurian in the written language continued up until the establishment of the Republic of China. At present, about one-half of the 10 million sources material titles held at the First Historical Archives of China in Beijing were written in Manchurian (or both Manchurian and Chinese). This proves that Manchurian was indispensable to system by which document were transmitted in Qing China. From 1644, when the Manchus first entered China proper through the early years of the Qing Dynasty, much of both documentation and books issued both at the center, at the banners and fiefs on the frontier, and in foreign relations were written in Manchurian. The objective of the present project is to examine comprehensively Qing Dynasty bibliographs written or printed, mainly during its earlier eras, in Manchurian.

[Research Activities]

- a) Research will be conducted on documents related to the early Qing period “Imperial Historio-graphical Office” (Neiguoshiyuan 内国史院). The work will continue on the Chongde 崇德 era, following publication in 2009 of the fifth year of Tiancong 天聰.
- b) Progress was made in the reading and analysis of the Tiancong and Chongde era Manchurian documents from the “Imperial Historiographical Office” collection held at the First Historical Archives of China.

- c) Research was also conducted on archives related to the Bordered Red Banner (Xianghongqi 鑲紅旗).

③ Structural Historical Analysis of East and Northeast Asia During the Qing Period (Phase II)

Within the state projects that were rapidly pushed forward in China in preparation for the Beijing Olympic Games, a number of existing internal political, economic, ethnic and cultural problems came to the surface (beginning with the Tibetan issue) that promised to influence daily life in throughout Central and Northern Asia. In this respect, the great plan envisioned by the Qing Dynasty for unifying and integrating the regional realms of inner China and those on the periphery is much alive and well in China today, as well as the political, economic, ethnic and cultural problems that accompany such a plan. This project has been concerned with studying and analyzing the state structure and international relations engineered by the Qing Dynasty in its efforts to unify China's inner and peripheral realms. Together with compiling the research results into an English language collection of papers, the project will aim at building a research system able to understand comprehensively the total historical structure of East and Northern Asia during the Qing period, and for that purpose systematically collect, catalogue and digitalize heretofore undisturbed documentary archives indispensable to analyzing the problems at hand and those that promise to arise in the future.

[Research Activities]

- a) The editing work continued on the English monograph, *The Historical Structure of Eastern and Northern Asia in the Qing Dynasty Era*.
- b) The search continued for archival materials in libraries, archives and research institutes abroad, in a manner transcending conventional regional and historical boundaries.

(4) Japanese Studies

Bibliography for the Rare Archives in the Iwasaki Collection (Phase II)

All of the rich sources dealing with Japanese culture, literature and language containing in the Library's Iwasaki Collection have yet to be bibliographically surveyed. Upon the publication of a five-volume bibliographic introduction to the old manuscripts and printings from the Muro-

machi period and before was completed in 2006, the work turned to the holdings that were published during the Tokugawa period, preparing basic research on them to be published in the future.

[Research Activities]

An overall image was gained of the approximately 100 items dealing mainly with the *Manyoshu* formerly belonging to Kimura Seiji, but now a part of the Library's Iwasaki Collection, enabling the publication of Volume VI of 『岩崎文庫貴重書書誌解題』 (*Annotated Bibliography of Rare Titles in the Iwasaki Collection*).

<Inner Asian Section>

(1) Central Asian Studies

① The Paleographs of St. Petersburg: Uighur Documents

It was in 2002 that a provisional catalogue (serial numbers) of Uighur and Sogd language documents found in the Library's copy the microfilm held by the St. Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies (present, St. Petersburg Institute of Oriental Manuscripts) of the Russian Academy of Sciences along with additional data discovered in a survey of the Institute. Then the work continued to digitalize the data until completion last year. An almost complete revised version of the original catalogue in digital form is now ready for publication. However, due to limitations within the contract concluded between the Toyo Bunko and the Institute of Oriental Studies, care must be taken in decided exactly how the catalogue will be released to the world. For example, there is the possibility of including a listing of Uighur bibliographs held by the British Library, including some that have yet to appear on the Internet. The catalogue will also include chapters on the related bibliographical research to date.

[Research Activities]

- a) Bibliographical research was begun based on catalogs accumulated based on the research done to date.
- b) Classification of the form of mainly old Uighur documents was carried out.
- c) Joint research was conducted with the Chinese Document Group (see 2-(1)-③) on *hebi* 合璧 documents of alternating Chinese and Uighur.
- d) The reading, analysis and research of selected old Uighur documents continued.

② Politics and Islam in Modern and Contemporary Central Eurasia

It was on the occasion of the breakup of the Soviet Union in 1991 that great opportunities were opened in the historical study of modern and contemporary Central Eurasia. A wide variety of source materials to which access had theretofore been denied were opened to the public and joint research with local scholars, as well as fieldwork by foreign researchers became possible. Under such promising circumstances the present project has been organized with the following two issues in mind. The first is while the role of Islam in the region's political, social and cultural development since the eighth century cannot be ignored, the "Islamic question" was unduly underplayed under the atheistic ideology perpetuated under the Soviet regime. Now is the time to reexamine Central Eurasian history in order to overcome such shortcomings. Secondly, from the beginning of Perestroika on war on, there was a remarkable resurgence staged by Islam in region, with the appearance of extremist groups aiming at the establishment of Islamic states clashing with secularist regimes. The question therefore arises as to how we are to consider Islam resurgence in the context of Central Eurasian history. Indispensable to answering such a query to take an empirical look at the interrelationship between Islam and politics throughout the region's modern and contemporary periods.

[Research Activities]

- a) Overseas Source Material Collection: Experts were commissioned and dispatched to libraries, research institutes, as well as private individuals and concerns, in such location as Tashkent (Uzbekistan), Kazan and St. Petersburg.
- b) Source Material Cataloging and Analysis: Work progressed on a catalog of the collected materials, in order to allow the widest range of digital use, especially in the periodical collection.
- c) Promotion of Research: Research meetings were held concerning the above-mentioned themes, utilizing both the newly collected sources and the rich holdings already available in the Library.
- d) The results of the research efforts to date were published in the TBRL series under the title *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20th Centuries*.

③ Database Compilation of a Catalogue for the Microfilm of Chinese Documents Unearthed in Continental Asia Held by the Russian Science Academy's St. Petersburg Asian Studies Institute Archives

It was in 2002 that the Toyo Bunko became the initial recipient of this 363-reel, 250,000 frame microfilm collection containing Uighur-Sogd, Khotan-Saka, Chaghatai-Turkish, Mongolian, Chinese, Sanskrit, Arabic, Persian, Manchurian, Tibetan and Jurchen documents dating from the 4–5th to the 15th century. The compilation of a catalog of these documents into database form has been in demand throughout the world for a long time.

The present project had been organized to partially fill that demand with a digital catalogue pertaining to the Chinese documents contained in the collection.

[Research Activities]

- a) The work continued on the compilation of a catalog for 30 reels (11,000 frames) of Uighur-Sogd documents on microfilm (Reels 2, 17–44, 47).
- b) Research was conducted on the documentary forms and recording styles found in Chinese documents extracted from 51 reels of the microfilm.
- c) The above-mentioned research activities were furthered through the periodic gatherings of the Excavated Paleography of Inner Asia Research Society.

(2) Tibetan Studies

Philological Research on Tibetan Canonical Works Omitted from the Tripitika (Phase II)

This new phase of the project will involve building a comprehensive Library collection of sources related to all areas of history, culture and religion by collected and storing newly discovered Tibetan manuscripts. Then a catalog will be compiled and a database published. The work will then be directed towards editing, translating, annotating and researching a Library collection including the paleographs found at Dunhuang, the Kawaguchi Collection and the above-mentioned manuscripts.

[Research Activities]

- a) Source Material Collection: Progress was made in the collection of facsimiles of 10 through 13th century Tibetan manuscripts recently discovered in China. An electronic edition of Tibetan Tripitika and non-Tripitika documents was purchased in preparation for research.

- b) The manuscripts were analyzed and catalogued.
- c) The following research themes were studied with the cooperation of Tibetan scholars.
 1. Collation of Manuscripts: Many old Tibetan documents have been copied in a handwritten style that is very difficult for general scholars to decipher. With the help of Tibetan collaborators, these documents were successfully compiled into the Tibetan print text database.
 2. Bibliographic analysis and research of the database was conducted and preparations were made to publish the results in a new research series focusing on the manuscripts.
 3. Progress was made in the editing of an annotated translation of the chapter on the bKa'gdams pa in Thu'u bkwan's Grub mtha' for the next volume of the series 『西藏仏教宗義研究』 (*A Study of the Grub mtha' of Tibetan Buddhism*) dealing with research in Tibetan Buddhist doxology.
 4. Research was conducted on Tibetan documents unearthed in Dunhuang under the leadership of Takeuchi Tsuguhito, in preparation for a new Dunhuang document research series sequel to 『スタイン蒐集チベット語文献解題目録』 (*A Catalogue of the Tibetan Manuscripts Collected by Sir Aurel Stein*).

< India and Southeast Asian Section >

(1) Indian Studies

Indian Epigraphy: Collection and Research

In contrast to a past dearth of interest among Japanese Indologists in the study of epigraphy, in recent years a younger generation of scholars have risen to occasion, including Ishikawa Kan and Ohta Nobuhiro in the area of Dravidian languages and Mita Masahiko and Furui Ryusuke in Aryan languages. Such a lack of tradition has resulted in concomitant lack of interest in collecting texts and research literature on the subject, despite its indispensability as the primary source of information on the "paperless" ages of ancient and medieval Indian history. On the other hand, in India itself, the study of epigraphy is also being threatened by lagging publication of texts and waning legions of younger scholars. Needless to say, the number of Indian epigraphy experts worldwide is extremely small. Given this unsettling state of affairs, Japanese research institutes have begun col-

lecting Indian inscriptions (including unpublished texts) with the intent of both making them available internationally and also enticing new recruits to the waning fields of ancient and medieval Indian history.

[Research Activities]

- a) Progress was made in the collection of epigraphy collections and research periodicals, as well as post-Independence publications (in particular those of local archeological bureaus), not yet held by the Library.
- b) In addition to the continuation of individual research by team members, a number of themes were set for joint study with collaborating experts.
- c) Research results to date were published in a volume entitled *Sources on the Mughal History*.

(2) Southeast Asian Studies

Historiography Regarding Modern and Contemporary Southeast Asia

From as early as the late Meiji period, Japan became closely involved with the region, culminating in military occupation during the Pacific War. Then, after the War, Japan gradually became involved in the economic affairs of the region. Over the past 40 years or so, the field of Southeast Asian studies in Japan has developed by leaps and bounds; however, the research itself actually dates back to the Taisho Era scholars who became interested in the history of the “South Seas” as a way of understanding East-West contact in East Asia, resulting in a “South Sea boom” and the release of publications related to the economy of the region. Then during the Pacific War many publication related to the region appeared, including translated materials, but with the exception of a few empirical studies, most of these publications were as “Southern trivia” and given little or no scientific credibility. Nevertheless, they are not only valuable sources for understanding Japanese perceptions of the region, but valuable ethnographic observations of Southeast Asian society at the time. The present project will not only continue to view Japan’s involvement in Southeast Asian affairs, but also examine the role played by Japanese in the social integration of the region, in order to better understand the social characteristics of a region which during modern times was home to a diverse multi-ethnic population including Japanese, Chinese, Indians, Arabs and Europeans.

[Research Activities]

- a) Work continued on the collection and analysis of source materials related to the region's port cities during their eras of modernization.
- b) Progress was made in the setting of discussion points through research meetings, bibliographic surveys and fieldwork.

< West Asian Section >

West Asian Studies

Contractual Documents in the Islamic Sphere (Phase II)

The practice of religious donation known as *waqf* led not only to the construction of religious institutions in both the urban and rural areas of the region, but also formed an economic base linking the common people to the rich and powerful. This project will be involved in collecting both *waqf*-related historical accounts, such as treatise on jurisprudence, chronicles and gazetteers, and related documentary sources, such as actual donation records and investigative reports, all leading to a clarification of the situation on the ground in the various areas of the region and how the institution changed over time.

[Research Activities]

- a) Research was conducted in the study of the Library's collection of Moroccan vellum contracts and in earnest research was begun on the institution known as *waqf*.
- b) The research was furthered by such activities as source material collection, organization of research meetings and fieldwork.

C. Source Materials Studies Group

<Source Materials Section >

East Asian Studies

Research on East Asian Source Materials

The objectives are to search for bibliographic sources held in China, Taiwan, Hong Kong and the Chinese communities of Southeast Asia and to establish information exchange relations and personal contact with archival institutions in those areas.

[Research Activities]

- a) The source materials exchange agreement concluded with the Institute of History and Philology of Academia Sinica in Taipei has resulted in the acquisition of 20,000 frames of microfilm containing the Institute's complete works of China full text database.
- b) As part of the scholarly exchange program with Nanjing University, Professors Yu Weimin and Sun Rongrong were invited to Japan.
- c) The research results obtained to date were published in a volume entitled 『中国近世文芸論—農村祭祀から都市芸能へ』 (*Late Pre-modern Chinese Literature: From Rural Festivals to Urban Entertainment*).

D. Seminars and Lectures

No./Month	Apr	May	Jun	July	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Total
Meetings	8	9	7	9	3	7	10	14	8	9	11	9	104
Attendance	57	91	59	83	19	64	80	104	65	104	88	136	950

2. Source Material Collection and Cataloging

A. Purchases

Progress was made in acquiring the primary source materials necessary for furthering supradisciplinary and regional Asian studies.

Field	Chinese/Japanese (Material other than book)	Asian Languages Chinese/Japanese (Material other than book)	Total
Supradisciplinary: China	1,364	4	1,368
Supradisciplinary: Islam	4	1,045 (17)	1,049 (17)
East Asia	275	5	280
Inner Asia	35 (7)	84	119 (7)
India-Southeast Asia	0	43 (13)	43
West Asia	0	533	533
Shared	1,265 (2)	236	1,501 (2)
Total	2,943 (9)	1,950 (30)	4,893 (9)

*Includes unbound and unprinted titles, where microfilm is counted at one reel per volume and CDs at one disc per volume.

B. Exchange of Publications

Type	Received			Donated		
	China/Japan	Western	Total	China/Japan	Western	Total
Monograph	850	114	964	1,140	1,000	2,140
Periodical	2,641	672	3,313	3,000	907	3,907
Total	3,491	786	4,277	4,140	1,907	6,047

C. Database Compilation

Western Language	732	Turkish	189
Chinese-Japanese	3,243	SE Asian Language	45
Cyrillic	46	Periodicals	4,862
Persian	156		
Arabic	267		
		Total	9,540

D. Preservation and Cataloging

Between 1 April 2009 and 31 March 2010, the following tasks were completed.

- Microfilm deterioration prevention: 2,660 items
- Microfilm cataloging: 1,037 items.

3. Research Publications

The results of analysis and research of primary sources conducted by the Research Department appear in catalogs, journals and monograph series published in both Japanese and Western languages for dissemination to members of the Asian studies community active in Japan, Asia and the West.

A. Periodicals to be edited and released during 2009

- (1) 『東洋文庫和文紀要』 (東洋学報)
(*The Journal of the Research Department of the Toyo Bunko*)
Vol. 91 Nos. 1-4 A5 Size Journal Released
- (2) 『東洋文庫欧文紀要』

One B5 size volume Released

- (6) 『中国近世文芸論 - 農村祭祀から都市芸能へ』
(*Late Premodern Chinese Literature: From Rural Festivals to Urban Entertainment*)

One A5 size volume Released

- (7) 『歴史的視野から見た現代中国経済』
(*The Contemporary Chinese Economy from a Historical Perspective*)

One A5 size volume Released

※Note: Nos. 6 and 7 were joint projects with outside publishing companies and were printed using Research Department funds.

4. Dissemination of Information

A. Research Information

(1) Asian Studies Lecture Series

Six annual lectures divided into spring and fall series.

(2) Special Lectures

Approximately five lectures were delivered by world renown scholars visiting Japan.

(3) Panel Discussions

Held once during 2009 on a specialized research topic proposed by a keynote paper.

(4) Public Exhibitions

Beginning in 2011, monthly meetings will be held to determine what will be exhibited in the newly completed Museum facility.

(5) Reference Information Service

Publication of 『東洋文庫年報』 (*Toyo Bunko Yearbook*) 2008.

B. Database Availability

The number of online Japanese and English language requests for access to information about Toyo Bunko library holdings and other source materials between 4 April 2009 and 31 March 2010 totalled 1,159,411. (See the survey entitled 「財団法人東洋文庫データベース利用調査」 (Survey Report on Toyo Bunko Foundation Database Utilization) for a more detailed breakdown of that figure.) In addition, links to the databases of other institutions were enhanced in order to provide visitors to the Toyo Bunko website direct access to information about important Asian studies sources elsewhere in Japan and throughout the world.

5. Scientific Information Availability

In addition to its role as an Asian studies research institute, the Toyo Bunko also acts as a liaison for scholars and organizations in Japan and abroad.

A. Reading Room Services

No./Month	Apr	May	Jun	July	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Total
Users	164	121	186	207	193	148	155	129	145	137	131	181	1,897
Title Requests	3,349	1,568	2,274	3,039	2,722	1,847	2,332	2,269	2,290	2,079	1,952	2,391	28,112
Reference Service	44	33	50	56	52	40	42	35	39	37	36	49	513

B. Photocopying Services

(1) Microfilm and Paper Developing

Category	Service Request
Amount	198

(2) Electronic Photocopying

Category	Service request	Number of Copies
Amount	820	47,505

C. Reprinting and Expanded Publication

『東洋学報』(<i>The Journal of the Research Department of the Toyo Bunko</i>) Vol. 90, No. 4	330
『東洋学報』(<i>The Journal of the Research Department of the Toyo Bunko</i>) Vol. 91, No. 1-3	330/each
<i>Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko</i> Vol.66	50
『前近代中国の法と社会—成果と課題—』 (<i>Law and Society in Premodern China: Research Results and Pending Issue</i>)	50
TBRL10 <i>The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the Nineteenth and Twentieth Centuries</i>	50
『敦煌・吐魯番等出土漢文書の新研究』 (<i>New Perspectives on Documents Unearthed in Dunhuang and Turfan</i>)	50
TBRL11 <i>Development of Parliamentarism in the Modern Islamic World</i>	50
『オスマン朝と中近世日本における文書史料の比較研究/ <i>Erken Modern Osmali ve Japonya'da Devlet, Toplum ve Belgeler</i> 』	30
『内国史院檔 天聰八年』 (<i>Neiguoshiyuandang : The Early Manchu Archives of Imperial Historiographical office ; the Eighth Year of Tiancong, 1634</i>)	30
『戦前期華北実態調査の目録と解題』 (<i>Annotated Catalogue of Japanese Fieldwork in North China : 1910-1940s</i>)	30
『近代中国研究叢報』(<i>Report of Modern Chinese Studies</i>) No.31	50
『東洋文庫書報』(<i>Philological Report from the Toyo Bunko</i>) No. 40	20
『東洋文庫年報』(<i>Toyo Bunko Yearbook</i>) 2008	10

D. Reference Information Services

Data on English language publications was periodically updated.

E. Public Relations

Regular updating of the Toyo Bunko website.

F. Scholarly Exchange

(1) Long Term Fellowships

① Foreign Scholars

Yanaga Nobumi

(Tokyo Centre Head, Ecole française d'Extrême-Orient)

Specialty: Japanese Buddhism

Term: 1 Sept 2008–31 Aug 2009 (To be extended)

Guo Runtao

(Professor, Department of History, Peking University; JSPS Long-term Invitation Fellow)

Specialty: A Study on the Relationship between Local Government and Rural Society in the Ming and Qing Periods

Term: 1 Apr 2009–31 Jan 2010

Advisor: Kishimoto Mio

Wu Zhen

(Lecturer, Department of Chinese Literature, Faculty of Letters, Nankai University; JSPS Postdoctoral Fellow)

Specialty: A Comparative Study on Ritual Theatres between Japan and China—An Analysis from Religion

Term: 25 Nov 2009–24 Nov 2011

Advisor: Tanaka Issei

② 2009 Research Fellows of the Japan Society for the Promotion of Science (Post-Doctoral)

Yoshida Tateichiro (Keio University)

Specialty: Interdisciplinary Examination of International Trade in Animal Husbandry Commodities in Modern China: Egg, Bone and Leather Products

Term: 3 years (2007–2009)

[Academic Advisor, Kubo Toru]

Hashizume Retsu (The University of Tokyo)

Specialty: Authority Exercised by Caliphs After Fall from Power: A Reexamination from the Viewpoint of Military Regimes, the Abbasids and Ulama

Term: 3 years (2008–2010)

[Academic Advisor, Sato Tsugitaka]

Sawai Kazuaki (The University of Tokyo)

Specialty: Istanbul and Resource Distribution in the 16 and 17th Century Ottoman Empire

Term: 3 years (2009–2011)
[Academic Advisor: Hayashi Kayoko]

Suzuki Hideaki (The University of Tokyo)
Specialty: “Modernity” in the World of the Indian Ocean: The Case of
the Slave Trade

Term: 3 years (2009–2011)
[Academic Advisor: Shitomi Yuzo]

Kimura Satoru (The University of Tokyo)
Specialty: Views of Islamic Monarchical Regimes and Political Order in
Modern Central Asia

Term: 3 years (2009–2011)
[Academic Advisor: Shinmen Yasushi]

(2) Funding to Foreign Scholars

KHALILLI, Faris Azerbaijan National Museum

And 29 other scholars.

6. Area Studies Program

A. Documentation Center for Islamic Area Studies

This research effort, aimed at historiography of the Islamic World written in local languages, is involved in building research foundations through the systemization of bibliographic information, while at the same time setting up an environment from the systematic collection and use of source materials.

The objective is to portray a stratified image of the Islamic World by mapping collections of historiographical sources that describe specific regional societies and incorporating these maps into systematic, bird's eye view bodies of research.

[Research Activities]

- a) Systematic collection of local language sources was conducted.
- b) The following activities were conducted for the development of bibliographical databases and network for librarians.

1. The development and release of tools for cataloging sources in Arabic script.
 2. The meeting for exchange of opinions by the librarians in the major archives of Arabic script sources continued to be held.
- c) Research continued on comparative studies by utilizing historical documents. Specifically,
1. Research Group for Ottoman historical sources (Akiba Jun)
 2. Sharia and Modernization: research group of Ottoman Civil Code (Okawara Tomoki)
 3. Participation in the Cairo International Conference (co-organized by "Islamic Area Studies" Program and Cairo University, Faculty of Arts in Dec. 2009) with the session <Islamic Judicial Practices: Globalization and Localities of the Law>.
 4. The Study Group for Cataloging Kitabs in Southeast Asia co-organized by SIAS (IAS Center at Sophia University) Group 2 continued to work on catalog-making of Southasian kitabs and the establishment of cataloging methods.

B. Documentation Center for China Studies

Promotion of Collection and Utilization of Contemporary Chinese Source Materials and the Furtherance of Bibliographical Research

Exchange of information for website and databases regarding Chinese studies. Organizing international symposia and small scale workshops among researchers, libralian and archivists in Japan and abroad for the purpose of disseminated information on a wider scale. Continued sponsorship of joint research conferences based on the holdings of the Toyo Bunko Library and newly collected primary materials. Continued sponsorship of seminars promoting historiographical study of the sources necessary for studying contemporary history outside the realm of databases and written materials.

[Research Activities]

- a) The digital library system has been improved through the technical test for opening. And publication through the digital library system about the collection of the Committee for Research on Modern China was discussed.

- b) Progress was made on inputting bibliographic data into NII-Webcat.
- c) The collection of source materials on contemporary China continued.

7. Contract Research

The Development of Joint Research Institutions in Human Studies and Social Sciences

The purpose of the commission is to deepen and improve the understanding of Islam in the contemporary globalized world through developments going on in network-based joint Islamic regional studies.

The implementation of joint research projects will promote the participation of a wide-range of interested people both in Japan and abroad through an open, "call for papers" network, and also build a strong operations system of research support. The Toyo Bunko is dedicated to play a role as an Islamic regional studies source material center involved in the promotion of collection and utilization of sources and implementing innovations in Islamic bibliography and philology.

[Research Activities]

- a) Promotion of improvements of TBIAS (Documentation Center for Islamic Area Studies) as an important source material center.
- b) Preparations were continued to publish research results both in Japanese and English.
- c) Strengthening of Islamic Area Studies project and expansion of the IAS center by advertising for research group. Specifically,
 1. A solicited research topic. The Pervasion of Persian bookkeeping in the Islamic world: case studies on the Ottoman accounting registers."(lead by Takamatsu Yoichi). For the last two years this team has made progress in the virtually unknown field of Ottoman period bookkeeping, both from a historiographical and technological viewpoint.
 2. Work continued on the "Bibliographical Database of Middle East in Japan: retroactive registration".

III Accounting Report

Balance Sheet of General Account

As of March 31, 2010

(Unit: Yen)

Account Title		Current FY	Previous FY	Increase/Decrease
I	ASSETS			
1.	Current Assets			
	Cash and deposits	2,321,342	2,478,478	△ 157,136
	Accounts receivable	6,381,639	12,135,286	△ 5,753,627
	Goods	3,108,768	3,460,223	△ 351,455
	Prepaid expenses	2,167,979	2,864,451	△ 696,472
	Total current assets	13,979,748	20,938,438	△ 6,958,690
2.	Fixed Assets			
(1)	Basic assets			
	Library materials	1,041,708,012	1,041,708,012	0
	Land	110,494	110,494	0
	Guarantee money	50,000	50,000	0
	Investment securities	2,842,500,000	2,842,419,502	80,498
	Deposits	115,322	115,322	0
	Total basic assets	3,884,483,828	3,884,403,330	80,498
(2)	Specific assets			
	Pension assets	39,009,470	31,708,144	7,301,326
	Allowance for repairs of buildings and equipment	86,440,784	63,276,068	23,164,716
	Allowance for museum production expense	15,000,000	0	15,000,000
	Total specific assets	140,450,254	94,984,212	45,466,042
(3)	Other fixed assets			
	Buildings	274,235,919	286,633,635	△ 12,397,756
	Structures	806,801	1,075,735	△ 268,934
	Fixtures and fittings	18,174,336	23,359,960	△ 5,185,624
	Library materials	180,927,050	153,859,313	27,067,737
	Softwares	8,052,813	4,204,302	3,848,511
	Telephone rights	364,000	364,000	0
	Guarantee money	2,215,440	2,215,440	0
	Long-term prepaid expenses	1,358,727	1,817,492	△ 458,765
	Reserve for operation adjustments	97,455,950	82,413,540	15,042,410
	Total other fixed assets	583,591,036	555,943,457	27,647,579
	Total fixed assets	4,608,525,118	4,535,330,999	73,194,119
	Total Assets	4,622,504,866	4,556,269,437	66,235,429
II	LIABILITIES			
1.	Current Liabilities			
	Accounts payable	1,505,690	2,977,285	△ 1,471,595
	Deposits received	1,167,012	1,252,112	△ 85,100
	Allowance for bonuses	7,155,998	7,559,536	△ 403,538
	Total current liabilities	9,828,700	11,788,933	△ 1,960,233
2.	Fixed Liabilities			
	Allowance for retirement benefits	39,009,470	31,708,144	7,301,326
	Total fixed liabilities	39,009,470	31,708,144	7,301,326
	Total liabilities	48,838,170	43,497,077	5,341,093
III	NET WORTH			
1.	Specified Net Worth			
	Donations, etc.	202,110,494	202,110,494	0
	Total specified net worth	202,110,494	202,110,494	0
	(of which the amount appropriated to basic assets)	(202,110,494)	(202,110,494)	(0)
2.	General Net Worth			
		4,371,556,202	4,310,661,866	60,894,336
	(of which the amount appropriated to basic assets)	(3,682,373,334)	(3,682,292,836)	(80,438)
	(of which the amount appropriated to specific assets)	(101,440,784)	(63,276,068)	(38,164,716)
	Total Net Worth	4,573,666,696	4,512,772,360	60,894,336
	Total Liabilities and Net Worth	4,622,504,866	4,556,269,437	66,235,429

The Increase and Decrease of General Account's Net Worth
from April 1, 2009 to March 31, 2010

(Unit: Yen)

Account Title	Current FY	Previous FY	Increase/Decrease
I GENERAL NET WORTH INCREASE/DECREASE			
1. Current Increase/Decrease			
(1) Current revenues			
Financial revenue from basic assets	85,738,335	81,600,328	4,138,007
Financial revenue from specific assets	249,625	89,539	160,086
Donations received	101,040,000	95,400,000	5,640,000
Donations by Support Society	46,540,000	40,200,000	6,340,000
Other donations	54,500,000	55,200,000	△ 700,000
Membership fee received	390,500	462,500	△ 72,000
Project fee received	20,000,000	25,400,000	△ 5,400,000
Contract research payment	12,000,000	12,000,000	0
Operating revenue	7,838,211	8,847,504	△ 1,009,293
Grants, etc.	110,000,000	112,160,000	△ 2,160,000
Other revenue	3,442,076	566,985	2,875,091
Total current revenues	340,698,747	336,526,856	4,171,891
(2) Current expenditures			
Operating expenses	231,261,888	230,038,968	1,222,920
Library and research program	29,316,857	32,014,932	△ 2,698,075
Acquisition	14,675,224	15,471,370	△ 796,146
Publishing	23,456,128	29,518,223	△ 6,062,095
Research dissemination	16,232,185	13,900,993	2,331,192
Academic information service	8,081,856	10,427,213	△ 2,345,357
Regional study program	13,080,084	12,923,941	156,143
Contract research expense	9,243,325	10,530,318	△ 1,286,993
Payroll	82,430,589	66,584,968	15,845,621
Directors' compensation	2,412,000	0	2,412,000
Wages	62,924,840	54,757,558	8,167,282
Provision for bonuses	4,384,585	3,618,128	766,457
Pension expense	4,209,692	1,936,304	2,273,388
Welfare expense	8,499,472	6,272,978	2,226,494
Office expenses	34,745,640	38,667,010	△ 3,921,370
Equipment repairs and maintenance	3,085,874	3,047,237	38,637
Utilities	4,662,664	6,163,368	△ 1,500,704
Rent	360,213	76,293	283,920
Outsourcing cost	1,857,757	1,882,669	△ 24,912
Depreciation expense	16,904,289	20,932,990	△ 4,028,701
Other expense	7,874,843	6,564,453	1,310,390
Administrative expenses	48,851,944	66,655,695	△ 17,803,751
Payroll	42,133,752	54,948,937	△ 12,815,185
Directors' compensation	8,308,000	10,720,000	△ 2,412,000
Wages	23,167,169	30,388,311	△ 7,221,142
Provision for bonuses	2,771,413	3,941,408	△ 1,169,995
Pension expense	3,091,634	3,821,352	△ 729,718
Welfare expense	4,795,536	6,077,866	△ 1,282,330
Office expenses	6,718,192	11,706,758	△ 4,988,566
Equipment repairs and maintenance	62,977	477,367	△ 414,390
Utilities	95,156	1,128,535	△ 1,033,379
Rewards	1,781,010	1,845,420	△ 64,410
Depreciation expense	3,676,847	5,168,732	△ 1,491,885
Other expense	1,102,202	3,086,704	△ 1,984,502
Total current expenditures	280,113,832	296,694,663	△ 16,580,831
Current increase/decrease for this term	60,584,915	39,832,193	20,752,722
2. Nonrecurring Increase/Decrease			
(1) Nonrecurring revenues			
Gain from receiving fixed assets	394,383	17,296,191	△ 16,901,808
Total nonrecurring revenues	394,383	17,296,191	△ 16,901,808
(2) Nonrecurring expenditures			
Loss on retirement of fixed assets	14,962	153,134,625	△ 153,119,663
Total nonrecurring expenditures	14,962	153,134,625	△ 153,119,663
Nonrecurring increase/decrease for this term	379,421	△ 135,838,434	136,217,855
Pretax general net worth increase/decrease	60,964,336	△ 96,006,241	156,970,577
Corporate tax, inhabitant tax and business tax	70,000	70,000	0
General net worth increase/decrease for this term	60,894,336	△ 96,076,241	156,970,577
General net worth at the beginning of the term	4,310,661,866	4,406,738,107	△ 96,076,241
General net worth at the end of the term	4,371,556,202	4,310,661,866	60,894,336
II SPECIFIED NET WORTH INCREASE/DECREASE			
Change in specified net worth for this term	0	0	0
Specified net worth at the beginning of the term	202,110,494	202,110,494	0
Specified net worth at the end of the term	202,110,494	202,110,494	0
III NET WORTH AT THE END OF THE TERM	4,573,666,696	4,512,772,360	60,894,336

List of Assets

As of March 31, 2010

(Unit : Yen)

Account Title	Amount	
(ASSETS)		
I Current Assets		
Cash and deposit		
Ordinary deposit at Komagome Branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	13,029,595	
Time deposit at the above bank branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	864,000,000	
Postal transfer account	32,990	
Accounts receivable		
Accrued interest on securities, etc.	6,381,659	
Goods		
Publication, etc.	3,108,768	
Prepaid expenses		
Insurance premium, etc.	2,571,979	
Total current assets		889,124,991
II Fixed Assets		
(1) Basic assets		
Library materials		1,041,708,012
Japanese and Chinese books	515,330 books	
Western books	364,722 books	
Copied materials	29,800 items	
Land		110,494
Location	2-28-21 Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo	
Lot number	2-147-1 Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo	
Land category	Building land	
Area	3,687.63 square meters	
Guarantee money		50,000
Guarantee money to Nihon Keibi Hoshu Co., Ltd.		
Investment securities		
Securities to be held to maturity	2,842,500,000	
Deposit		
Ordinary deposit at Komagome Branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	115,322	
Total basic assets		3,884,483,828
(2) Specific assets		148,036,441
Buildings		
Location	2-28-21 Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo	
Buildings (annex building)	Construction (steel-frame building)	
Building area	1,415.17 square meters	
Total floor area	7,141.00 square meters	
Air-conditioning & plumbing, elevator machinery, utilities, etc.		
Structures		5,837,882
Construction in progress		916,738,465
Design fee		
Fixtures and fittings		133,660
Strongbox	1 items	
Guarantee money		220,000
Security deposit		
Allowance for retirement benefits		
Ordinary deposit at Komagome Branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	19,009,470	
Time deposit at the above bank branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	20,000,000	
Allowance for repairs of buildings and equipment		
Ordinary deposit at Komagome Branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	3,440,784	
Time deposit at the above bank branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	83,000,000	
Allowance for museum production expense		
Time deposit at the above bank branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	15,000,000	
Total specific assets		1,211,416,702
(3) Other fixed assets		274,235,919
Buildings		
Location	2-28-21 Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo	
Buildings	Construction Reinforced concrete structure	
Building area	1,415.17 square meters	
Total floor area	7,141.00 square meters	
Air-conditioning & plumbing, elevator machinery, utilities, etc.		
Structures		806,801
Fixtures and fittings		
Office furniture, etc.	145 items	18,174,336
Library materials		180,927,050
Japanese and Chinese books	10,764 books	
Western books	17,249 books	
Microfilms, etc.	532 books	
Softwares	3 items	8,052,813
Telephone rights	5 lines	364,000
Guarantee money		2,215,440
Security deposit		
Long-term prepaid expenses		1,358,727
Insurance premium		
Reserve for operation adjustments		
Ordinary deposit at Komagome Branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	37,455,950	
Time deposit at the above bank branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	60,000,000	
Total other fixed assets		383,591,036
Total fixed assets		5,679,491,566
TOTAL ASSETS		6,568,616,557
(LIABILITIES)		
I Current Liabilities		
Accounts payable	Publication printing fee, etc.	1,505,690
Deposits received	Withholding income tax on employees' wages, etc.	1,167,012
Allowance for bonuses	Cumulative allowance for bonuses to officers and employees	7,155,998
Total current liabilities		9,828,700
II Fixed Liabilities		
Allowance for retirement benef	Cumulative allowance for retirement benefits	39,009,470
Total fixed liabilities		39,009,470
TOTAL LIABILITIES		48,838,170
TOTAL NET WORTH		6,519,778,387

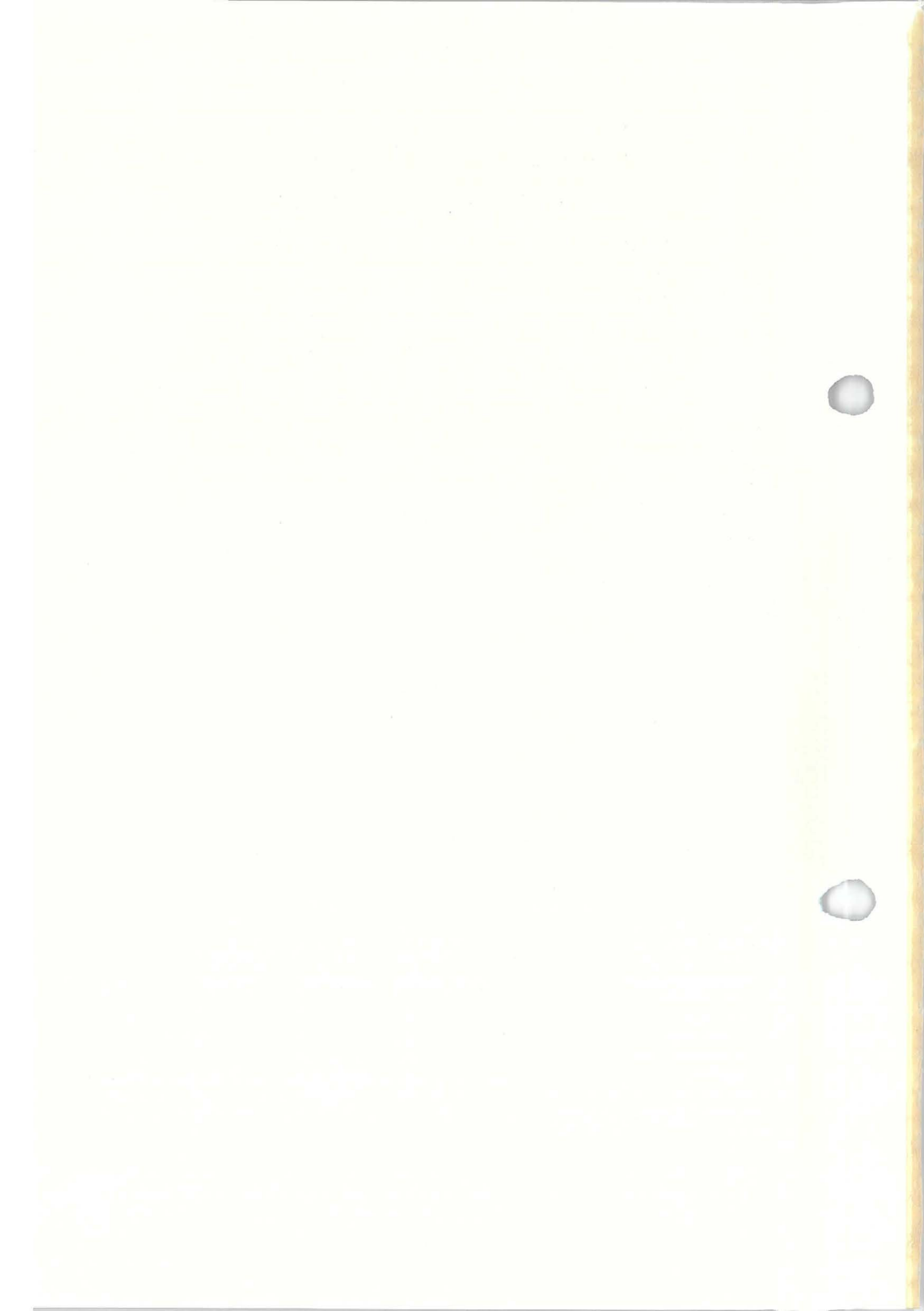
Income & Expenditure Statement of General Account

from April 1, 2009 to March 31, 2010

(Unit: Yen)

Account Title	Budget (A)	Settlement (B)	Increase/Decrease (A) - (B)	Remarks
I OPERATING ACTIVITIES				
1. Operating Revenues				
Financial revenue from basic assets	82,200,000	85,657,837	Δ 3,457,837	
Donations by Support Society	60,000,000	46,540,000	13,460,000	
Other donations	55,000,000	54,500,000	500,000	
Membership fee received	500,000	390,500	109,500	
Project fee received	25,000,000	20,000,000	5,000,000	
Contract research payment received	12,000,000	12,000,000	0	
Revenue from research	7,500,000	7,838,211	Δ 338,211	
Grants, etc.	110,000,000	110,000,000	0	
Other revenue	500,000	3,399,666	Δ 2,899,666	
Total operating revenues	352,700,000	340,326,214	12,373,786	
2. Operating Expenditures				
Operating expenses	266,200,000	236,413,430	29,786,570	
Library and research program	31,500,000	29,316,857	2,183,143	
Acquisition	38,000,000	38,313,628	Δ 313,628	
Publishing	21,500,000	23,456,128	Δ 1,956,128	
Research dissemination	19,000,000	16,232,185	2,767,815	
Academic information service	18,200,000	7,730,401	10,469,599	
Regional study program	25,000,000	16,508,249	8,491,751	
Contract research expense	12,000,000	9,243,325	2,756,675	
Payroll	76,000,000	78,220,897	Δ 2,220,897	
Office expenses	25,000,000	17,391,760	7,608,240	
Administrative expenses	38,000,000	42,144,289	Δ 4,144,289	
Payroll	35,000,000	39,042,118	Δ 4,042,118	
Office expenses	3,000,000	3,102,171	Δ 102,171	
Total operating expenditures	304,200,000	278,557,719	25,642,281	
Net operating activities	48,500,000	61,768,495	Δ 13,268,495	
II INVESTMENT ACTIVITIES				
1. Investment Revenues				
Operating expenses allowance	30,000,000	20,000,000	10,000,000	
Total investment revenues	30,000,000	20,000,000	10,000,000	
2. Investment Expenditures				
Acquisition of fixed assets	2,500,000	6,199,080	Δ 3,699,080	
Accrued retirement benefits	5,000,000	7,216,417	Δ 2,216,417	
Allowance for repairs of buildings and equipment (specific assets)	23,000,000	23,000,000	0	
Allowance for museum production expense	0	15,000,000	Δ 15,000,000	
Operating expenses allowance	48,000,000	35,000,000	13,000,000	
Total investment expenditures	78,500,000	86,415,497	Δ 7,915,497	
Net investment activities	Δ 48,500,000	Δ 66,415,497	17,915,497	
III FINANCIAL ACTIVITIES				
1. Financial Revenues				
0	0	0	0	
2. Financial Expenditures				
0	0	0	0	(Note)
Net financial activities	0	0	0	
Current balance	0	Δ 4,647,002	4,647,002	
Balance carried over from the previous term	5,689,282	5,689,282	0	
Balance carried forward to the next term	5,689,282	1,042,280	4,647,002	

(Note) The maximum borrowing limit: 30,000,000 yen



財団
法人

東洋文庫年報

2009 年度

2011 年 3 月 10 日発行

発行者 東京都文京区本駒込 2 丁目 28 番 21 号

財団法人 **東洋文庫**
榎 原 稔

印刷者 **サンワフォーム印刷(株)**
東京都豊島区東池袋 5-40-9 サン・ユースビル 2 階

発行所 東京都文京区本駒込 2 丁目 28 番 21 号

財団法人 **東洋文庫**

本書は財団法人東洋文庫に対する平成 22 年度文部科学省
補助金の一部によって刊行されたものである。

Toyo Bunko NENPŌ

Toyo Bunko Yearbook 2009

I	The Toyo Bunko's activities in FY2009	131
II	Activities Report	136
1.	Surveys and Research	136
2.	Source Material Collection and Cataloging	152
3.	Research Publications	153
4.	Dissemination of Information	155
5.	Scientific Information Availability	156
6.	Area Studies Program	159
7.	Contract Research	161
III	Accounting Report	162

TOYO BUNKO-The Oriental Library

Honkomagome 2-chome,28-21

Bunkyo-ku, Tokyo,

Japan
